

様式第2号の1 - 【 実務経験のある教員等による授業科目の配置】

大学・短期大学・高等専門学校は、この様式を用いること。専門学校は、様式第2号の1 - を用いること。

学校名	新潟大学
設置者名	国立大学法人新潟大学

1. 「実務経験のある教員等による授業科目」の数

学部名	学科名	夜間・通信制の場合	実務経験のある教員等による授業科目の単位数				省令で定める基準単位数	配置困難
			全学共通科目	学部等共通科目	専門科目	合計		
人文学部	人文学科	夜・通信	84	42		126	13	
教育学部	学校教員養成課程	夜・通信			138	222	13	
法学部	法学科	夜・通信		80		164	13	
経済科学部	総合経済学科	夜・通信		2		86	13	
経済学部	経済学科	夜・通信		57		141	13	
	経営学科	夜・通信				141	13	
理学部	理学科	夜・通信		46		130	13	
医学部	医学科	夜・通信			185.5	269.5	19	
	保健学科	夜・通信			317	401	13	
歯学部	歯学科	夜・通信			100	184	19	
	口腔生命福祉学科	夜・通信			92	176	13	
工学部	工学科	夜・通信		200		284	13	
農学部	農学科	夜・通信		106		190	13	
創生学部	創生学修課程	夜・通信		20		104	13	

(備考)

2. 「実務経験のある教員等による授業科目」の一覧表の公表方法

新潟大学ホームページにおいて公表 (URL は以下のとおり)

<https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/announce/studysupport/>

3. 要件を満たすことが困難である学部等

学部等名 なし

(困難である理由)

様式第2号の2 - 【 - 学外者である理事の複数配置】

国立大学法人・独立行政法人国立高等専門学校機構・公立大学法人・学校法人・準学校法人は、この様式を用いること。これら以外の設置者は、様式第2号の2 - を用いること。

学校名	新潟大学
設置者名	国立大学法人新潟大学

1. 理事（役員）名簿の公表方法

新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり） https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/organization/executive/

2. 学外者である理事の一覧表

常勤・非常勤の別	前職又は現職	任期	担当する職務内容 や期待する役割
常勤	北海道大学大学院先端 生命科学研究院教授	2020.2.1 ～ 2022.1.31	財務・社会連携担当
常勤	東北大学人事企画部長	2020.2.1 ～ 2022.1.31	総務・労務担当
非常勤	キャタピラー 代表執 行役員 渉外・広報室長	2020.4.1 ～ 2022.3.31	企画推進担当
(備考)			

様式第2号の3【 厳格かつ適正な成績管理の実施及び公表】

学校名	新潟大学
設置者名	国立大学法人新潟大学

厳格かつ適正な成績管理の実施及び公表の概要

<p>1. 授業科目について、授業の方法及び内容、到達目標、成績評価の方法や基準その他の事項を記載した授業計画書(シラバス)を作成し、公表していること。</p>	
<p>(授業計画書の作成・公表に係る取組の概要)</p> <p>シラバスについては、「シラバス作成に関するガイドライン」を策定している。シラバスに記載する各項目については、毎年、ガイドラインを見直し、改善案については、全学委員会等で審議を行い、承認されたガイドラインに基づき、全学で統一された基準の元、シラバスを作成している。</p> <p>公表については、例年、12月～1月にシラバスを作成後、2月から新潟大学ホームページ及び学務情報システムで公表している。</p>	
授業計画書の公表方法	新潟大学ホームページにおいて公表 (URL は以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/academics/syllabus/
<p>2. 学修意欲の把握、試験やレポート、卒業論文などの適切な方法により、学修成果を厳格かつ適正に評価して単位を与え、又は、履修を認定していること。</p>	

<p>(授業科目の学修成果の評価に係る取組の概要)</p> <p>学修成果の厳格かつ適正な評価に関しては、共通的な成績の評価基準を定め、「秀(100~90)」、「優(89~80)」、「良(79~70)」、「可(69~60)」、「不可(59~0)」で評価している。それぞれの評価の基準については、明文化された各授業科目の到達目標に対しての達成度を評価し、単位を与えている。</p> <p>(成績評価基準)</p> <p>秀 授業科目の目標を超えている。 優 授業科目の目標に十分に達している。 良 授業科目の目標に照らして一定の水準に達している。 可 授業科目の目標の最低限度を満たしている。 不可 授業科目の目標に達していない。</p>	
<p>3. 成績評価において、GPA等の客観的な指標を設定し、公表するとともに、成績の分布状況の把握をはじめ、適切に実施していること。</p>	
<p>(客観的な指標の設定・公表及び成績評価の適切な実施に係る取組の概要)</p> <p>新潟大学では、現在、7学部において、GPAによる成績評価を実施しており、統合型学務情報システムにより、全ての学生のGPAを下記の計算式に基づき算出している。</p> <p>算出されたGPAは、授業料免除、奨学金等の選考、履修指導等に活用している。</p> <p>$GPA = (\text{各授業科目の単位数}) \times (\text{各授業科目のGP}) \text{の総和} / (\text{履修した各授業科目の単位数}) \text{の総和}$</p> <p>ここでGPとは、$GP = (\text{成績評価} - 50) / 10$である。 この計算式は、欧米やアジア諸国への留学等の際にも活用できるものである。</p> <p>なお、GPAを導入していない教育学部、医学部(医学科、保健学科)及び歯学部(歯学科、口腔生命福祉学科)については、各授業科目の成績評価(100点満点)の合計を平均した数値を基に、適切に履修指導等を行っている。</p>	
<p>客観的な指標の算出方法の公表方法</p>	<p>新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/announce/studysupport/</p>
<p>4. 卒業の認定に関する方針を定め、公表するとともに、適切に実施していること。</p>	

<p>(卒業の認定方針の策定・公表・適切な実施に係る取組の概要)</p> <p>本学で定める人材育成目標に即し,各学部におけるディプロマ・ポリシーを策定し,本学のホームページで公表している。</p> <p>ディプロマ・ポリシーで定めた人材育成目標に対しての学修成果を図りつつ,カリキュラム・ポリシーに沿った各教育課程における卒業要件単位を修得した学生に対し,各学部の教授会において,学位授与の要件を満たしているかについて判定を行っている。</p>	
<p>卒業の認定に関する 方針の公表方法</p>	<p>新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/policies/</p>

様式第2号の4 - 【 財務・経営情報の公表(大学・短期大学・高等専門学校) 】

大学・短期大学・高等専門学校は、この様式を用いること。専門学校は、様式第2号の4 - を用いること。

学校名	新潟大学
設置者名	国立大学法人新潟大学

1. 財務諸表等

財務諸表等	公表方法
貸借対照表	新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/announce/finance/
収支計算書又は損益計算書	新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/announce/finance/
財産目録	-
事業報告書	新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/announce/finance/
監事による監査報告(書)	新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/announce/finance/

2. 事業計画(任意記載事項)

単年度計画(名称:国立大学法人新潟大学年度計画 対象年度:平成16年度~令和2年度)
公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/operation/plan/
中長期計画(名称:国立大学法人新潟大学中期目標 対象年度:平成16年度~平成33年度,国立大学法人新潟大学中期計画 対象年度:平成16年度~平成33年度)
公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/operation/plan/

3. 教育活動に係る情報

(1) 自己点検・評価の結果

公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.niigata-u.ac.jp/information/2019/57543/
--

(2) 認証評価の結果(任意記載事項)

公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり）
<https://www.niigata-u.ac.jp/information/2019/57542/>

(3) 学校教育法施行規則第 172 条の 2 第 1 項に掲げる情報の概要

教育研究上の目的、卒業の認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針、入学者の受入れに関する方針の概要

学部等名 人文学部
教育研究上の目的(公表方法:新潟大学人文学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり)) https://education.joureikun.jp/niigata_univ/act/frame/frame110000378.htm
(概要) 新潟大学人文学部規程(抜粋) (本学部の教育研究の目的) 第2条 本学部は、人間とその文化に関する多角的・総合的な研究に基づき、広い視野と深い教養、高い倫理性を備え、現代社会の多様な課題に対応できる人材を育成することを目的とする。
卒業の認定に関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり)) https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/humanity/threepolicies-f/
(概要) <u>心理・人間学プログラム</u> ○人材育成目標(卒業生が身につけるべき資質・能力) 本プログラムでは次のような資質・能力を身につけた人材育成を目指す。 心理学あるいは人間学のディシプリンを身につけ、その知識を体系的に表現することができる。 心や行動に対する科学的な分析、あるいは思想や芸術にまつわる理論的な洞察を行うことができる。 現代の「人」をめぐる問題に対して新たなアプローチをもって挑戦し、粘り強く取り組むことができる。 学位授与基準 修業年限 4 年以上在学し、人文学部が定める授業科目及び単位数(124 単位以上)を習得した者に、学士(文学)の学位を授与する。 ○プログラムの到達目標(目標としての学修成果) (1) 知識・理解 人間の心の働き・行動や、人間の知的営為・思想について、基本的な知識と理解をもつ。 人間の行動や心の働きに関わる代表的な科学的知見を理解する。 人間の行動や心の働きを科学的に評価する手法を理解し、その基礎を習得する。 哲学・倫理・宗教・芸術について、その歴史と理論を学び理解する。 人文科学分野の幅広い教養をもつ。 (2) 当該分野固有の能力 人間の行動の仕組みや心の働きについて、心理学的知見に基づいて理解、説明することができる。 人間の行動や心の働きについて、科学的に妥当な手法によって分析し、その結果を適切な形式で報告することができる。 専門職(公認心理師、臨床心理士、心理職公務員、研究者など)の職務のなかで、心理学の専門的知見を駆使することができる。 人間の精神活動としての哲学・倫理・宗教・芸術などを考察して、そこに現われる人間性の本質を深く理解することができる。 哲学思想の古典文献解釈や人間行動のデータ分析ができる。 人間の諸特性について、思想的洞察や実証的分析を通じた検討を行うことができる。

(3) 汎用的能力

外国語で表現された文章の読解や作成を行い、それをコミュニケーションのために用いることができる。

様々な状況や立場を想像しながら、どこに問題があるのかを見つけ出し、その問題の性質を明確に理解することができる。

問題の解決に向けて、情報を多角的に収集して分析し、効果的に活用することができる。

問題の解決に向けて、情報や知識を複眼的、論理的に構築することができる。

論理的に構造化された言語表現を用いて、自らの考えを発信することができる。

(4) 態度・姿勢

人間、社会、文化に関わる諸問題に多角的・分析的にアプローチを試み、主体的に取り組むことができる。

社会のなりたちとその歴史を深く理解し、人類が生み出した文化に敬意を持ち、その価値を後世に正確に伝えることができる。

身近な課題の探究を通して地域社会に貢献するとともに、異文化に対する理解を通して調和ある国際社会の形成に貢献する。

他者とのつながりを築き、互いを尊重しながら対話を営み、問題の解決に向けて協力することができる。

人間の関わる諸問題に科学的な態度をもって取り組むことができる。

社会文化学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本プログラムでは、歴史学、フィールドスタディーズ（考古学、地理学、民俗学、芸能論、社会学、文化人類学）、情報メディア論の各領域を学び、様々な地域における人間の社会文化的な営みを歴史的・動的に把握する力を身につける。それによって、現代社会のかかえる諸課題を発見し未来に向けて主体的に解決を図っていく能力を備えた人材、現代社会の歴史的・文化的・社会的背景に関する理解をもとに実践力を発揮できる人材、異文化を理解し様々な価値観をもつ人々と協働できる人材を育成する。

学位授与の条件

本プログラムの修業年限（第1年次を含め4年）以上在籍して、次にあげた到達目標を身につけ、所定の授業科目を124単位以上修得した者に学士（文学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

人間の社会文化的な営みについて、広範な視点から理解する

本プログラム各領域の理論と基礎的な知識を身につける

社会・文化の多様性と共通性、変遷過程を理解する

(2) 当該分野固有の能力

本プログラム各領域において用いる文献資料や非文字資料を適切に理解・分析できる

本プログラム各領域の理論・方法論を活用して社会文化的な事象について説明できる

本プログラム各領域で必要とされる調査の技法を身につけて実施し、結果を活用・発信できる

(3) 汎用的能力

自ら課題を設定し、複数の視点から批判的・総合的に考察し、解決・解明に向けて探求していくことができる

データ・的確な根拠にもとづき論理的に思考することができる

自らの考えを様々な手段で的確に表現・発信できる

外国語によるコミュニケーション能力を高め、異文化理解を深める

(4) 態度・姿勢

人間，社会，文化に関わる諸問題に多角的・分析的にアプローチを試み，主体的に取り組むことができる

異なる文化・価値観をもつ様々な人々と協働することができる

身近な課題の探究を通して，地域社会・国際社会に貢献する

言語文化学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

日本，中国，朝鮮，イギリス，アメリカ，ドイツ，フランス，ロシアの言語・文学・文化を専門的・総合的に把握する学問的探究を通じて，多様な価値観が存在する国際社会の中で活躍するための柔軟な思考力と協働的な行動力を有する人材を育成する。

学位授与の条件

本プログラムの修業年限（第1年次を含め4年）以上在籍して，次にあげた到達目標を身につけ，所定の授業科目を124単位以上修得した者に学士（文学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

言語・文学・文化研究の基本的方法・理論に基づき，言語文化を理解することができる。言語文化の多様性と共通性および変遷過程を知り，個別の言語文化を広い視野から位置づけ理解することができる。

言語文化を周辺諸学問との影響関係の中で理解することができる。

(2) 当該分野固有の能力

言語・文学・文化の各領域に関わる文献史料を適切に理解・分析することができる。

言語・文学・文化の各領域の研究手法・理論に基づき，言語文化に関する研究課題を深めることができる。

自身が専門とする言語文化に関する知識と高度な言語運用能力によって情報を発信することができる。

(3) 汎用的能力

多様な文化的状況への理解に基づき，社会における様々な問題を発見・理解することができる。

問題の解決に向けて，情報を多角的に収集して分析し，効果的に活用することができる。

他者と情報を共有しつつ，問題解決に向けた議論を構築することができる。

自身が専門とする言語文化に関する知識と高度な言語運用能力によって，異文化を背景とする他者とも相互理解を図ることができる。

(4) 態度・姿勢

人間，社会，文化に関わる諸問題に多角的・分析的にアプローチを試み，主体的に取り組むことができる。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/humanity/threepolicies-f/>

(概要)

心理・人間学プログラム

○カリキュラム編成，学修内容・方法と学修成果の評価方法

人文学部人文学科の学生は第1年次末に志望する学位プログラム（主専攻プログラム）を決め，第2年次からプログラムでの学修をはじめ。人文学部の授業科目開設にあたっては，教養教育と専門教育の連携の上に構築された学士課程教育の中で，確かな専門知識と幅広い教養を涵養し，人文的实践知を育むことを目指している。

そのためカリキュラム編成の枠組みは学部として共通化されており、大きく3つの科目群からなる。知識・理解科目群は、主として第1年次に履修する教養科目を基盤に、第2年次以降の基礎講義科目、第3年次以降の発展講義科目からなる。基礎講義科目と発展講義科目は関連する科目をまとめたモジュールという形で提供され、体系的・総合的な学修を可能としている。演習科目群には第1年次の人文初年次演習、第2年次の基礎演習、第3・第4年次の発展演習がある。年次ごとに段階的に進みながら、課題発見・分析・実践・協働・発信といった能力を、プログラム固有の方法に即しながら総合的に養成する。また、第2年次以降に履修できる表現プロジェクト演習は、とくに実践的な表現に重点を置いた教養科目である。リテラシー科目群には第1年次の人文学の技法を学ぶ入門講義、第1年次以降の英語・初修外国語科目、第2年次以降の実習・研究法科目があり、プログラムでの学修の基礎的リテラシーを修得しつつ、協働・実践の力を養う。こうした学修の集大成として第4年次に卒業論文を執筆する。

また、卒業後のキャリア・社会との関係について考えるキャリアデザインという科目が用意されている。海外研修・留学も推奨しており、海外の大学で修得した単位を卒業に必要な単位として認定できる。

学修内容に関して、心理・人間学プログラムでは心理学や哲学、宗教学、芸術に関わる学問分野の科目を提供し、人間の精神や思想、またそれらの表現についての多角的な学修を可能としている。基礎、中核、大学院接続の3科目群によるモジュールを配置し、教員免許（中学：社会，高校：公民）の取得に必要な科目や、本学他部局と連携して公認心理師資格の取得に必要な科目を提供し、大学院における心理専門職の養成にも対応している。学修成果の評価にあたっては、各授業科目の評価とともに、とくに集大成科目として卒業論文の評価を重視している。卒業論文の評価は提出された卒業論文の審査および口述試験により、複数の評価観点からおこなう。

社会文化学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

人文学部人文学科の学生は第1年次末に志望する学位プログラム（主専攻プログラム）を決め、第2年次からプログラムでの学修をはじめ。人文学部の授業科目開設にあたっては、教養教育と専門教育の連携の上に構築された学士課程教育の中で、確かな専門知識と幅広い教養を涵養し、人文的实践知を育むことを目指しており、とくに社会文化学プログラムでは社会文化学に関わる幅広い学問分野の科目を提供し、多様な視点からの学修を可能としている。また、史料/資料調査、フィールドワークといった実践的活動を重視している点もカリキュラムの特徴である。

カリキュラムは大きく3つの科目群からなる（別紙カリキュラムツリー参照）。知識・理解科目群は、主として第1年次に履修する教養科目を基盤に、第2年次以降の基礎講義科目、第3年次以降の発展講義科目からなる。基礎講義科目と発展講義科目は関連する科目をまとめたモジュールという形で提供され、体系的・総合的な学修を可能としている。演習科目群には第1年次の人文初年次演習、第2年次の基礎演習、第3・第4年次の発展演習がある。年次ごとに段階的に進みながら、課題発見・分析・実践・協働・発信といった能力を、プログラム固有の方法に即しながら総合的に養成する。また、第2年次以降に履修できる表現プロジェクト演習は、とくに実践的な表現に重点を置いた教養科目である。リテラシー科目群には第1年次の人文学の技法を学ぶ入門講義、第1年次以降の英語・初修外国語科目、第2年次以降の実習・研究法科目があり、プログラムでの学修の基礎的リテラシーを修得しつつ、協働・実践の力を養う。こうした学修の集大成として第4年次に卒業論文を執筆する。

以上のほかに、卒業後のキャリア・社会との関係について考えるキャリアデザインという科目が人文学部共通で用意されている。海外研修・留学も推奨しており、海外の大学で修得した単位を卒業に必要な単位として認定できる。また、教員免許（中学：社会，高校：地理歴史，公民，情報），社会調査士資格，学芸員資格の取得に必要な科目も提供している。

学修成果の評価にあたっては、各授業科目の評価とともに、とくに集大成科目として卒

業論文の評価を重視している。卒業論文の評価は提出された卒業論文の審査および口述試験により、複数の評価観点からおこなう。

言語文化学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

人文学部人文学科の学生は第1年次末に志望する学位プログラム（主専攻プログラム）を決め、第2年次からプログラムでの学修をはじめめる。人文学部の授業科目開設にあたっては、教養教育と専門教育の連携の上に構築された学士課程教育の中で、確かな専門知識と幅広い教養を涵養し、人文的実践知を育むことを目指しており、とくに言語文化学プログラムでは言語文化学に関わる幅広い学問分野の科目を提供し、多様な視点からの学修を可能としている。また、異なる言語・文学・文化を横断的に探求し、総合的に把握することを可能にしている点もカリキュラムの特徴である。

カリキュラムは大きく3つの科目群からなる（別紙カリキュラムツリー参照）。知識・理解科目群は、主として第1年次に履修する教養科目を基盤に、第2年次以降の基礎講義科目、第3年次以降の発展講義科目からなる。基礎講義科目と発展講義科目は関連する科目をまとめたモジュールという形で提供され、体系的・総合的な学修を可能としている。演習科目群には第1年次の人文初年次演習、第2年次の基礎演習、第3・第4年次の発展演習がある。年次ごとに段階的に進みながら、課題発見・分析・実践・協働・発信といった能力を、プログラム固有の方法に即しながら4年間を通して総合的に養成する。また、第2年次以降に履修できる表現プロジェクト演習は、とくに実践的な表現に重点を置いた教養科目である。リテラシー科目群には第1年次の人文学の技法を学ぶ入門講義、第1年次以降の英語・初修外国語科目、第2年次以降の実習・研究法科目があり、プログラムでの学修の基礎的リテラシーを修得しつつ、協働・実践の力を養う。こうした学修の集大成として第4年次に卒業論文を執筆する。

以上のほかに、卒業後のキャリア・社会との関係について考えるキャリアデザインという科目が人文学部共通で用意されている。海外研修・留学も推奨しており、海外の大学で修得した単位を卒業に必要な単位として認定できる。また、教員免許（中学：国語、高校：国語）の取得に必要な科目も提供している。

学修成果の評価にあたっては、各授業科目の評価とともに、とくに集大成科目として卒業論文の評価を重視している。卒業論文の評価は提出された卒業論文の審査および口述試験により、複数の評価観点からおこなう。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/humanity/threepolicies-f/>

（概要）

（1）入学者に求める学力

- ・人文学部で学ぶことのできる分野に関する基礎的な知識と技能
- ・基礎学力に立脚した豊かな思考力・判断力・表現力
- ・人間・社会・文化に関わる諸問題に主体的に取り組み、仲間との協働作業により、多様な答えを追求する力

（2）入学者選抜方法

一般選抜（前期日程）

高等学校卒業レベルの基礎学力を持つとともに、人文学部での学修に関連する科目の理解と応用能力を備えた人を選抜する。

大学入学共通テストでは、5教科7科目もしくは8科目又は6教科7科目もしくは8科目の試験を課し、高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。個別学力検査では、国語と外国語を必修科目として課し、人文学を学ぶ上で基盤となる科目への理解度と応用能力を評価する。また数学と地理歴史から1教科を選択科目として課し、人文学の各分野に対する適性を評価する。

<p>一般選抜（後期日程） 高等学校卒業レベルの基礎学力を持つとともに、論理的な思考能力と表現能力を備えた人を選抜する。 大学入学共通テストでは、5教科7科目もしくは8科目又は6教科7科目もしくは8科目の試験を課し、高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。個別学力検査では、総合問題を課し、人間・社会・文化の学修に関する適性を評価する。</p> <p>学校推薦型選抜 高等学校卒業レベルの基礎学力を持つとともに、上記の「求める学生像」にふさわしい人を選抜する。 大学入学共通テストでは、3教科3科目を課し、高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。小論文と面接では、人文学に対する学習意欲と適性を評価する。</p>
<p>学部等名 教育学部</p>
<p>教育研究上の目的（公表方法：新潟大学教育学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり）） https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110000384.htm</p>
<p>（概要） 新潟大学教育学部規程（抜粋） （教育研究の目的） 第1条の2 本学部は、学校教育に関する研究を基盤として、その専門的な理論及び技術・技能を身につけ、広く生涯学習社会における諸課題に即応できる実践的能力を備えた教育的指導者の養成を目的とする。</p>
<p>卒業の認定に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり）） https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/education/threepolicies-f/</p>
<p>（概要） <u>学校教員養成プログラム</u> 人材育成目標 本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（教育学）の学位を授与する。総合大学としての新潟大学で学ぶ利点を活かし、学校教員として必要とされる理論知の基礎を体系的に提供し、体系的な教育実習を通しての実践知を経験する機会を提供し、理論的知識を深める方法の基礎を修得させることにより、教師に不可欠な人間関係を形成する能力、子どもの発達と教育に関する基礎的な知識、および教科の内容と教育法の基礎的な知識を有し、かつ、一生涯にわたって学び続け、学びの成果を他者と共有することのできる教師を育成することを目標とする。プログラムの修了者には、教育職員免許法で定める小学校教諭一種免許状・中学校教諭一種免許状（各教科）・特別支援学校教諭一種免許状等を取得できる資格が与えられる。プログラムの修了者は、新潟市をはじめとする新潟県内や隣接自治体において、人格・能力ともに優れた学校教員や特別支援学校教員等として活躍することが期待される。</p> <p>○プログラムの到達目標（目標としての学修成果） （1）知識・理解 ・子どもの発達、教育、学校制度、教育課程、教育心理等に関する知識。 ・教科教育に必要とされる各教科の理論 知のエッセンシャルに関する知識。 ・子どもの発達に合わせて子どもに教科に関する教育を効果的に行うにあたって求められる教育内容の精選と配列、ICTを含む教材、および発問と板書を含む教育方法の在り方に関する知識、ならびに、文部科学大臣が告示する学習指導要領の意義および、それを効果的に参照し、利用することに関する知識。 障 害のある子どもの発達の特性およびその特性に応じた教育と生活指導に関する知識。</p>

•子どもが直面している不登校、いじめ、校内暴力、自殺、貧困等の困難の原因に関する知識、および、これらの困難への事後的・個別的对応の在り方に関する知識、ならびに、子どもが直面する困難の事前的・一般的な解決の重要性とその在り方に関する知識。

•子どもが学校において集 团的に学習し、生活をすることの意義、および 集 团的学習と生活に資する生活指導、学級運営および学校運営の在り方に関する知識。

•教員同士および学校内外における他の専門職、さらには親と地域住民と協働して学校を運営することの意義および方法に関する知識。

•学校における子どもの安全を確保する責任と義務、および、子どもが主体的に自らの安全を確保することの意義とそれを実現する教育のあり方に関する知識。

•教員育成指標に関する知識。

(2) 当該分野固有の能力

•子どもの発達に関する理論 知と人文社会科学および自然科学の理論 知とを統合して、教育を実行する能力。

•人文社会科学および自然科学の理論 知のエッセンシャルを見出す能力。

•子どもの問題行動の原因を、人文社会科学および自然科学の理論 知を動員して特定し、問題行動を、学校教育を通じて、または、より広く市民社会における民主的過程を通して解決する方法を見出し、それを実行する能力。

•子どもが集 团的に学習し、生活をする場である学校において、効果的に学級を運営し、かつ、教員同士および学校内外における他の専門職、さらには親と地域住民と協働して学校を運営するのに必要な人間関係をつくる能力および組織の効果的な運営に参加しまたは組織を指揮する能力。

•障 害のある子どもの発達の特性を見出し、それに応じた教育を実行する能力。

•以上の能力に教員養成指標において求められていることを統合する能力。

(3) 汎用的能力

•理論 知のエッセンシャルを見出し、それを専門家ではない人に効果的に伝える能力。

•理論 知を自らの手で深め、深めることのできた理論 知を効果的に伝える能力。

•専門職の社会的意義および専門職に求められる倫理を理解する能力。

•様々な領域の理論 知を統合する能力。

•理論 知と実践 知を統合する能力。

(4) 態度・姿勢

•親や地域住民からの要求、および、子どもの日常的な言動の背後にある子どもの要求を受け止め、かつ、要求に応える教育を実行し、向上させることに集中する姿勢。

•教育専門職である教員に求められる職業倫理および法律上の責任・義務を積極的に遵守する態度。

•子どもの発達上の諸課題に、学校における教員同士、および学校内外の他の専門職と協働して応答することに集中する姿勢。

•以上の姿勢と態度に教員育成指標に求められている姿勢と態度を統合しようとする姿勢。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/education/threepolicies-f/>

（概要）

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

•カリキュラムは理論 知の修得と実践 知の経験の双方をバランスよく学修できるようにすることを基本方針とする。

•カリキュラムは、教職に関わる理論 知の基礎の修得を目的とする講義（いわゆる教職専門科目）、理論知の修得を目的とする講義および演習・実験・実習、実践知を経験する教育実習、理論知を深める方法および深められた理論知を効果的に他者と共有する卒業研究、ならびに、教育実習を通して蓄積してきた実践知を総合する科目（教職実践演習など）か

ら構成される。

●理論 知の学修は、講義を通して行われるだけでなく、個々の教員が行う少人数ゼミにおける理論知の獲得と形成への主体的な参加を通して、そして、教員集団の指導の下で、学生自身が「問い」を確定し、独自の「解」を先行研究の成果に依拠しながら見出し、独自の「解」を他者と効果的に共有するという学生の自律性を重視したプロセスを通して行われる。

●実践 知の経験と総合化は、4年間を通じて行われる体系的な教育実習（観察実習、教育実習、学習指導ボランティア）およびその振り返りと総合化（教職実践演習）を通して行われる。

理論知の習得の有無は必修科目および選択科目に関する必要単位数の習得の有無により判定し、理論知を深める方法の基礎の習得と深められた理論知を他者に効果的に伝える方法の習得の有無は、卒業研究（卒業論文、卒業制作、実技）審査等により総合的に判定し、教育実践を進める力の習得については、教育実習および教職実践演習の習得の有無により総合的に判定する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/education/threepolicies-f/>

（概要）

（１）入学者に求める学力

- 1-1 幅広い科目にわたって確かな学力を有している人。
- 1-2 関心を持つ科目において優れた学力を有している人。
- 2-1 自ら考え、自らの答えを見出し、それを表現することができる人。
- 3-1 他者と建設的な対話を行い、課題を特定し、課題を解決する方途を考えられる人。
- 3-2 教師になるための学びに積極的に向かうことができる人。

（２）入学者選抜方法

一般選抜（前期日程）

大学入学共通テストでは、5教科7科目もしくは8科目又は6教科7科目もしくは8科目等の試験を課し、高等学校卒業レベルの学力を幅広い教科にわたって獲得しているのかがどうかを評価する。個別学力検査では、英語、国語、数学、理科から2科目又は実技検査を課し、関心を持つ科目の学力を評価する。面接試験では集団討論、集団面接又は個人面接を通じて自ら考えて答えを出し、その答えを表現する能力、および、他者と建設的な対話をする能力を評価する。調査書等および志望理由に基づいて教員になるための学びに積極的に向かうことができるのかを評価する。

学校推薦型選抜

大学入学共通テストにおける5教科7科目もしくは8科目又は6教科7科目もしくは8科目の成績の合計点によって高校卒業者に求められる基礎的な学力を幅広い教科にわたって有しているのかを評価する。調査書における評点に基づいて関心のある教科の学力を評価する。面接試験では複数の面接官との質疑応答または集団討論を通じて自ら考えて答えを出し、その答えを表現する能力、および、他者と建設的な対話をする能力を評価する。高等学校長又は中等教育学校長等による「小学校または特別支援学校の教員になる意志と情熱を持つ人」との推薦書および志望理由書に基づいて教員になるための学びに積極的に向かうことができるのかを評価する。

学部等名 法学部

教育研究上の目的（公表方法：新潟大学法学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

https://education.joureikun.jp/niigata_univ/act/frame/frame110000435.htm

(概要)

新潟大学法学部規程(抜粋)

(本学部の教育研究の目的)

第1条の2 本学部は、企業法務、行政法務及び国際法政に関する研究を基盤として、リーガル・マインド(法学的な考え方)とともにリーガル・リテラシー(法の仕組みや考え方を理解し、それを活用する力)を身に付け、新しい社会状況のなかで必然化する法化社会(自由と公正を核とする法秩序が国民の日常生活に機能している社会)において、国際化、情報化、地域化に対応できる総合能力を持った人材の養成を目的とする。

卒業の認定に関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり))

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/law/threepolicies-f/>

(概要)

法学プログラム

人材育成目標

自治体・民間企業を問わず、様々な場面において新たな社会動向に対応して生ずる新たな課題を発見し解決するために、従来の知識と新たな発想を分野横断的に組み合わせつつ、公平・公正なルールに鑑みた望ましい解決策を考えることができる人材を育成する。学位授与の条件は以下の通りである。本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、かつ所定の卒業要件を満たしかつ124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に学士(法学)の学位を授与する。

○プログラムの到達目標(目標としての学修成果)

(1) 知識・理解

法学を学ぶ者に共通して必要とされる専門的学識(専門的な法律知識)を身に付ける。具体的には以下の4点を重視する。

- 法学の基礎的な概念・用語を理解する。
- 法体系や現行の政治・行政制度の基本構造を理解する。
- 特定の法分野の理論・構造を体系的に理解する。
- 法学の理論・学説・主要な判例について基本的な説明ができる。

(2) 当該分野固有の能力

法学を学ぶ者に共通して必要とされる専門的学識の応用能力(法的な推論、分析、構成及び論述の能力)を身に付ける。具体的には以下の4点を重視する。

- 個別の事案に対し、どのように法を適用するかを説明できる。
- 法や政治の諸事象の問題の所在を認識し説明することができる。
- 諸課題の解決策について、法学の観点から自説を展開することができる。
- 情報を整理し、考察を加え、自説を的確かつ論理的に文章化できる。

(3) 汎用的能力

将来の実務に必要な学識及び能力並びに素養を身に付ける。具体的には以下の4点を重視する。

- ICTを活用し、情報の収集、整理、発信をすることができる。
- 自ら問題を発見し、解決策を立案し、解決に導くことができる。
- 自分の有する情報や相手の意見を踏まえ、自分の考えを自分の言葉で相手に分かりやすく、かつ、正確に伝えることができる。
- 外国語の文章を読み、外国語で議論を行うことができる。

(4) 態度・姿勢

基本的人権の擁護と社会正義の実現に貢献することを目指すこと。具体的には以下の4点を重視する。

- 法学を高い意欲のもと主体的に学ぶことができる。

- 多様な意見に耳を傾けつつ積極的に議論に参加することができる。
- 基本的人権を擁護する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。
- 社会正義を追求する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。

法曹養成プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

新潟大学の理念である「自律と創生」のもと、様々な場面において新たな社会動向に対応して生ずる課題を発見し解決するために、従来の知識と発想を分野横断的に組み合わせつつ、公平・公正なルールに鑑みた望ましい解決策を考えることができる人材を育成する。とくに法曹養成プログラムにおいては、法曹になろうとする者に必要とされる法律的な専門知識及び法的な推論、分析、構成及び論述の能力を涵養する。学位授与の条件は以下の通りである。本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、かつ所定の卒業要件を満たしかつ 124 単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に学士（法学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

法曹になろうとする者に共通して必要とされる専門的学識（専門的な法律知識）を身に付ける。具体的には以下の 4 点を重視する。

- 法学の基礎的な概念・用語を理解する。
- 法体系や現行の政治・行政制度の基本構造を理解する。
- 特定の法分野の理論・構造を体系的に理解する。
- 法学の理論・学説・主要な判例について基本的な説明ができる。

（2）当該分野固有の能力

法曹になろうとする者に共通して必要とされる専門的学識の応用能力（法的な推論、分析、構成及び論述の能力）を身に付ける。具体的には以下の 4 点を重視する。

- 個別の事案に対し、どのように法を適用するかを説明できる。
- 法や政治の諸事象の問題の所在を認識し説明することができる。
- 諸課題の解決策について、法学の観点から自説を展開することができる。
- 情報を整理し、考察を加え、自説を的確かつ論理的に文章化できる。

（3）汎用的能力

将来の実務に必要な学識及び能力並びに素養を身に付ける。具体的には以下の 4 点を重視する。

- ICTを活用し、情報の収集、整理、発信をすることができる。
- 自ら問題を発見し、解決策を立案し、解決に導くことができる。
- 自分の有する情報や相手の意見を踏まえ、自分の考えを自分の言葉で相手に分かりやすく、かつ、正確に伝えることができる。
- 価値の多元性を理解し、意思や利害の対立を解決に導くことができる。

（4）態度・姿勢

基本的人権の擁護と社会正義の実現に貢献することを目指すこと。具体的には以下の 4 点を重視する。

- 法曹を目指すという高い意欲のもと主体的に学ぶことができる。
- 多様な意見に耳を傾けつつ積極的に議論に参加することができる。
- 基本的人権を擁護する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。
- 社会正義を追求する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/law/threepolicies-f/>

(概要)

法学プログラム

○教育課程の編成方針

法学プログラムは4年間の法学の学びを体系的に編成するものである。その基礎となるのは、憲法、民法、刑法の講義科目である。また、1年次の「スタディ・スキルズ」、2年次の「基礎演習(憲法・民法・刑法)」、3年次の「法政演習」、4年次の「卒業研究」「ジュニア・リサーチ・ペーパー」といった演習科目を配置し、学生の主体的な学びを支援する。法学プログラムでは、法学部での4年間の学びを大きく3つのステップに分けて編成する。3つのステップとは、「大学学習準備」「法的ルールの基礎学修」「進路選択・学修完成」である。

○教育内容や方法に係る方針

第1ステップの「大学学習準備」では、大学の学びに必要なスキルの修得や法学の基礎的素養を養う。また、法学部における専門教育を受けるための導入として、社会における法の役割について学ぶ。具体的には、法学を学ぼうとする学生に早期に専門教育の機会を提供するため、1年次第1学期より、法学部導入科目である「人文社会科学入門(法学)」及び「リーガル・システム」を履修する。また、演習科目として「スタディ・スキルズ」を配置し、高校までの学びから大学における法学の学びへの転換を支援する。

第2ステップの「法的ルールの基礎学修」では、法学及びそれに関連する領域関連科目を主として履修する。法学の基幹科目である憲法・民法・刑法については、それぞれの講義科目に対応させつつ、「基礎演習」との組み合わせを、憲法・民法・刑法のいずれかで完成させる。具体的には、2年次の「憲法基礎演習」「民法基礎演習」「刑法基礎演習」において、少人数の演習を実施する。学生は、これら3つのうち少なくとも1つを履修しなければならない。

第3ステップの「進路選択・学修完成」では、社会の様々な問題を法的に対処するための問題解決能力を養うとともに社会人となるための基礎的素養を完成させる。具体的には、専門的知識、課題発見能力、ディスカッション能力等を涵養するため、特定の分野に関する少人数での3年次の必修演習科目として「法政演習」を、4年次の必修演習科目として「卒業研究」を履修する。さらに4年次には、「ジュニア・リサーチ・ペーパー」を必修科目として履修し、本プログラムの集大成を図る。

○学修成果の評価に係る方針

本プログラムにおいて重視する学修成果は、法的な推論、分析、構成及び論述の能力に関係している。このため、中核となる専門講義科目については、定期試験において記述式試験を原則とし、厳格な相対評価を実施する。また、専門演習科目については、「卒業研究」「ジュニア・リサーチ・ペーパー」を集大成科目として位置づけ、これらの科目において文書作成能力を涵養する。

法曹養成プログラム

○教育課程の編成方針

法曹養成プログラムは、本学法学部における4年間の法学の学びを体系的に編成するものである。また、法曹養成プログラムは、法科大学院における2年間の既修者コースへの進学を前提とし、法科大学院における未修者コースの1年次までの学修内容を法学部での学びにおいて完成させようとするものである。すなわち法曹養成プログラムは、学部・大学院を通じた6年間の一貫性のある体系的な法学教育を前提とするものであることができる。法曹養成プログラムの具体的内容は、「憲法」「行政法」「民法」「商法」「民事訴訟法」「刑法」及び「刑事訴訟法」に関する分野の科目を含む法科大学院における法律基本科目に対応する科目(以下、基本7法科目という)を中核とする。また、1年次の「スタディ・スキルズ」、2年次の「基礎演習(憲法・民法・刑法)」、3年次の「法文書作成」「法政演習」、4年次の「卒業研究」「ジュニア・リサーチ・ペーパー」といった演習科目を配置し、学生の主体的な学びを支援する。法曹養成プログラムでは、法学部での

4年間の学びを大きく3つのステップに分けて編成する。3つのステップとは、「大学学習準備」「法的ルールの基礎学修」「進路選択・学修完成」である。

○教育内容や方法に係る方針

第1ステップの「大学学習準備」では、大学の学びに必要なスキルの修得や法学の基礎的素養を養う。また、法学部における専門教育を受けるための導入として、社会における法の役割について学ぶ。具体的には、法曹を志す学生に早期に専門教育の機会を提供するため、1年次第1学期より、法学部導入科目である「人文社会科学入門(法学)」及び「リーガル・システム」を履修する。また、演習科目として「スタディ・スキルズ」を配置し、高校までの学びから大学における法学の学びへの転換を支援する。

第2ステップの「法的ルールの基礎学修」では、法律学及びそれに関連する領域関連科目を主として履修する。法律学の基幹科目である憲法・民法・刑法については、それぞれの講義科目に対応させつつ、「基礎演習」との組み合わせを、憲法・民法・刑法のいずれかで完成させる。具体的には、2年次の「憲法基礎演習」「民法基礎演習」「刑法基礎演習」において、少人数の演習を実施する。学生は、これら3つのうち少なくとも1つを履修しなければならない。

第3ステップの「進路選択・学修完成」では、社会の様々な問題を法的に対処するための問題解決能力を養うとともに法科大学院に進学するための基礎的素養を完成させる。具体的には、法的な議論と法文書の作成に係る実践的な能力の涵養を目的とし、3年次に「法文書作成」を履修する。また、法曹に求められる専門的知識、課題発見能力、ディスカッション能力等を涵養するため、特定分野に関する少人数での3年次の必修演習科目として「法政演習」を、4年次の必修演習科目として「卒業研究」を履修する。さらに4年次には、「ジュニア・リサーチ・ペーパー」を必修科目として履修し、本プログラムの集大成を図る。

○学修成果の評価に係る方針

本プログラムにおいて重視する学修成果は、高い法的な推論、分析、構成及び論述の能力である。このため、基本7法科目を中核とする専門講義科目については、定期試験において記述式試験を原則とし、厳格な相対評価を実施する。また、専門演習科目については、高度な法文書作成能力の涵養を目的としてきめ細かな指導を徹底する。具体的には、「卒業研究」「ジュニア・リサーチ・ペーパー」を集大成科目として位置づけ、これらの科目において法文書作成能力を涵養する。なお、法曹養成プログラムでは、とくに優秀な学生について、3年次での早期卒業を可能である。その場合には、通常の卒業要件に比べ、高い成績要件(基本7法科目の3分の2以上が「秀」または「優」であること及び全履修科目の累積GPAの値が2.8以上であること)であることを要件とする。

入学者の受入れに関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり))

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/law/threepolicies-f/>

(概要)

(1) 入学者に求める学力

- 高校卒業程度の基礎学力を身に付けていること(知識・技能)
- 法学を学ぶための論理的思考力や読解能力、表現能力を有すること(思考力・判断力・表現力等)
- 目的意識や主体性を持って学び、他者と協働することができること(学びに向かう力・人間性等)

(なお、新潟大学法学部の教育理念・目的をよく理解した上で、将来、様々な場面において広く活躍したいという意欲を有する者であって、潜在的・顕在的に、現代社会の諸問題に対する解決策を公正・公平な観点から理論的に考え、国際化・情報化に対応するコミュニケーション能力及び総合的な視野に立った政策提案能力を有していると認められる者を評価する。)

(2) 入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

高等学校卒業程度の十分な基礎学力を有するとともに、論理的思考能力や読解能力に優れ、問題発見、課題処理、結果の評価といった局面において、国際化、情報化、地域化などの社会変動に対応できる総合能力がある人材を選抜する。大学入学共通テストでは、高等学校卒業程度の基礎学力を評価する。個別学力検査では、外国語、小論文を課し、法学を学ぶ上で特に重要な論理的思考能力や読解能力、表現能力を評価する。

一般選抜(後期日程)

高等学校卒業程度の十分な基礎学力を有するとともに、論理的思考能力や読解能力に優れ、問題発見、課題処理、結果の評価といった局面において、国際化、情報化、地域化などの社会変動に対応できる総合能力がある人材を選抜する。大学入学共通テストでは、高等学校卒業程度の基礎学力を評価する。個別学力検査では、小論文を課し、法学を学ぶ上で特に重要な論理的思考能力や読解能力、表現能力を評価する。

学校推薦型選抜

人格・学業ともに優れ、目的意識が明確で、問題発見、課題処理、結果の評価といった局面において、国際化、情報化、地域化などの社会変動に対応できる能力があり、多様な価値観の中で自己を研鑽することのできる人材を選抜する。調査書、推薦書、自己申告書及び面接を通して、新潟大学法学部の教育理念・目的をよく理解した上で、将来、様々な場面において広く活躍したいという意欲を有する者であって、潜在的・顕在的に、現代社会の諸問題に対する解決策を公正・公平な観点から理論的に考え、国際化・情報化に対応するコミュニケーション能力及び総合的な視野に立った政策提案能力を有していると認められる者を総合的に評価する。

学部等名 経済科学部

教育研究上の目的(公表方法:新潟大学経済科学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり))

https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110001598.htm

(概要)

新潟大学経済科学部規程(抜粋)

(教育研究の目的)

第2条 本学部は、新潟大学の理念である自律と創生に基づき、経済学・経営学をはじめとする人文社会科学分野の幅広い学識に裏打ちされた課題探究能力を持ち、地域社会の着実な発展に貢献できる人材を育成することを目的とする。

卒業の認定に関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり))

<https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/economics/threepolicies-f/>

(概要)

経済学プログラム

人材育成目標(卒業生が身につけるべき資質・能力)

豊かな知的探求心を持ちながら、修得した経済学の知識を中心にした幅広い視野から課題を探究できる能力を有し、国内外の企業や公的団体などで中核的役割を担いうる資質を有する人材を育成する。具体的な目標は次の通りとする。

●経済理論や経済政策に関する知識を活用して、経済社会の多様な課題を理解・分析し、その解決策を模索することができる。

●統計データを活用して、社会的現象を経済学の観点から理解し、分析することができる。

●世界の経済成長と格差が生み出される背景を捉え、問題解決に導くための論理的能力を涵養することができる。

●世界各地の社会経済の歴史・現状をめぐる知識と理解を応用し、現実の社会問題を根源的に考察できる。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で、人材育成目標に係る上記の能力を有すると認められる者に、学士（経済学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

◆個々の家計や企業の行動を理解し、市場の役割についての知識を修得する。

集計された家計や企業の行動を理解し、景気変動とそれに対する政策対応の知識を修得する。

現代の経済社会の成り立ちや仕組みを体系的に把握することができる。

◆市場社会の世界史的な発達と変容を網羅的に理解することができる。

◆経済学の観点から様々な事象を理解することができる。

（2）当該分野固有の能力

◆経済理論や経済政策に関する知識を活用して、経済社会の多様な課題を理解・分析し、その解決策を模索することができる。

◆統計データを活用して、社会的現象を経済学の観点から理解し、分析することができる。

◆世界の経済成長と格差が生み出される背景を捉え、問題解決に導くための論理的能力を涵養することができる。

◆世界各地の社会経済の歴史・現状をめぐる知識と理解を応用し、現実の社会問題を根源的に考察できるようになる。

（3）汎用的能力

◆外国語を利用して、異文化について幅広く情報を集めることができる。

◆数学や統計学の基礎知識を用いて、基本的な演算やデータに基づいた客観的な分析を行うことができる。

◆読み手や聞き手の立場に立って、自分の意見を論理的・体系的に伝達すると同時に、他者の意見を聞くことができる。

◆物事を論理的に考察することができる。

◆幅広く、深い教養をもとに、様々な現象を考察し、その本質を理解することができる。

（4）態度・姿勢

◆経済社会で現実に行き起きている問題に自ら気づき、経済理論の基礎知識をもとに理解しようとする自発的な行動をとることができる。

◆社会の多様な問題に対して、専門分野および周辺領域の知識を活用して積極的に取り組むことができる。

◆文化や言語の異なる人も含めて、他者の多様な考えに共感し、それを尊重することができる。

◆企業や個人の行動が社会にどのような影響を与えるかを考え、社会的責任を踏まえた行動ができるようになる。

経営学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

企業の経営管理をめぐる諸問題を考えていくうえで必要となる経営学と企業活動を計数面から把握する会計学の専門知識の修得を通じて、民間企業のみならず公的機関や会計事務所・監査法人などにおいても活躍できる人材を育成する。具体的な目標は次の通りとする。

◆経営学に関する知識の修得により、企業組織の設計・運営にかかわる諸問題、および市場や競争相手といった外部環境と対峙する際にとり得る手法の成果を分析できる。

●会計学・税法に関する専門知識を修得し、会計税務に関する基本的な実務を行うために必要な知識とスキルを身に付けることで、企業行動や企業の経営状態、また企業に必要な会計情報システムを分析することができる。

●修得した専門知識と理論を活用して、現実の社会問題の解決に取り組むことができる。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、人材育成目標に係る上記の能力を有すると認められる者に、学士（経営学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

●企業の経営管理の諸問題を考えていく上で、必要となる経営学の基礎知識を修得する。

●企業活動を計数面から把握するために必要不可欠な簿記、財務会計、管理会計及び税法に関する基礎知識を修得する。

（2）当該分野固有の能力

●経営学の諸理論に基づいて、企業におけるヒト・モノ・カネ・情報などの経営資源の働きとそれらを活用するための手法について理解し、企業組織の設計・運営にかかわる諸問題を分析することができる。

●経営学の諸理論に基づいて、企業が市場顧客、競争相手といった外部の環境と対峙する際にとり得る手法について理解し、それらがいかなる成果をもたらし得るか分析することができる。

●財務会計、管理会計及び税法に関する専門理論を修得し、これら理論を活用して、企業行動や企業の経営状態を分析したり、企業に必要な会計情報システムを分析したりすることができる。

●簿記処理や会計・税法に関する計数管理の技能を修得し、会計・税務に関する基本的な実務を行う素養を身に付けることができる。

（3）汎用的能力

●読み手や聞き手の立場立って、自分の意見を論理的、体系的に伝達することができる。英語および英語以外の外国語について、学士レベルで求められる基本的な活用能力（文章読解・文章作成）を発揮することができる。

●他者と、外国語による基本的なコミュニケーション（会話 E-mail 等）を行うことができる。

●数学や統計学等、自然科学分野に関する基礎知識をもとに、基本的なモデルやデータによる客観的な分析を行うことができる。

●政府・政府関係機関等が公表する経済データや企業等で作成される経営・会計データの意味を理解し、それらデータを活用し、適切な分析を行うことができる。

●分析対象を論理的に考察できる。

●社会科学的観点から、経済的事象を考察し、その本質を理解することができる。

●幅広く、深い教養をもとに、さまざまな社会的事象を考察し、その本質を理解することができる。

（4）態度・姿勢

●社会の多様な問題に対して、専門的な見地から積極的に取り組み、確実に行動に移せるようになる。

●社会の現状から、目的や課題を発見し、その課題の解決に向けた方法を計画し、取り組むことができる。

●文化や言語の異なる人も含めて、他者の様々な考えに共感し、尊重しながら、目標に向けて協力することができる。

学際日本学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

経済学・経営学を中心に，人文社会科学分野の専門知識に基づいて日本をめぐる環東アジア的文脈を理解し，複合的な観点から現代日本の抱える課題に取り組むことができる人材，東アジア地域共生のヴィジョンを持って，他者と粘り強く対話することのできる人材を育成する。具体的な目標は次の通りとする。

●経済学・経営学を中心に人文社会科学の複数ディシプリンを身に付け，日本が直面する問題を多角的に分析することができる。

●日本語とそれ以外の言語の双方を身に付け，グローバルな視点から日本をめぐる問題を分析して，自らの考えを積極的に発信することができる。

●留学生との共修を通じて，粘り強い対話力を身に付け，国際的な場で情報発信や課題解決に取り組むことができる。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し，所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で，人材育成目標に係る上記の能力を有すると認められる者に，学士（学術）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

●日本の社会と文化が抱えている今日的な問題とその歴史的背景について，基礎的な知識と理解を有する。

●日本の社会と文化を理解するための環東アジア的な文脈について，基礎的な知識と理解を有する。

●人文・社会科学諸分野における日本研究について，基礎的な知識と理解を有する。

●日本学・日本研究の成立の経緯と現状について，基礎的な知識と理解を有する。

（2）当該分野固有の能力

●日本の社会と文化における様々な問題を歴史的な観点からとらえることができる。

●日本の社会と文化における様々な問題をグローバルとローカルの両方の観点からとらえることができる。

●人文・社会科学のいくつかのディシプリンにおける基礎的な分析手法を使うことができる。

●日本学・日本研究の現状の問題点をふまえたうえで，自らの課題を設定することができる。

（3）汎用的能力

●自ら課題を設定し，探究に取り組むことができる。

英 語その他の外国語を，問題探究，議論，発表のために使うことができる。

●東アジアと日本が抱える問題について，正確な基礎知識をもとに議論することができる。

●課題解決のために他者と協働することができる。

（4）態度・姿勢

●変化しつづける現代社会の諸問題に旺盛で多面的な関心を持ちつづけることができる。

●生涯にわたり，自身を省察しながら自律的に学習しつづけることができる。

●自身と異なる考え方，背景をもつ人を尊重することができる。

地域リーダープログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

経済学・経営学を中心とする人文社会科学の専門知識に基づいて，社会の現状の正確な理解と望ましい社会のあり方を考察でき，さらに多様なステークホルダーを巻き込みながら地域社会の課題を解決できる人材を育成する。具体的な目標は次の通りとする。

●経済学・経営学を中心に人文社会科学分野の専門的知識を修得し，現実社会の問題を分析

することができる。

●思考、調査 論述 する技術（アカデミックスキル）を体系的に身に付け、修得した専門的知識と組み合わせて、課題発見・分析ができる。

●現役社会人との共修を通じて、多様なステークホルダーと協働しながら実際に課題解決を実行することができる。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で、人材育成目標に係る下記の能力を有すると認められる者に、学士（学術）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

●経済学・経営学を中心とした人文社会科学分野の基礎的な専門的知識を体系的に修得している。

●経済学・経営学の中核的な専門的知識を体系的に修得している。

●データを用いた分析に関する基本的な知識を理解、修得している。

●レポート・論文を書くにあたり必要となる技能を修得している。

（2）当該分野固有の能力

●経済学を含む人文社会科学分野の専門知識を活用して、社会的課題を見出し、解決方法を思索・検討できる。

●経済学を含む人文社会科学分野の文献を正確に理解、解釈できる。

●データを用いた分析に関する知識を活用して、実際に分析できる。

●レポート・論文を書くために必要な技能を利用して論理的で説得的なレポート・論文を作成できる。

（3）汎用的能力

●異なる世代、異なる考え方をもつ人々と協働して課題解決に取り組むことができる。

●物事を多面的に見ることができ、かつ論理的に思考することができる。

●問題に対して適切な情報を収集して分析し、解決に導く方法を見出すことができる。

●身に付けた表現法を駆使して、他者に対して、自らの考えを的確に表現、発信できる。

英 語を含む外国語を用いて、読む、書く、聞く、話すことができる。

（4）態度・姿勢

●生涯にわたって自律的に学び続ける姿勢をもつことができる。

●常識や慣習に拘泥することなく、自由に思考することができる。

●自身と異なる考え方、背景をもつ人々を尊重することができる。

●社会を構成する一個人として、あらゆる活動に能動的に参画できる。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/economics/threepolicies-f/>

（概要）

経済学プログラム

○カリキュラム編成

本プログラムは 4 年制で、1 年次には、大学での学修に必要な基礎的なアカデミックスキルを修得する授業科目と、プログラム選択に必要な経済学・経営学を中心とする人文社会科学分野の基礎知識を学修する授業科目を配置している。2 年次以降には、経済学分野の専門性の確立、演習を通じた課題探究能力の育成、経済学以外の視点との関連性を重視した授業科目を配置し、4 年次には集大成科目として必修の卒業論文を配置している。

○学修内容・方法

1年次においては、グループワーク、個人による自己学修、選択するプログラムの紹介を組み合わせたスタディスキルズと学部共通基礎科目を履修する。2年次以降は、「近代経済学」「グローバル経済」という2つの専門領域毎に設定された履修モデルに沿って専門科目を体系的に履修し、専門知識を獲得する。専門学修と並行して、3年次から演習を受講することにより、社会における様々な問題に目を向け、単なる知識の積み重ねに陥ることなく、経済学の知識を常に現実の問題と結びつけ、「社会を見る目」を涵養する。モジュールを活用して他プログラムが開設する様々な分野の科目の履修を進める。

○学修成果の評価方法

- 専門知識、課題探究能力及び「社会を見る目」の修得状況を演習において評価する。
- 専門知識、課題探究能力及び「社会を見る目」の修得は卒業論文をルーブリック等により観点別に評価する。

経営学プログラム

○カリキュラム編成

本プログラムは4年制で、1年次には、大学での学修に必要な基礎的なアカデミックスキルを修得する授業科目と、プログラム選択に必要な経済学・経営学を中心とする人文社会科学分野の基礎知識を学修する授業科目を配置している。2年次以降には、経営学分野の専門性の確立、演習を通じた課題解決能力の育成、高度会計専門職を目指す学生のための履修モデルの整備と指導、の3点を重視した授業科目を配置し、4年次には集大成科目として必修の卒業論文を配置している。

○学修内容・方法

1年次においては、グループワーク、個人による自己学修、選択するプログラムの紹介を組み合わせたスタディスキルズと学部共通基礎科目を履修する。2年次以降は、本格的に企業経営、会計税務の各分野で専門学修を進め、さらに3年次からは、演習も並行して履修することで、修得した専門知識と理論を活用して、現実の社会問題の解決に取り組む能力を涵養する。なお、体系的な学修を支援するため、2つの専門領域（企業経営と会計税務）ごとに履修モデルを提示し、さらに税理士などの高度会計専門職を目指して大学院進学を想定する学生のために、高度会計専門職のための履修モデルも提示する。

○学修成果の評価方法

企業のマネジメントをめぐる諸問題を考えるうえで必要となる経営管理学と企業活動を計数面から把握・情報発信する会計学の専門知識を習得したかについて、修得状況については演習において評価する。修得については卒業論文をルーブリック等により観点別に評価する。

学際日本学プログラム

○教育課程編成

本プログラムは4年制で、1年次には、大学での学修に必要な基礎的なアカデミックスキルを修得する授業科目と、プログラム選択に必要な経済学・経営学を中心とする人文社会科学分野の基礎知識を学修する授業科目を配置している。2年次以降には、学際的な履修へと進ませ、複数ディシプリンの修得、外国語学修、「共修」(ともに学ぶ)の3点を重視した授業科目を配置し、4年次には集大成科目として必修の卒業論文を配置している。

○教育・学修方法

1年次においては、グループワーク、個人による自己学修、選択するプログラムの紹介を組み合わせたスタディスキルズと学部共通基礎科目を履修する。2年次以降は、モジュールを卒業要件に組み込み、日本学を含む2つ以上のディシプリンの学修を義務づけ、

英語，初修外国語の履修を重視し，外国語文献講読を必修とするとともに，いくつかの専門科目は外国語で講義を行い，別途，ダブルディグリー・プログラム（DDP）を立ち上げ，留学生と日本人学生の共修を体系的に展開する。

○学修成果の評価

以下の3つの直接評価を実施する。

- 1.基礎モジュール修了試験の実施。
- 2.集大成科目としての卒業論文の位置づけと，ルーブリックによる観点別評価の実施。
- 3.実習・演習科目における共修のパフォーマンス評価をルーブリックを用いて行う。

地域リーダープログラム

○カリキュラム編成

本プログラムは4年制で，1年次には，大学での学修に必要な基礎的なアカデミックスキルを修得する授業科目と，プログラム選択に必要な経済学・経営学を中心とする人文社会科学分野の基礎知識を学修する授業科目を配置している。2年次以降には，モジュールを核にした専門的知識の学修，多様な演習による課題解決能力の修得機会の提供，アカデミックスキルの体系的学修を重視した授業科目を配置し，4年次には集大成科目として必修の卒業論文を配置している。

○学修内容・方法

1年次においては，グループワーク，個人による自己学修，選択するプログラムの紹介を組み合わせたスタディスキルズと学部共通基礎科目を履修する。2年次以降は，経済学・経営学の中核的知識とともに学生自身の学修デザインに沿った選択して専門知識の修得を進めながら，課題解決を進めるプロセスや方法論の基本を学修したうえで，専門的知識の定着と論理的思考の育成を担う演習，社会人との共修を通じて論理的思考の育成と課題解決能力の育成を担う演習により課題解決能力を修得していく。さらに上級生のサポートと下級生へのサポートを組み入れてアカデミックスキルを体系的に修得していく。

○学修成果の評価方法

●専門的知識，物事を多面的に見る力，論理的思考力，アカデミックスキルの修得を総合的に評価するため，卒業論文をルーブリックにより評価する。

●修得した知識・スキルの活用状況，他者と協働した課題解決や自律的学修の態度の形成状況を評価するため，演習形式の授業においてルーブリックにより評価する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/economics/threepolicies-f/>

（概要）

（1）入学者に求める学力

経済科学部全体

経済学・経営学を中心に人文社会科学分野を幅広く学び，地域社会の着実な発展に貢献することを望む人。

課題を発見し，その解決のために必要な知識・技能を主体的に学修することができる人。

課題に取り組むために他者とすすんで協働する態度をもった人。

高等学校教育全般にわたる基礎学力を有するとともに，大学で学修をいっそう深化・拡大することを望む人。

高校卒業程度の基礎学力を有し，国語・英語の文章読解力および数学的・論理的思考力を備えている人。

○経済学プログラム

●社会の多様な問題に強い関心を持ち，課題に向かって主体的に行動できる人。

●経済学の確かな専門知識を身に付けたいと考えている人。

- 文系・理系という枠組みを超え、幅広い教養を身に付けたいと考えている人。
- 多様性を受け入れ、地域社会や国際社会で活躍する意欲を持っている人。

○経営学プログラム

- 経営学に関する確かな専門知識および理論を身に付けたい人。
- 企業や公的機関といった組織の行動原理について高い関心を有する人。
- 総合大学の利点を活かして、経営学のみならず、学際的・国際的視野で幅広い知識を身に付けたい人。
- 国税専門官，税理士，公認会計士といった専門職を志す人。

○学際日本学プログラム

- 人文社会科学の複数の学問領域を身に付け、日本とアジアが直面する問題を多角的に考えることを望む人。
- グローバルな視点から、自らの考えを積極的に発信することを望む人。
- 様々な人と「ともに学ぶ」ことを通じて、他者に開かれた粘り強い対話力を身に付けることを望む人。

○地域リーダープログラム

- 経済学・経営学だけでなく人文社会科学分野の専門知識を身に付け、地域が直面する課題に取り組むことを望む人。
- あらゆる物事に対して自律的に取り組む意欲を持つ人。
- 社会的課題の解決に高い興味関心を有し、ひいては地域社会を牽引していく強い意欲を持つ人。
- 高校卒業程度の基礎学力を有し、国語・英語の文章読解力および数学的・論理的思考力を備えている人。

(2) 入学者選抜方法

一般選抜

大学入学共通テストの成績で選抜する（主に上記の観点から基礎的な知識・技能を測る）ことに加え、前期日程試験では個別学力検査を課す（主に上記の観点から思考力・判断力・表現力等の能力を測る）。

特別選抜

1. 学校推薦型選抜

学校推薦型選抜では大学入学共通テストを免除し、個別学力検査における総合問題によって論理的な思考能力および日本語の理解力・表現力を測るとともに、提出書類（調査書・志願理由書）によって上記の観点から主体的に学習に取り組む態度を測る。

2. 総合型選抜

総合型選抜では大学入学共通テストを免除し、個別学力検査における小論文によって論理的な思考能力および日本語の理解力・表現力を測るとともに、提出書類（調査書・志願理由書）によって上記の観点から主体的に学習に取り組む態度を測る。

3. 社会人特別選抜

社会人特別選抜では大学入学共通テストを免除し、主に上記の観点から、小論文により思考力・判断力・表現力等の能力を測り、面接により主体的に学習に取り組む態度を測る。

学部等名 経済学部

教育研究上の目的（公表方法：新潟大学経済学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110000441.htm

<p>(概要)</p> <p>新潟大学経済学部規程(抜粋)</p> <p>(教育研究の目的)</p> <p>第1条の2 本学部は、経済学又は経営学に関する研究に基づき、基礎的な専門知識と深い教養を備え、課題探求能力と総合的判断力及び国際性、社会性を身につけた人材を育成することを目的とする。</p>
<p>卒業の認定に関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済学科 <p>http://www.iess.niigata-u.ac.jp/pdf/program/program01_04_1.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経営学科 <p>http://www.iess.niigata-u.ac.jp/pdf/program/program01_04_2.pdf</p>
<p>(概要)</p> <p>人材育成目標</p> <p>プログラムを通じて、経済学・経営学についての知識を中心にした幅広い視野から課題を探求できる能力を有し、国内外の企業や公的団体などで中核的役割を担い、活躍する資質を有する人材の育成を目指すと共に、より豊かな知的探求心を持った創造的社会人を育成する。</p> <p>修了認定(学位授与)の基準)</p> <p>経済学部の教育課程で養成する以下の能力を有し、経済学・経営学の二つの主専攻プログラムで定める修了要件を満たした者に、学士の学位を授与する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会経済の基本的制度を学び、経済モデル(理論)分析と経済データ(実証)分析の方法を修得し、実践的に分析する能力。 ・日本をはじめ世界各地の社会経済の現状や歴史を学び、現実の社会経済問題を根源的に考察する能力。 ・企業や公共団体等の経営管理の諸問題を考えていく上で必要となる経営学の知識を修得し、活用できる能力。 ・企業活動を計数面から把握するために必要不可欠な簿記、財務会計、管理会計及び税法に関する基礎知識を修得し実務を行える能力。
<p>教育課程の編成及び実施に関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済学科 <p>http://www.iess.niigata-u.ac.jp/pdf/program/program01_04_1.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経営学科 <p>http://www.iess.niigata-u.ac.jp/pdf/program/program01_04_2.pdf</p>
<p>(概要)</p> <p>教育課程の特徴</p> <p>1年次より経済学・経営学の全般に関わる基礎的な学習を開始し、専門的な学習を行うために必要とされる幅広い技能を活用できる能力を身に付ける。また2年次から、本格的な専門教育と演習(ゼミ)を並行して行うことにより、単なる知識の積み重ねに陥ることなく、経済学・経営学の知識を常に現実の問題と結びつけ、「社会を見る目」を身に付けた人材を育成する。</p> <p>教育課程の編成方針</p> <p>体系的な学習を支援するため、経済学主専攻プログラムにある2つの専門領域(近代経済学とグローバル経済)、及び経営学主専攻プログラムにある3つの専門領域(企業経営と公共経営、会計税務)ごとに履修モデルを提示する。</p>
<p>入学者の受入れに関する方針(公表方法:)</p>

<p>(概要) 経済学部は、学生募集を停止しているため、入学者の受入れに関する方針は公表していない。</p>
<p>学部等名 理学部</p>
<p>教育研究上の目的(公表方法:新潟大学理学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり)) https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110000448.htm</p>
<p>(概要) 新潟大学理学部規程(抜粋) (本学部の教育研究の目的) 第1条の2 本学部は、数学と自然科学の基礎研究に基づき、基礎的な専門知識と深い教養を備え、課題探求能力と総合的判断力及び国際性、社会性を身につけた人材を育成することを目的とする。</p>
<p>卒業の認定に関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり)) https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/science/threepolicies-f/</p>
<p>(概要) <u>数学プログラム</u> ○人材育成目標(卒業生が身につけるべき資質・能力) 変化の激しい現代社会における企業、行政、学界などの様々な組織体では、現状の分析と活動に関わる状況変化の予測を通じて、その発展に貢献できる人材が必要とされている。このため、本プログラムでは、数学の体系的な教育を通して、直面した問題の本質を捉えて抽象化する力と解決策を導く論理的思考力を有する人材を育成する。 本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士(理学)の学位を授与する。</p> <p>○プログラムの到達目標(目標としての学修成果)</p> <p>(1) 知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆数学全般の基礎的な定義や定理、及び解析学、代数学・幾何学、統計学・応用数学いずれかの分野に関する専門的な知識を理解する ◆現代社会における数学及び数学的思考能力の必要性について理解する ◆自然科学の複数分野の基礎知識を理解する ◆グローバル世界における経済、社会、文化について理解を深める <p>(2) 当該分野固有の能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆数学全般及び専門分野の基本的な定義および定理を理解し、説明ができる ◆数式を解析的または数量的に処理でき、それを論理的に説明できる。また、数、図形などのもつ特性を的確に表現できる <p>(3) 汎用的能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆数学で培われた論理的思考能力を基に、多様な問題を論理的に分析・整理し、解決策を提案できる ◆現代社会で生じる様々な問題の本質を捉え、抽象化し、モデル化することができる ◆理学の素養と専門的スキルを基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる <p>(4) 態度・姿勢</p>

- 科学的根拠に基づき、論理的に意思決定を行う態度を持つ
- 社会や自然界の多様な問題に対して、専門的見地から主体的に取り組む態度を持つ
- 様々な見地の人々と積極的に意見交換を行い、協働で課題解決に取り組む態度を持つ

物理学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本プログラムでは、科学技術の発展により激しく変化する現代社会における諸問題に対応するため、物理学の専門知識に加え、それらを習得する過程で獲得できる論理的思考法や情報処理能力、問題抽出および解決能力を備え、多様な分野で貢献できる人材を育成する。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（理学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

- 物理学の基本法則を学び、自然界の現象が基本法則から説明されることを理解する。
- 現代社会における物理学及び物理学的思考能力の必要性について理解する。
- 自然科学の複数分野の基礎知識を理解する。
- グローバル世界における経済、社会、文化について理解を深める。

（2）当該分野固有の能力

物理学の基本的な定義および法則を理解し、その物理法則を適用するために論理的に思考できる。

- 物理学の基本的な問題を数学的な形に記述し、抽象化・モデル化できることを理解できる。
- 実験や観測を行い、結果をまとめることができる。

（3）汎用的能力

論理的思考能力を基に、自然界の現象の本質を捉え、抽象化・モデル化に取り組むことができる。

- 必要な情報を収集し、それらの情報の中から本質的な問題を探求できる。
- 理学の素養と専門的スキルを基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。

（4）態度・姿勢

- 科学的根拠に基づき、論理的に意思決定を行う態度を持つ。
- 社会や自然界の多様な問題に対して、専門的見地から主体的に取り組む態度を持つ。
- 様々な見地の人々と積極的に意見交換を行い、協働で課題解決に取り組む態度を持つ。

化学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

変化の激しい現代社会における企業、行政、学会などの様々な組織体では、適切な現状分析と状況変化の予測を行ない、その発展に貢献できる人材が必要とされる。このため、本プログラムでは、近年の科学技術の急速な発展に伴う社会の要請に応えるため、化学とそれに関連した自然科学の諸分野で活躍できる人材、化学の基本的な知識を根底にした幅広い理解力と応用力を身に付けた人材、柔軟かつ独創性のある有用な人材を育成することをめざしている。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（理学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

- 化学に関する基本的な原理・法則・現象を理解する。
- 無機化学，分析化学，物理化学，有機化学，生化学いずれかの専門分野の理解を深める。
- 自然科学の複数分野の基礎知識を理解する。
- グローバル世界における経済，社会，文化について理解を深める。

(2) 当該分野固有の能力

- 化学における基本的実験・合成解析技術や基礎知識を活用して，物質の構造や性質を説明できる。
- 無機化学，分析化学，物理化学，有機化学，生化学いずれかの分野の専門的技術と知識を活用して，化学現象の本質を解明できる。

(3) 汎用的能力

- 化学の知識を用いて調査・分析し，課題や問題を整理・抽出し，解決策を提案できる。
- 客観的・論理的思考に基づいて常識や定見に囚われず物事を判断することができる。
- 理学の素養と専門的スキルを基に，物事を正確に表現し，コミュニケーションを取ることができる。

(4) 態度・姿勢

- 様々な見地の人々と積極的に意見交換を行い，協働で課題解決に取り組む態度を持つ。
- 社会や自然界の多様な問題に対して，専門的見地から主体的に取り組む態度を持つ。
- 科学的根拠に基づき，論理的に意思決定を行う態度を持つ。

生物学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

現代社会においては，食や健康，環境などの問題解決が喫緊の課題となっている。本プログラムでは，こうした社会からの要請に応えるため，進展する現代生命科学の知識や技術を身に付け，科学の普及と発展をはかり，食や健康，環境などの問題解決のための基盤を支えることによって，持続可能な社会の構築に貢献できる人材を育成する。

○具体的な目標

1. 生物，特に動植物の形態と生理の原点を確実に把握できる。
2. 生物の基本的生命現象を分子生物学や細胞生物学の手法による実験科学を中心に解析し，その原理の解明ならびに新規の概念の確立を目指すことができる。
3. 実社会のあらゆる場面において，広い視野から諸事に論理的かつ適切に対応し，意見を発信できる。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し，所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で，人材育成目標に係る下記の能力を有すると認められる者に，学士（理学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 生命現象の基盤となる生体分子の性質と，細胞内における化学反応を理解する
- 細胞とは何か，どのようにして機能が維持されるかを理解する
- 遺伝子の機能と遺伝のしくみを，遺伝現象を支える生体分子の特徴とともに理解する
- 個体がどのようにできあがっていくか，生物がどのようにして進化し，多様な生物種ができたかを理解する
- 動物の体の構造と機能を理解する
- 植物の体の構造と機能を理解する
- 生物がどのように環境に応答しながら恒常性を維持していくかを理解する
- 自然科学の複数分野の基礎知識を理解する

・グローバル世界における経済，社会，文化について理解を深める

(2) 当該分野固有の能力

- 生物の構造を観察し，記録・説明することができる
- 生体物質を分離し，その性質を明らかにすることができる
- 遺伝のしくみと遺伝子の機能を明らかにするとともに，遺伝子組換えの技術を適切に取り扱うことができる
- 生体内外の環境変化に対して，生物がどのように反応するかを明らかにすることができる

(3) 汎用的能力

- 現前の事象を観察し，問題点やその解決策を見つけ出すことができる
- データを定量的に取り扱い，その意義を論理的に判断することができる
- 専門的情報や文献を入手して，読解・活用できる
- 理学の素養と専門的技能を基に，物事を正確に表現し，自分の意見を整理して文章や図，言葉によって説明できる
- 他者の意見を聞き，適切に議論することができる

(4) 態度・姿勢

- 身近な生物，全ての命を大事にする態度を持つ
- 自ら進んで課題に取り組む態度を持つ
- 継続的に実験や資料解析を行う態度を持つ
- 目標の達成に向けて計画を立て，他者と協力しながら努力する態度を持つ
- 日常生活における生命科学の関連知識を理解し，その意義について客観的かつ理性的に判断・議論する態度を持つ

地質科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

現代社会においては，深刻さを増す環境問題や資源・エネルギー問題への対応に加え，頻発する自然災害の回避・軽減が喫緊の課題となっており，地球科学の知見に基づく将来予測とそれを踏まえた解決方策の提示が求められている。本プログラムでは，こうした社会からの要請に応えるため，総合的視点に立った地質学的課題の解決能力を身に付け，地球科学の研究と地圏の土木開発・資源開発・防災・環境保全等の分野で計画性・協調性・実行力・倫理観をもって活躍できる人材を育成する。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し，所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で，下記の能力を有すると認められる者に，学士（理学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 広範な問題解決のために，自然科学の多様な分野の基礎を身につけるとともに，地質科学の先端のトピックを理解し，説明できる。
- 自然科学の複数分野の基礎知識を理解する。
- グローバル世界における経済，社会，文化について理解を深める。

(2) 当該分野固有の能力

- 岩石・鉱物・地層の物質的性質について理解し，説明できる。
- 岩石・鉱物・地層の歴史的性質について理解し，説明できる。
- 野外の地質に関する基本的なデータ取得とまとめができる。

(3) 汎用的能力

野外の産状に密着した地質学的課題を解決する計画を立案し，複数の解決策や与えられた制約を考慮したうえで計画的・自主的に情報を取得し，チームでの議論を経て，総合的に

解析できる。これらを通じ、デザイン能力を身につける。

- 収集した情報を整理・再構成して自ら表現できる。
- 良識ある技術者に必要な人文社会科学などの基礎および語学・コミュニケーション能力を身につける。
- 理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。

(4) 態度・姿勢

●デザイン能力の一環をなす、社会の要請への地質 科学の対応について理解し、説明できるとともに、技術者倫理を身につける。

自然環境科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

環境に関連する諸問題の理解には、もはや特定分野に閉じた知識では対応できず、自然科学の基礎分野に関する広範な学力が必要になる。またさまざまな環境問題が発生する現実に即応するためには、特定の問題に対応する処理能力よりむしろ幅広い応用力が必要である。

本プログラムでは、本学の理念「自立と創生」に基づき、自然環境と人間の好ましい共存関係を探求することで、地域や世界の着実な発展に貢献できる人材育成を目的とし、地球規模での様々な自然現象を理解し、自然環境で生じているさまざまな問題解決に取り組むことのできる、広い応用力・問題解決能力を備えた人材を育成する。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（理学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 自然科学の複数分野 の基礎知識を理解する
- グローバル世界における経済、社会、文化について理解を深める
- 自然環境の科学的理解に必要な、理学全分野 にわたる基礎を理解する
- 地球科学に関連する知識を適用することで、地球環境に関わる地圏、気圏、水圏の動態について理解する
- 物理、化学的知識を応用し、環境における物質 の挙動・性質 やエネルギーなどの循環を理解する
- 生物学的知識を応用し、環境への適 応・進化や多様性維持の仕組みを理解する
- 自然環境と社会とのつながりについて理解する

(2) 当該分野固有の能力

- 自然界で生じる諸現象の理解のため、自然科学の各分野 の中から最適 な実験手段を選択し、データを適切に取得する事ができる
- 得られたデータや実験結果から論 理的な結論 を導きだすことができる
- 自然環境の中で生じる諸現象を多角的視点から理解し、また解明できる

(3) 汎用的能力

- 理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる
- 理学的な発想に基づいた論 理的思考ができる
 - 自然科学の各分野 の知識を統合して自然現象を理解することができる
 - 科学と社会との関わりを自然科学の視点から説明できる
 - 自発的に問題を設定し、その解決方法を提案することができる

(4) 態度・姿勢

- 多様な専門分野の人間と意見を交わし議論する態度を持つ
- 学問分野区分に制約されることなく、広い視野に立って科学的に物事を理解する姿勢を持つ
- 知識の修得にとどまらず、フィールドにおいてさまざまな自然現象を体験し、理解する姿勢を持つ

フィールド科学人材育成プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

現代社会においては、生態系・環境の保全や極端気象・激甚災害への対策が喫緊の課題となっている。これらの課題の解決には、環境動態学、生態学、災害・防災科学分野における専門的知識、実践的技能、さらにはそれらを駆使して新しい科学的知見・課題解決策を導ける能力が求められる。本プログラムでは、こうした社会の要請に応えるため、理学と農学分野の融合したフィールド科学分野における創造的な科学的知見・問題解決策を導く能力をもち、フィールド科学系の最先端研究、環境・建設コンサルタント、地理・気象情報サービス、林業、水産業などの多方面において貢献できる理系人材を養成する。

本プログラムに修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（理学）の学位を授与する。”

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

- 幅広く、豊かな教養をもち。
- 自然科学の複数分野の基礎を理解する。
- フィールド科学の学修に有用な基盤的内容について理解する。
- フィールド科学分野の基礎的内容について理解でき、説明できる。
- 陸上動植物、森林生態系、水圏生態系の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。
- 気圏、水圏、地圏の動態や自然現象の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。
- 災害現象や防災の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。
- 関連分野の基本的な知識を修得し、論理的に思考することができる。
- グローバル世界における経済、社会、文化について理解を深める。

（2）当該分野固有の能力

- 基礎的な実習方法を理解し、作業を正確に行える。
- データを解析し、その結果に基づいて科学的な解釈を導ける。
- フィールド科学分野の実習を通して、野外調査に不可欠な危機管理能力を身につける。
- 演習・実習科目を通して、現場での解決能力、また、フィールドを対象とした調査・解析・観測を遂行できる実践力を身につける。
- フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導くことができる。
- フィールド科学分野の技術者として、信頼できる倫理観をもち。
- 研究テーマの背景や位置付けを理解した上で当該分野の課題を見出すことができる。

（3）汎用的能力

- 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力をもち。
- 理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。
- 課題解決を導く上で専門的知識と専門的技能を適切かつ正確に活用できる。

（4）態度・姿勢

・学問分野 区分に制約されることなく、広い視野 に立って科学的に物事を理解する姿勢を持つ。

- ・知識を得るだけでなく、実際にさまざまな課題を体験し、理解する姿勢を持つ。
- ・グループの課題やゼミ、グループ運営などに取り組む中で、積極性と協調性を持つ
- ・プレゼンテーション能力を身につけ、自分の考えについて他人と議論 することができる。
- ・主体的かつ根気強く研究活動に取り組むことができる。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/science/threepolicies-f/>

（概要）

数学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

数学プログラムは4年制で、おおむね第1学年から第2学年1学期、第2学年2学期から第3学年、第4学年と、学習内容から大きく3期に分けられる。

授業科目は、「教養」、「理学部共通教育及び自然系共通専門基礎」、「解析学」、「代数学・幾何学」、「統計学・応用数学」の5つの科目群に分けられる。

第1期は、「主体的な学習への転換、及び教養と自然科学全般の基礎知識の修得」を重視する。大学学習法とアクティブ・ラーニング科目により学習態度の転換を図り、基礎実習・演習科目を通して、理学部での学習に必要な知識を身に付ける。また、自然系共通専門科目や理学部共通教育科目を通して、自然科学全般の基礎知識を学ぶ。さらに、教養科目を通して、社会科学や新潟地域の産業など、幅広い知識を習得する。

第2期は、「数学全般の基礎知識の修得及び事象を抽象化する能力」が中心であり、解析学、代数学・幾何学、統計学・応用数学の基礎科目を開講し、数学の基礎となる各分野の基礎的な定義や定理を学び、事象を抽象化して理解し、正しく説明する能力を身に付ける。

第3期は、「専門分野の学習と論理的思考能力の育成」を行う。解析学、代数学・幾何学、統計学・応用数学のいずれかの分野を少人数のゼミ形式で専門的に学習し、論理的思考能力と数学的に正しく説明できる能力を育成する。

各期終了時に学生へアンケートを行い、各期の学習目標の達成度を間接的に評価する。また、本プログラムで重要視する学習目標である「現代社会や自然界で生じる様々な問題の本質を捉え、抽象化し、モデル化することができる能力の育成」と「数学を基に多様な問題を論理的に分析・整理し、解決策を提案できる能力の育成」の達成度は、第3期を通して行う数学講究において、ルーブリックを用いて直接評価を行う。

物理学プログラム

カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

物理学プログラムは4年生で、おおむね第1学年から第2学年1学期、第2学年2学期から第3学年、第4学年と、学習内容から大きく3期に分けられる。

授業科目は、「教養」、「理学部共通教育及び自然系共通専門基礎」、「古典物理学」、「現代物理学」、「物理数学」および「演習・実験・セミナー」の6つの科目群に分けられる。

第1期は、「主体的な学習への転換、及び教養と自然科学全般の基礎知識の修得」を重視する。大学学習法とアクティブ・ラーニング科目により学習態度の転換を図り、基礎実習・演習科目を通して、理学部での学習に必要な知識を身に付ける。また、自然系共通専門科目や理学部共通教育科目を通して、自然科学全般の基礎知識を学ぶ。さらに、教養科目を通して、社会科学や新潟地域の産業など、幅広い知識を習得する。

第2期は、「物理学全般の基礎知識の修得」が中心であり、解析力学、電磁気学、量子力学・統計力学の基礎科目の講義を開講し、物理学の基礎となる基礎的な定義や定理を学び、物理現象をモデル化して理解し、正しく説明する能力を身に付ける。また、物理学演習・物理学実験・現代物理学セミナーの実践学習科目を開講し、機械装置の正しい操作法の習得や、実験や計算の結果を分析しそれを論理的に説明できる能力を身に付ける。

第3期は、「専門分野の学習と論理的思考能力の育成」を行う。粒子宇宙物理学、物性物理学における理論系、実験系のいずれかの分野を専門的に学習し、論理的思考能力と物理

学的に正しく説明できる能力を育成する。

各期終了時に学生へアンケートを行い、各期の学修成果の達成度を間接的に評価する。また、本プログラムで重要視する学修到達目標である「物理学で培われた論理的思考能力を基に、多様な問題を論理的に分析・整理し、解決策を提案できる能力の育成」と「現代社会で生じる様々な問題の本質を捉え、抽象化し、モデル化することができる能力の育成」の達成度は、第3期を通して行う卒業研究において、ルーブリックを用いて直接評価を行う。

意欲ある入学者の獲得とその意欲に応える教育を行うため、学生の自主性を尊重しつつ、古典物理、量子力学、統計力学など基礎科目の積み上げを重視したカリキュラムを編成し、より高度な大学院の教育と研究につなげる。

化学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

化学プログラムでは、4年間のカリキュラムを3期に分けている。概ね1学年から2学年1学期までを第1期、2学年2学期から3学年までを第2期、最終学年の4学年を第3期、としてしている。授業科目は、「教養」、「自然系共通専門基礎」、「理学部共通教育」、「無機化学」、「分析化学」、「物理化学」、「有機化学」、「生化学」および「演習・実験」の9つの科目群に分けられる。以下に各期における学修内容と学修方法を示す。

第1期は、「主体的な学習への転換、および教養と自然科学全般の基礎知識の修得」を重視する。大学学習法（理学スタディ・スキルズ）とアクティブ・ラーニング科目により学習態度の転換を図る。教養科目を通して、社会科学や新潟地域の産業など、幅広い知識を習得する。自然系専門基礎科目や理学部共通科目を通して、自然科学全般の基礎知識を学ぶ。さらに、基礎実習科目を通して、理学部で必要な技術や論理的な考え方の基礎を身に付ける。

第2期は、「化学全般の基礎的知識と技術の修得」が中心であり、無機化学、分析化学、物理化学、有機化学、生化学の基礎的講義や実験科目を配置している。これらの科目を実施履修することにより、専門的理解を深め、学問的な説明能力と、技術の活用能力を深める。

第3期は、「化学における特定の専門分野の知識と技術の修得と実践的能力の育成」を行う。無機化学、分析化学、物理化学、有機化学、生化学のいずれかの分野に所属し、少人数で演習と課題研究を実施する。主にセミナー形式で開かれる演習では、専門分野の知識や研究の最新情報を収集することで、研究遂行能力を身に着ける。また、個別指導を基本とする課題研究においては、各自が異なるテーマの研究に取り組むことで、研究手法および論理的な思考方法を学び、問題を解決するための実践的な能力を修得する。さらに研究成果を論文としてまとめ、口頭発表することにより、表現力やコミュニケーション能力も育成する。

各期終了時に学生へアンケートを行い、各期の学習目標の達成度を間接的に評価する。また、本プログラムで重要視する学習目標である「化学の知識を用いて調査・分析し、課題や問題を整理・抽出し、解決策を提案できる。」と「客観的・論理的思考に基づいて常識や定見に囚われず物事を判断することができる。」やそれに関連する諸能力の達成度は、第3期を通して行う課題研究において、ルーブリックを用いて直接評価を行う。

生物学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

生物学プログラムは4年制で、おおむね第1学年から第2学年1学期、第2学年2学期から第3学年、第4学年と、学習内容から大きく3期に分けられる。

授業科目は、「教養」、「理学部共通教育及び自然系共通専門基礎」、「生物学プログラム専門科目」の3つの科目群に分けられる。

第1期は、「主体的な学習への転換、及び教養と自然科学全般の基礎知識の修得」を重視する。大学学習法とアクティブ・ラーニング科目により学習態度の転換を図り、基礎実習・演習科目を通して、理学部での学習に必要な知識を身に付ける。また、自然系共通専門科

目や理学部共通教育科目を通して、自然科学全般の基礎知識を学ぶ。さらに、教養科目を通して、社会科学や新潟地域の産業など、幅広い知識を習得する。

第2期は、「生物学全般の基礎知識の修得」が中心であり、講義科目においては、形態学、生理学、発生学、分子生物学、生化学、遺伝学の専門的知識を基盤として、生物を構成する分子、細胞、組織の特質について修得する。また、実習科目においては、形態学、生理学、発生学、分子生物学、生化学、遺伝学の各分野に関する実験を通じて、動植物の取扱いや実験手法、実験器具の操作法、データ解析法やレポート作成法の基礎を修得する。

第3期は、「専門分野の学習と論理的思考能力の育成」を行う。研究室に所属し、演習科目においては、原書論文の講読や発表を通じて、文献および参考データの収集と分析の方法を修得する。また、課題研究においては、生命現象の原理解明に取り組む過程を通じて、課題の設定、実験技術、実験データの取得と解析、討論および成果発表の方法を修得する。

各期終了時に学生へアンケートを行い、各期の学習目標の達成度を間接的に評価する。また、本プログラムで重要視する学習目標である「生物の基本的生命現象を分子生物学や細胞生物学の手法による実験科学を中心に解析し、その原理の解明ならびに新規の概念の確立を目指すことができる能力」の達成度は、第3期を通して行う課題研究において、ルーブリックを用いて直接評価を行う。

地質科学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

地質科学プログラムは4年制で、(1)第1学年から第2学年前期、(2)第2学年後期から第3学年、(3)第4学年と、学習内容から大きく3期に分けられる。学習科目は、プログラムの到達目標に応じて8つの科目群から構成される。なお、社会の要請における地質科学の対応についての理解および技術者倫理の修得のため、災害・復興科学研究所に所属する教員が担当する応用地質学分野の科目および技術者倫理科目を開設している。

本プログラムでもっとも重視する学習成果は、「総合的視点に立った地質学的課題の解決能力」である。これは、与えられた制約や複数の解の存在を考慮した上で、多様な地史的背景を有する地質体に対して現実的・総合的な解釈を導き出す能力である。低学年から一貫して課題発見から解決に至るデザイン能力を意識させること、さらに野外での地質の産状に密着した題材を用いて専門性・総合性の向上を図ることで、上記の能力を育成している。その学習成果は、プログラムの教育目標に直結する重要科目でルーブリックを用いて直接評価し、卒業生の質を担保する。また、各期終了時に学生へアンケートを行い、各期の学習目標の達成度を間接的に評価する。

第1期は、大学での学びを支える主体的な学習態度の涵養および良識ある技術者に必要となる広範な基礎知識と語学・コミュニケーション能力の修得を重視する。第1期の前半(第1学年)では、大学学習法およびアクティブ・ラーニング科目により主体的な学習への転換を図る。特にアクティブ・ラーニング科目では、本プログラムを履修していくうえで必要なデザイン能力を育成し、パフォーマンス評価により学習成果を評価する。また、自然系共通専門基礎科目等のGコード科目の効果的な履修により、自然科学の多様な分野の基礎を修得させるとともに、人文社会・教育科学分野の幅広い教養と国際的なコミュニケーション能力を育成する。第1期の後半(第2学年前期)では、理学部共通コア科目の講義および実習形式の専門科目を開講し、構造地質学、地層・古生物学、鉱物・岩石学および環境地質学の基礎にふれさせる。さらに、フィールドワークでの取り組みを通して、地質学が自然界の何を記述しようとし、どのような手段で地球の活動と歴史を知ろうとしているのかを、理論的・感覚的に掴むことを促す。

第2期は、地質学の基礎的な学習と、修得した基礎知識・技能を用い地質体の三次元構造・歴史性を認識する能力を育成する。第2期の前半(第2学年後期)から、地質学における岩石学、鉱物学、構造地質学、地層学、古生物学、環境地質学、水文地質学の分野の専門科目を講義形式で開講し、岩石の性質・形成過程、地殻の変形メカニズム、堆積岩・化石記録の意味および地質災害科学の基礎を学修させ、地質体の物質的性質・歴史性および自然災害の学理を理解させる。講義と並行してフィールドワーク・室内での実習形式の専門科目を開講し、露頭記載とルート調査、地質図学の基礎および実際の鉱物・岩石試料

の取り扱い方と実験手法を修得させる。第2期の後半(第3学年)では、引き続き講義・実習形式の専門科目を開講するとともに、野外の産状に密着した地質学的課題についてのフィールドワークを実施し、これまでに得た知識・技能を統合的に活用し地質体の三次元構造・地史を描き出し、表現する能力を育成する。ここでは、フィールドワークに基づく情報の収集・記載、総合的視点に立った地質体の理解・解釈および第三者への提示という一連の流れにより、理学的考究のプロセスを学ぶ。その学習成果の評価は、パフォーマンス評価にて行われる。

第3期は課題研究(卒業論文)が中心であり、ここでは各個人別に学問的に意義あるテーマを設定した本格的な研究を体験する。その過程では、テーマの設定(問題点の認識)、方法の選定・計画の立案、調査分析の実行、調査分析結果のまとめ、結果の総合解釈、プレゼンテーション(口頭および文書)という、一連の理学的考究を実行する。これにより、計画立案とその管理・実行、プレゼンテーションというデザイン教育の要素が高度な形で達成され、その学習成果の評価はパフォーマンス評価にて行われる。

自然環境科学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

自然環境科学プログラムにおけるカリキュラムは、理学全分野の基礎学力を身につけた上で、さらに自然現象を多角的な視点から論理的かつ総合的に理解するための高度な学力、実験能力、情報処理能力を培うことを目的として編成されている。このようなカリキュラムの遂行により、多様で複雑な自然現象のメカニズムを正しく理解でき、地球規模でのさまざまな問題に取り組むことのできる広い応用力・問題解決能力を備えた人材の育成が可能となる。

この目的のもとに導入されている自然環境プログラムの授業科目は「教養教育に関する科目」、「理学的知識の修得と理解に係る科目」、「実験・実習・演習に係る科目」、「アカデミックスキル科目」の科目群に分類される。同プログラムは4年間のプログラムであるが、どの科目群のどの科目を主に履修するのかによっておおむね3期間に分類できる。

●第1期は入学後から2年第1学期の1年半に相当し、主体的な学習への転換、大学人としての教養・知識の修得、専門科目を理解するために必要な理学全般の基礎知識や実験手法の修得、をそれぞれ目的とする。スタディースキルズにより主体的学習への転換を図り、さらにPBL型科目のアクティブラーニングによって課題の発見とその解決のためのスキルを学ぶことになるが、これらの科目はレポートやプレゼンテーションを点数化して直接評価することで、表現力も含めた学習成果の評価を行う。大学人としての教養・知識に関する科目には、外国語、人文社会・教育科学系科目、新潟大学個性化科目などがあるが、理学にとどまらない幅広い知識や考え方にふれ、さらに新潟地域独特の諸問題に目を向ける姿勢も養う。専門科目を理解するために必要な理学全般の基礎知識や実験手法の修得のためには、自然系共通専門基礎科目、基礎実習・演習科目、理学部共通コア・ベーシック科目の履修が中心となるが、各科目のGP値をもって直接評価することで、知識や技能の修得にとどまらず、論理的思考力が獲得できているかも含めた学習成果の評価を行う。また1期終了時に学生へアンケートを行い、学習目標の達成度を間接的に評価する。

●第2期は、2年第3タームから3年第4タームまでの1年半に相当し、以降は「理学的知識の修得と理解に係る科目」の中でも本プログラムの主専攻専門科目を中心に履修することになる。理学部共通コア科目で修得した、自然現象を理解するために必要な基礎知識をさらに発展させることを目的に、2年第2学期に主専攻専門基礎科目を、さらに高度で発展的な内容や複数の専門分野にまたがる境界領域の内容を含む、主専攻発展科目を3年次にそれぞれ履修するが、履修科目の分野バランスを考慮した科目の配置、分野バランスの偏りをなくするための選択必修制度を導入している。これらの講義科目以外にも問題解決のために必要となる高度な実験、解析能力を身に付けることを目的とした実験科目や演習科目、フィールドにおいてさまざまな自然現象を体験する野外実習科目、科学と社会・環境との関連を理解するための環境社会学系の科目も第2期中に履修する。これら科目の履修を通じて、自然現象を理解するために必要な広い応用力と問題解決能力を涵養する。学習成果の評価は、発展的内容の理解度や論理的思考力も含め、各科目のGP値をもって直接的に

行う。また2期終了時に学生へアンケートを行い、学習目標の達成度を間接的に評価する。

●第3期は4年時の1年間に相当し、この期間は課題研究が中心となる。3年第2期までで修得した知識や手法を実際の課題に適用し、課題の本質を理解するとともに、課題解決のための更に高度な知識や手法を修得することが目的である。本プログラムで重要視している学習目標である「自然界で生じている様々な問題を理学の観点から多角的に捉える能力の獲得」、「適切な実験やシミュレーションを通じてその問題点を解明する能力の獲得」、「これらのことを他分野の人に対して論理的かつ明快に説明できる能力の獲得」の達成度は、第3期を通して行う本卒業研究において、ルーブリックを用いて直接評価を行う。また各期終了時に学生へアンケートを行い、各期の学習目標の達成度を間接的に評価する。

フィールド科学人材育成プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

フィールド科学人材育成プログラムでは、野外調査や観測の様々な場面で必要とされる科学的知識と技術を併せ持ち、国際的にも通用する即戦的で豊かな課題探求能力と課題解決能力を備えた理系人材を育成することを教育目標として、農学部・理学部の両学部で開講されるフィールド科学分野の講義・実習を、農学部・理学部の学生がともに履修する教育システムを設定している。本プログラムは4年制で、第1学年から第2学年1学期、第2学年2学期から第3学年、および第4学年と、学習内容から大きく3期に分けられる。本プログラムに所属される学生は、第2学年1学期までは農学部、理学部それぞれの学部における共通科目を履修、第2学年2学期以降は、本プログラムの共通の専門科目を学修、第4学年からは主に卒業論文の研究に取り組む。

第1期は、「主体的な学習への転換、及び教養と自然科学全般の基礎知識の修得」を重視する。

●大学学習法とアクティブ・ラーニング科目により学習態度の転換を図る。

●自然系共通専門基礎科目を通して、数学、物理学、化学、生物学、地学の幅広い分野の素養を修得する。

●理学部共通コア科目（物質科学C、環境気象学、多様性生物学A、岩石・鉱物学入門、環境地質学入門など）では、理学全般の基礎知識とフィールド科学分野の学修に有用な基盤的知識を修得する。

第2期は、「フィールド科学分野の専門的知識の修得及び専門的技術の養成」を重視する。

●主専攻の必修専門科目では、フィールドワーカーのためのリスクマネジメント実習やフィールド安全論を通して野外調査に必要なリスクマネジメント能力を修得する。

●主専攻の専門基礎科目（野生植物生態学、樹木学、野生動物生態学、流域環境IS、生態学、環境砂防学、地形学、系統分類学、環境分析化学）では、フィールド科学分野の基礎知識を修得する。

●主専攻の専門講義科目（水圏生態学、海洋化学、環境物理学、寒冷地形学、森林環境論、流域環境GIS、雪氷防災学、里地里山再生学など）および専門科目の実習・演習科目（野生動植物生態学実習、GIS・リモートセンシング演習、防災系演習及び実習、海洋フィールド生物学実習、気象解析実習、地形フィールド実習、災害・復興科学演習及び実習など）では、多様なフィールド調査で必要となる高度な専門知識と技術を修得する。

第3期は、4年次での卒業論文を通して「フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導く能力の育成」を重視する。

なお、本プログラムで重要視する学習目標である「フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導く能力」やそれに関連する諸能力の達成度は、第3期を通して行う卒業研究において、ルーブリックを用いて直接評価を行う。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは

以下のとおり))

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/science/threepolicies-f/>

(概要)

(1) 入学者に求める学力

- ・理論, 実験, あるいは野外観察の知識と方法の習得を通じて能動的な学習態度を身につけたい人。
- ・習得した知識と方法を実践することによってより高度な専門的課題や社会の諸問題に臨機応変に対応し解決できる能力を身につけたいと考える人。
- ・数学や理科に興味を持つとともに他分野への応用にも関心がある人。
- ・数理や自然の法則の探求に興味を持って取り組む人。
- ・理学の各専門分野に意欲的に取り組む人。
- ・様々な個性や多様な能力を生かして, 自らを成長させ, 社会に貢献したいと考えている人。

- ・数学や理科の学習で得た知識に基づいた科学的な思考ができるとともに, 主体的な学びの態度を身につけていることが望まれる。
- ・入学後の学修のため, 数学は下記の科目の内容を履修していることが望まれる。また理科は, 下記の科目のうち複数の科目およびその基礎科目の内容を履修していることが望まれる。

数学: 数学 , 数学 , 数学 , 数学A , 数学B

理科: 物理, 化学, 生物, 地学

(2) 入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

高校卒業程度の基礎学力を身につけ, 特に数学と理科について十分な基礎学力がある人を選抜する。

大学入学共通テストでは, 5教科7科目の幅広い基礎学力をはかる。

個別学力検査では, 多様な能力と意欲をもつ人を受け入れるため, 検査項目とその評価の重点の異なる以下の3つの選抜方法を設定し, そのいずれかによって選抜を行う。

理数重点選抜: 数学, 理科, 外国語の基礎学力, なかでも数学および理科の基礎学力に重点をおいて選抜する。

数学

理科(物理, 化学, 生物, 地学から1科目)

外国語

理科重点選抜: 理科の広い分野の基礎学力と外国語の基礎学力をはかり, 選抜する。

物理, 化学, 生物, 地学から2科目

外国語

野外科学志向選抜: 理科や数学の広い分野の基礎学力にくわえ, フィールドワークや野外を対象とする自然科学分野に対する意欲と適性を面接ではかり, 選抜する。

数学, 物理, 化学, 生物, 地学から2科目

面接

一般選抜(後期日程)

高校卒業程度の基礎学力を身につけ, 大学での学習意欲の高い人を一括して選抜する。

大学入学共通テストでは, 5教科7科目の幅広い基礎学力をはかる。

面接では, 大学での学習意欲や適性, およびコミュニケーション能力をはかる。

学校推薦型選抜

高校卒業程度の基礎学力を身につけ, 特定の主専攻プログラムへの明確な志望動機があり, 数学や理科に対する知的好奇心や探求心があるとともに学習意欲の高い人を主専攻プログラム単位で選抜する。なお, フィールド科学人材育成プログラムでは学校推薦型選抜

は行わない。

・数学プログラムの志望者には、基礎学力試験によって入学後の学修に必要な学力を、面接によって数学に対する興味や関心、大学での学習意欲や適性、およびコミュニケーション能力を、書類審査によって高等学校卒業程度の基礎学力を、それぞれはかる。

・物理学プログラムの志望者には、基礎学力試験によって入学後の学修に必要な学力を、面接によって物理学に対する興味や関心、大学での学習意欲や適性、およびコミュニケーション能力を、書類審査によって高等学校卒業程度の基礎学力を、それぞれはかる。

・化学プログラムの志望者には、大学入学共通テストによって入学後の学修に必要な学力を、志願理由書によって化学に対する興味や関心と大学での学習意欲や適性を、書類審査によって高等学校卒業程度の基礎学力を、それぞれはかる。

・生物学プログラムの志望者には、大学入学共通テストによって入学後の学修に必要な学力を、志願理由書によって生物学に対する興味や関心と大学での学習意欲や適性を、書類審査によって高等学校卒業程度の基礎学力を、それぞれはかる。

・地質科学プログラムの志望者には、大学入学共通テストによって入学後の学修に必要な学力を、面接によって地質科学に対する興味や関心、大学での学習意欲や適性、およびコミュニケーション能力を、書類審査によって高等学校卒業程度の基礎学力を、それぞれはかる。

・自然環境科学プログラムの志望者には、大学入学共通テストによって入学後の学修に必要な学力を、面接によって自然環境科学に対する興味や関心、大学での学習意欲や適性、およびコミュニケーション能力を、書類審査によって高等学校卒業程度の基礎学力を、それぞれはかる。

総合型選抜

高校卒業程度の基礎学力を身につけ、特に数学や理科に関するテーマで主体的な探求の学習成果をもつ人を一括で選抜する。

大学入学共通テストでは、4教科6科目の幅広い基礎学力をはかる。

本学が実施する試験では、数学や理科をテーマとするプレゼンテーション発表と口頭試問によって主体的な探求の学習成果をはかる。また同時に行う面接によって、各主専攻プログラムに対する興味や関心、大学での学習意欲や適性、およびコミュニケーション能力をはかる。

学部等名 医学部

教育研究上の目的（公表方法：新潟大学医学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110000476.htm

（概要）

新潟大学医学部規程（抜粋）

（本学部の教育研究の目的）

第1条の2 本学部は、学術の研究と真理の探究及び高度な教養を備えた良識ある社会人の育成を基本に、医学・医療に対する多様な社会的要請に応えることのできる優れた専門的能力を有し、わが国及び世界の医学・医療に貢献できる人材を育成することを目的とする。

卒業の認定に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

・医学科

<https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/medicine/threepolicies-f/>

・保健学科

<https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/health/threepolicies-f/>

(概要)

医学科

医学教育プログラム

○人材育成目標(卒業生が身につけるべき資質・能力)

- 豊かな人間性と高い倫理性を備え、全人的医療に貢献できる人材の育成
- 高度の専門性を持つ医療チームの一員として貢献できる人材の育成
- 広い視野と高い向学心を有する医学研究者・教育者となり得る人材の育成
- 保健、医療、福祉、厚生行政に貢献できる人材の育成
- 地域の医療に貢献するとともに、国際的に活躍できる人材の育成
- 探求心、研究心、自ら学ぶ態度を生涯持ちつづける人材の育成

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、医学科の教育理念「医学を通して人類の幸福に貢献する」に基づき定められた全科目に合格し、定められた卒業要件単位を修得した者で、科学的姿勢、コミュニケーション能力、人間性、社会性などの「医に求められるプロフェッショナリズム」を十分に身につけた学生に、学士(医学)の学位を授与する。

○プログラムの到達目標(目標としての学修成果)

(1) 知識・理解

以下の医学に関する知識を有し実践に応用できる。

1. 人体の構造と機能
2. 心理、行動
3. 病態生理
4. 診断と治療
5. 疫学
6. 医薬品と薬理作用
7. 医療機器
8. 医療行政(予防、保健、福祉、医療)
9. 医療経済

(2) 当該分野固有の能力

基本的な診療を指導医の監督下で実践できる。

1. 基本的診察と手技ができる。
2. 診断と治療に必要な検査を選択し、データを解釈できる。
3. 適切な診断ができる。
4. 適切な治療計画が立てられる。
5. 診療記録を適切に記載し、プレゼンテーションできる。
6. チーム医療の重要性を理解し、安全な医療を実践できる。

保健・医療・福祉に関する制度や業務を理解し、その改善に貢献できる。

1. 疾病の予防に貢献できる。
2. 患者への健康教育を実践できる。
3. 地域の保健指導を実践できる。
4. 検診、スクリーニングの重要性を理解し実践ができる。
5. 厚生・行政の概要を理解し役割を果たすことができる。
6. 社会福祉、保険制度を理解し実践できる。

国際的な視野をもちつつ、地域の実情に合った医療を実践できる。

1. 地域の実情(伝統や風習)を踏まえた地域医療を実践できる。
2. 語学に堪能で国際的な視野をもって行動できる。
3. 国際保健に関心をよせ、情報収集し、課題解決に取り組める。
4. 海外の学生と積極的に交流できる。

(3) 汎用的能力

患者・家族及び医療従事者間で適切なコミュニケーションをとることができる。

1. 患者・家族，医師及び他医療職種と良好な関係を形成し，正確な情報の収集・伝達ができる。
2. 患者・家族に傾聴，共感，支持的態度を示し，適切な診療ができる。
3. 英語を用いて患者と基本的なコミュニケーションをとることができる。

基礎・臨床研究に興味を持ち，自ら問題を発見し，論理的思考で問題解決をはかることができる。

1. 基礎・臨床研究に興味をもち，研究に取り組むことができる。
2. 自ら未知・未解決な問題を発見し，論理的思考により研究を推進し，問題解決できる。
3. 研究についてプレゼンテーションができ，新しい知見を発信できる。

(4) 態度・姿勢

患者・利用者の価値観や背景を理解し，個性性を尊重できる。プロフェッショナルにふさわしい倫理観を持ち，礼節ある態度を示すことができる。

1. 法的責任・規範を遵守できる。
2. 患者中心の視点を持ち，利他的，共感的に対応できる。
3. 多様な価値観や文化的背景を理解し患者・利用者の個性性に配慮できる。
4. 患者・利用者に対して正直，誠実であり，礼儀正しく振る舞うことができる。
5. 研究・医療倫理，医療安全，守秘義務，説明責任を理解し実践できる。

生涯にわたり自ら学ぶ態度をもち，自己研鑽を続けることができる。

1. 自己主導型学修により課題を設定し，その解決のために正しく情報を検索し，課題解決できる。
2. 自己評価と振り返りを通して生涯学習を継続できる。
3. 現場での実践を通して自己の向上を図ることができる。
4. 探究心，向学心，向上心をもち続けられる。

保健学科

看護学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

変化の大きい現代社会のなかで，人々が求める質の高い保健医療福祉サービスを提供するために，関係職種と適切に連携しながら看護専門職者として指導的役割を遂行し，常に探究心をもちつつ全人的な看護実践および課題解決が出来る人材を育成する。

保健学科看護学専攻に4年以上在学し(3年次編入生は2年以上)，所定の授業科目および124単位以上を修得のうえ，下記の能力を有すると認められる者に，学士(看護学)の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 人間の成長や発達，心理や行動，健康に関する基礎科学が理解できる
- 看護の基盤となる人体の構造や機能，病態，治療に係わる系統的知識を深める
- 保健医療福祉への活動の基盤となる健康科学，看護実践科学，関係法規や倫理的原則が理解できる
- 看護の探求のための研究方法や計画立案・実施評価にかかる一連の過程が理解できる
- 国際社会における経済や社会，自然ならびに文化や芸術に関する理解を深める

(2) 当該分野固有の能力

- 対象の権利を尊重した上で適切な看護実践ができる

- 科学的根拠に基づく看護計画を立案し、その成果を評価できる
- 医療安全に関する指針等に基づき、医薬品や医療機器が管理できる
- 疾病予防や健康の維持増進の観点から対象（個人・家族・集団）に必要な保健指導ができる

（3）汎用的能力

- 自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決する
- チームの目標に沿って構成員の意見や行動を調整・整理し、リーダーシップを発揮する
- 日本語や英語により、口頭または資料を用いて有効なコミュニケーションを行う
- 時間管理、優先順位づけを行い、定められた期限とルールを守り行動できる
- 多文化間での活動に不可欠な異文化理解と、翻って自国の文化を客観的に洞察する
- 統計スキルを用いて、情報を収集・加工し、新たな意味を見出す

（4）態度・姿勢

- 対象者の権利を尊重し、個人情報を守守する
- 多職種と十分に意思疎通をはかり、連携できる
- 傾聴や対話を通して対象と共感的なコミュニケーションを行う
- 課題に対して主体的、客観的、創造的に取り組む
- 新しい知識や技術を学び看護を探究し続ける

放射線技術科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

放射線に関わる科学・技術および保健医療の基礎知識を主体的に学修し、医療技術の進歩に対応できる応用力や臨床での実践力を身に付けることを目標とし、それにより臨床医療分野で求められている指導的役割を果たすことのできる人材や、放射線技術科学分野における教育・研究の充実に寄与できる人材の育成・輩出をめざしている。

○学位授与条件

本学に当該プログラムの修行年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得したもので、下記の能力を有すると認められる者に、学士（保健学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

- 人体の構造と機能及び疾病に関する系統立てた知識を有し理解できる
- 生命科学・保健・医療に関する幅広い基礎知識を有し理解できる
- 医療に応用される理工学及び情報科学の基礎知識を有し理解できる
- 放射線の物理的性質と放射線計測に関する基礎知識を有し理解できる
- 放射線生物学および放射化学に関する基礎知識を有し理解できる
- 放射線の取扱いおよび管理に関する基礎知識を有し理解できる
- 装置・機器の構造・動作原理に関する基礎知識を有し理解できる
- 医用画像に関する画像工学・情報工学の基礎知識を有し理解できる
- 医用画像に用いられる検査法の基礎知識を有し理解できる
- 医用画像に必要な解剖・病態に関する基礎知識を有し理解できる
- 核医学検査に関する基礎知識を有し理解できる
- 放射線治療に関する基礎知識を有し理解できる

（2）当該分野固有の能力

- 理工学及び情報科学を医療に応用することができる
- 放射線計測を実践できる
- 放射線生物学及び放射化学を医療に応用することができる
- 放射線の取扱い及び管理を実践できる

- 装置・機器の保守管理を**実践**できる
- 画像工学・情報工学を医用画像の解析・評価・処理に活用できる
- 医用画像に用いる検査法を**実践**的に活用できる
- 医用画像に必要な解剖・病態に関する知識を**実践**的に活用できる
- 核医学検査に必要な知識・技術を**実践**的に活用できる
- 放射線治療に必要な知識・技術を**実践**的に活用できる

(3) 汎用的能力

論理的に思考できる

- 必要な情報を**収集**できる
- 収集**した情報を分析できる
- 自らの考えを的確に文章表現できる
- 口頭または資料を用いて有効なプレゼンテーションができる
- 他者との良好なコミュニケーションができる
- 自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決できる

(4) 態度・姿勢

- 新しい知識や技術を学び探究することができる
- 責任感をもって医療を**実践**できる
- 医療の向上のための**実践**への情熱をもつ
- 医学・医療技術の進歩に寄与することへの情熱をもつ
- 対象者の権利を理解し、尊重できる

検査技術科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本プログラムでは、臨床検査科学領域および生命科学関連分野で活躍できる人材を提供するために、1)豊かな人間性やチーム医療の一員にふさわしい知性、教養および倫理観を備え、課題解決を図っていく能力を有する人材、2)生命科学、基礎医学、臨床検査科学を基盤とし、自ら知識と技術を習熟・発展・統合させることができる能力を有する人材、3)臨床検査科学領域の技術改革・進歩、高度専門技術に対応・精通し、指導的役割を担い得る能力を有する人材を育成する。以上の人材育成目標を達成するために、本学に修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得の上、下記の能力を有すると認められる者に学士（保健学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 生命科学、医学、保健・医療に関する知識を身につける。
- 人体の構造や機能、代謝について系統的に理解する。
- 組織・細胞の形態や機能について系統的に理解する。
- 生体の成分や遺伝子の機能について系統的に理解する。
- 免疫の仕組みと生体防御に関する知識を身につける。
- 検査に関する情報処理、統計処理の方法を理解する。
- スタンダードプリコーション（標準感染予防策）の基礎が身についている。

(2) 当該分野固有の能力

- 人体組織・細胞の構造とその病気による変化を適切に解析できる。
- 人体の化学成分や遺伝子とその病気による変化を適切に解析できる。
- 血液の働きや免疫機能とその病気による変化を適切に解析できる。
- 病原微生物の取り扱いと同定を適切に**実践**できる。
- 人体の生理機能とその病気による変化を適切に解析できる。
- 医療機器、検査機器のしくみを知り正しく操作できる。

- 臨床検査や生命科学に関する英語の文献を読むことができる。
- 臨床検査の意義を理解し、正確で迅速な検査ができる。

(3) 汎用的能力

- 問題解決のために必要な情報を収集し、活用できる。
- 実験・実習や観察によって得たデータを正しい手法で解析できる。
- 実験・実習の記録やデータを取りまとめ、報告・発表できる。

(4) 態度・姿勢

- 被験者や他の医療職者と十分な意思疎通ができる。
- 実験・実習のデータの保守や個人情報の秘守ができる。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

・医学科

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/medicine/threepolicies-f/>

・保健学科

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/health/threepolicies-f/>

（概要）

医学科

医学教育プログラム

○カリキュラム編成，学修内容・方法についての基本方針

医学科の教育理念と教育目標に基づき，学位授与の方針に合致した人材を育成するために，共通教育科目と専門教育科目を体系的に編成し，能動的学修（アクティブ・ラーニング）の機会を全学年で設けると共に，先端医学，社会的要請，国際基準に対応する教育課程を編成・実施する。

1. 初年次教育では，幅広い知識・教養と専門教育科目修得の基本的能力を培う共通教育科目と，医学に対する動機づけやキャリアについて学ぶ専門科目を開講する。
2. 基礎医学教育では，講義，実習を組み合わせた体系的な課程に加え，臨床医学との接点となる統合科目や，医学研究に触れる医学研究実習を開講する。
3. 臨床医学教育では，病態・疾患を臓器別に学ぶ課程を終えた後に，新潟大学医歯学総合病院と近隣の基幹病院等で組織される臨床教育協力施設においてプライマリ・ケアから高度先進医療までを医療チームに参加して学ぶ診療参加型実習を開講する。
4. 国際的感覚を有したリーダーを育成するため，医学英語教育の推進と共に，医学研究実習や臨床実習を海外施設で行う機会を設ける。

○学修成果の評価方法

プログラムの到達目標の知識・理解に関しては筆記試験，口頭試問により評価を行う。到達目標の当該分野固有の能力に関しては，筆記試験，口頭試問，観察評価，臨床技能評価により行う。到達目標の汎用的能力に関しては，観察評価，臨床技能評価により行う。到達目標の態度・姿勢に関しては，観察評価，臨床技能評価により行う。

保健学科

看護学プログラム

○カリキュラム編成，学修内容・方法と学修成果の評価方法

看護学プログラムは4年制であり，学年毎に学習内容が分けられる。授業科目は必修科目と選択科目がある。構成は，教養教育に関する授業科目群として「教養」「語学」「学習法」，専門基礎科目群として「生命科学・健康・社会医学」，専門教育科目群として「基礎医学」「領域別看護学」「卒業研究」，そして実践型の学習科目群として「臨地実習」があり，4群8学習領域から構成される。なお国家試験受験資格に係る看護師教育課程と保健師教育課程の科目は必修とし，助産師教育課程の履修は選択制としている。

第1学年は「主体的な学習姿勢および知性・教養・倫理観の滋養」を重視する。初年次

教育では大学教育法として学習態度の転換をはかり、能動的に学ぶ姿勢を育成する。また一般教養科目を通じて、多様性、文化や価値を受容し、個人を尊重する態度を滋養する。さらに第1学年から、看護学の基礎領域の講義および基礎看護学実習として臨地実習を行い、看護専門職者としての自覚・学習意欲の向上を図る。専門教育科目群はパフォーマンス評価を取り入れて学習成果を評価する。

第2学年は、「看護実践の基盤となる系統的知識の学習と医療人としての自覚の育成」を重視する。基礎医学系の講義と並行して領域別の看護学の講義や、看護学演習により、看護職者としての自覚を育成する。演習科目はグループ学習形式でアクティブラーニングを実施し、パフォーマンス評価を取り入れた学習成果を評価する。

第3学年は「臨地における看護アセスメント力の鍛錬と、知識・技術の統合」が中心となる。領域別演習により紙上事例に基づく看護アセスメント力を洗練させた上で、第2学期は病院や施設での臨地実習で知識と技術の統合を図り、より専門的な問題解決能力を育成する。臨地実習科目はパフォーマンス評価を取り入れて学習成果を評価する。

第4学年は、「看護の探究・研究的態度の育成と自己省察」が中心となる。看護研究を通じて課題探究力、研究計画立案、倫理的配慮を重点的に学び、探究心、看護の開発・開拓のための研究的態度の育成と、管理・教育的な思考を醸成する。さらに公衆衛生看護学実習、看護管理論などにより、広い視点からキャリア形成を見据えた自己省察の期間となる。これらはパフォーマンス評価を取り入れた評価とする。

看護学プログラムで最も重視する学習成果は、看護実践力の育成を通じて獲得した問題解決能力である。入学時期から卒業年次に向けて、専門性と統合力を高めるよう育成し、その学習成果をプログラムの教育目標に直結する重要科目による直接評価で卒業生の質を担保する。

放射線技術科学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法

放射線技術科学教育プログラムでは、幅広い教養を持ち、かつ専門的知識と技術の確かな実践・応用能力を身に付けた診療放射線技師を養成するためにカリキュラムを編成している。初年次の教養教育では、大学で放射線技術科学を主体的に学修するという自覚を「大学学習法」により促し、また多様な教養・語学の涵養を目的として、外国語科目、自然科学系科目、人文・社会科学系科目などの教養教育に関する授業科目を課している。中でも、科学的思考の基礎となる「自然系共通専門基礎科目」6単位を必修としている。保健学科の共通科目（専門基礎科目）では、専攻の異なる者が意見交換しながら、保健・医療に関する幅広い知識や協働する姿勢を身に付けられるよう第1年次から第4年次まで配置している。当該専攻固有の専門教育科目では、診療放射線技師学校養成所指定規則に定められた教育内容を基本として、学生が意欲的に学べるよう初年次からスタートさせ、学年が進行するにつれて専門科目への割合が増えていく、いわゆる「くさび型」カリキュラムとしている。第4年次前半では、医歯学総合病院の他、市内の複数の基幹病院と連携した臨地実習を行い、診療放射線技師として必要な基礎的实践力を身につけるとともに、医療現場で良好なコミュニケーションがとれる能力の育成を行う。また、第4年次後半で行う「卒業研究」を通じて、科学の進歩を背景に高度化かつ専門化が進む放射線技術に対応できる「技師」や「研究者」に求められる探究心、問題解決能力、研究成果を発表する能力を修得できるプログラム内容になっている。

○学修成果の評価方法

プログラムレベルの学修成果は各履修科目の成績評価（科目の特性に応じて、定期試験、レポート、平常点等の結果に基づき総合的に実施することを基本とする。）の集積として示され、その中で、本プログラムの人材育成目標に直結する集大成科目で学修成果を直接評価して卒業生の質を担保する。

検査技術科学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

検査技術科学教育プログラムは4年制で、各タームは5～11の授業科目で構成されている。各授業は、豊かな教養と生命科学、医学などの専門知識・技術を身に付け、医療および関連分野で実践力を備えた「広い視野を持つ臨床検査技師」を養成することを、主な教育デザイン・学修内容として編成・配置されている。

第1学年は「大学学習法と知性・教養・倫理観の醸成」、第2学年は「基礎的な医学知識の獲得・学習と医療従事者としての自覚」、第3学年は「臨床検査科学の学習と知識・技術の統合」、第4学年前期は「臨床検査科学的課題の探究・解決・発表」、同後期は「臨床検査の実践と自己フィードバック」というプログラムとなっている。

具体的には、初年次に「大学学習法」により、大学で臨床検査科学を学ぶという自覚を促し、知性・教養・倫理観の育成を目的として、外国語科目、自然科学系科目、人文・社会科学系科目などの教養教育に関する授業科目：31単位以上を課している（単位取得をもって、学修成果の評価とする）。

第2学年から、臨床検査技師国家試験科目に準拠した専門基礎科目や専門教育科目（基礎医学）の学修を開始し、また1タームの「臨床検査管理概論」では、早期から臨床検査の現場（医療機関）を見学・体験させ、臨床検査技師としての自覚・態度を醸成する（科目の学修成果は、定期試験により評価し、「臨床検査管理概論」は見学事項に基づく、パフォーマンス評価により評価する）。

第3学年では、臨床検査科学に関する学修を本格化させ、生命科学、基礎医学から臨床医学におよぶ幅広い知識と技術を統合させるため、各種の臨床検査演習・実習科目を課している（学修成果は、定期試験により評価するが、特にカンファレンス方式の「病気の成り立ち」はパフォーマンス評価により評価する）。

第4学年1・2タームで実施する「卒業研究」を通じて、探究力、問題解決能力、研究成果を発表する能力を修得できるプログラム内容になっている（学修成果は、卒業研究発表会における本人のプレゼンテーションおよび質疑応答により、評価する）。また、カンファレンス方式の「疾患と臨床検査」の学修成果はパフォーマンス評価により行う）。

第4学年3タームでは、医療機関での臨地実習を実施し、医療人としての自覚を持たせ、医療現場で医療職者や被験者との良好なコミュニケーションがとれる能力の育成を行う（学修成果は、臨地実習指導者からの評価を基に、学生にフィードバックする）。また4タームの「医学検査管理総論」では臨床検査技師国家試験科目に準拠した専門教育科目（臨床検査科学）の集中講義および総まとめ試験を実施する。

本プログラムで重要視する学修成果である、1）豊かな人間性やチーム医療の一員にふさわしい知性、教養および倫理観を備え、課題解決を図っていく能力、2）生命科学、基礎医学、臨床検査科学を基盤とし、自ら知識と技術を習熟・発展・統合させることができる能力、3）臨床検査科学領域の技術改革・進歩、高度専門技術に対応・精通し、指導的役割を担い得る能力を評価して、本プログラムの質を担保する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

・医学科

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/medicine/threepolicies-f/>

・保健学科

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/health/threepolicies-f/>

（概要）

○医学教育プログラム

（1）入学者に求める学力

- ・高等学校卒業レベルの基礎学力を十分に有する。
- ・医学を学ぶ上で重要な科目への高い理解力と応用力・判断力を有する。
- ・良き医療人・医学者になるための強い学習意欲と科学的探究心を有する。
- ・協調性に富み、豊かな教養と人間性、社会に貢献するために必要な倫理観を有する。
- ・広い視野を有し、積極的に行動できる。

（2）入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

- ・高等学校卒業レベルの基礎学力を持ち、医学を学ぶ上で重要な科目への高い理解力と応用力を有し、意欲的で協調性に富み行動力に溢れる学生を選抜する。
- ・大学入学共通テストでは、5教科7科目の試験を課し、基礎学力を評価する。個別学力検査では、英語、数学、理科(物理・化学・生物から2科目選択)を課し、理解力や応用力などを評価する。面接試験では、理解力や判断力とともに人間性、倫理観、協調性や向学心を評価する。

学校推薦型選抜

- ・高等学校卒業レベルの基礎学力を持ち、医学を学ぶ上で重要な科目への高い理解力と応用力を有し、意欲的で協調性に富み行動力に溢れる学生を選抜する。
- ・大学入学共通テストでは、5教科7科目の試験を課し、基礎学力を評価する。
- ・調査書、志願理由書および面接試験では、理解力や判断力とともに人間性、倫理観、協調性や向学心を評価する。
- ・学校推薦型選抜(地域枠)では、学校推薦型選抜(一般)と同様のほか、とくに面接試験において新潟県で医療を担う強い意志を有することを評価する。

○看護学プログラム

(1) 入学者に求める学力

- ・人々の健康を支えるという高い目的意識を持ち、看護の実践や研究に取り組む意欲を持つ人。
- ・人間性豊かで相手の立場を思いやることができ、協調性のある人。
- ・多様な人々、多様な社会の要請に応えて貢献していきたいと思う人。
- ・柔軟な発想と論理的思考力、表現力、判断力を備え、広い学識の修得を目指す人。
- ・高等学校卒業レベルの幅広い基礎学力を身につけている人。

(2) 入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

- ・大学レベルの学習に必要なバランスのとれた十分な基礎学力に加え、専門分野に関連する科目に対する高い意欲と適性を持つ人を選抜する。
- ・大学入学共通テストでは5教科7科目もしくは8科目の試験を課し、看護学を学ぶ上で必要な基礎学力を評価する。個別学力検査では外国語(英語)と国語を課し、語学力に加え論理的思考力・表現力等を評価する。

一般選抜(後期日程)

- ・大学レベルの学習に必要なバランスのとれた十分な基礎学力に加え、看護学分野への幅広い興味と関心の高さおよび看護職としての適性を持つ人を選抜する。
- ・大学入学共通テストでは5教科7科目もしくは8科目の試験を課し、看護学を学ぶ上で必要な基礎学力を評価する。個別学力検査では面接を実施し、主体的な学習意欲、論理的思考力、判断力、表現力、協調性等を評価する。

学校推薦型選抜

- ・大学レベルの学習に必要なバランスのとれた十分な基礎学力に加え、看護学分野への幅広い興味と関心の高さおよび看護職としての適性を持つ人を選抜する。
- ・大学入学共通テストは免除するが、調査書による高等学校等での成績を参考に、看護学を学ぶ上で必要な基礎学力を評価する。さらに面接を実施し、主体的な学習意欲、論理的思考力、判断力、表現力、協調性等を評価する。

* 上記以外に社会人特別選抜、帰国子女特別選抜、私費外国人留学生特別選抜、第3年次編入学試験を実施している。

○放射線技術科学プログラム

(1) 入学者に求める学力

- ・放射線技術科学や健康の保持増進に関心があり、論理的思考力・表現力を備えている人。
- ・人間性豊かで相手の気持ちや考えを理解することができる人。
- ・人々の生活と社会に深い関心を持ち、人間愛に満ちた人。
- ・生涯にわたって学習し、成長していきたいという意欲がある人。
- ・高等学校卒業レベルの幅広い基礎学力を身につけている人。
- ・入学後の学修のため、物理基礎・物理を履修していることが望まれます。また数学については数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ、数学A・数学B・数学活用を履修していることが望まれます。

(2) 入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

- ・大学における勉学に必要なバランスのとれた十分な学力を有し、専門分野に関連する科目に対する高い意欲と適性及び理解度と応用能力を持つ人を選抜する。
- ・大学入学共通テストでは5教科7科目の試験を課し、高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。個別学力検査では数学と外国語(英語)を課し、放射線技術科学を学ぶ上で必要な論理的思考能力や読解能力を評価する。

一般選抜(後期日程)

- ・大学における勉学に必要なバランスのとれた十分な学力を有し、医療・健康保持に関心があり、放射線技術に関する専門分野への幅広い興味および適性を有する人を選抜する。
- ・大学入学共通テストでは5教科7科目の試験を課し、高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。個別学力検査では面接を課し、放射線技術科学を学ぶ上での理解度・論理性等に加え、専門分野に対する適性やコミュニケーション力等を評価する。

学校推薦型選抜

- ・高等学校卒業レベルの基礎学力を持つとともに、放射線技術科学に対し深い関心を持ち、人物・学業ともに優れ、目的意識が高い人を選抜する。
- ・大学入学共通テストを免除するが、本学が実施する試験等(小論文と面接)を課し、小論文では放射線技術科学を学ぶ上での理解度・論理性等を、面接では理解度・論理性等に加え、専門分野に対する適性やコミュニケーション力等を評価する。

* 上記以外に社会人特別選抜、帰国子女特別選抜、私費外国人留学生特別選抜、第3年次編入学試験を実施している。

○検査技術科学プログラム

(1) 入学者に求める学力

【知識・技能】

- ・高等学校卒業レベルの幅広い基礎学力を身につけている人。

【思考力・判断力・表現力】

- ・医療や健康の保持増進に関心があり、論理的思考力・表現力を備えている人。
- ・人々の生活と社会に深い関心を持ち、社会に貢献する意欲を持つ人。

【主体性・多様性・協働性】

- ・生涯にわたって学習し、成長していきたいという意欲がある人。
- ・医療に関する科学的知識と技術の習得に熱意を示す人。
- ・他の医療関連職の業務にも興味を持ち、幅広い視野で学びを深める人。

(2) 入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

- ・大学における勉学に必要なバランスのとれた十分な基礎学力に加え、専門分野に関連す

る科目に対する高い意欲と適性を持つ人を選抜する。

- ・大学入学共通テストでは、5教科7科目の試験を課し、本専攻の勉学に必要な基礎学力を評価する。個別学力検査では外国語（英語）と数学を課し、読解力と論理的思考力を評価する。

一般選抜（後期日程）

- ・大学における勉学に必要なバランスのとれた学力を有し、専門分野の幅広い興味と関心および適性を有する者を選抜する。
- ・大学入学共通テストでは、5教科7科目の試験を課し、本専攻の勉学に必要な基礎学力を評価する。個別学力検査では面接を課し、検査技術科学を学ぶ上で重要な論理的思考能力と表現力並びに適性を評価する。

学校推薦型選抜

- ・高等学校卒業レベルの基礎学力を持ち、専門知識を学ぼうとする目的意識と勉学意欲がある者を求める。
- ・専門分野に高い関心を持ち、医療を学ぶ適性のある者を選抜する。
- ・大学入学共通テストを免除するが、本学が実施する試験（小論文と面接）を課し、小論文では検査技術科学を学ぶ上で重要な論理的思考能力や表現力を、面接ではそれらに加え、専門分野に対する適性を評価する。

* 上記以外に社会人特別選抜、帰国子女特別選抜、私費外国人留学生特別選抜、第3年次編入学試験を実施している。

学部等名 歯学部

教育研究上の目的（公表方法：新潟大学歯学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

https://education.joureikun.jp/niigata_univ/act/frame/frame110000514.htm

（概要）

新潟大学歯学部規程（抜粋）

（本学部の教育研究の目的）

第1条の2 本学部は国民の健康・福祉に寄与する口腔科学・保健・福祉に関する研究を基盤として、基礎的な専門知識と深い教養を備え、問題解決能力の育成及び倫理観の育成を通じて、創造性並びに感性豊かで社会に貢献できる有為な人材を養成することを目的とする。

卒業の認定に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/dentistry/threepolicies-f/>

（概要）

歯学科

歯学教育プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

変化の激しい現代社会のなかで、患者の多様な価値観を受け入れ、質の高い医療を提供するために、新たな諸課題に関係者と適切に連携しながら問題解決を図っていく能力を備え、全人的医療を実践できる高い歯科臨床能力を有する人材を育成する。歯学科に修業年限以上在学し、本人材育成目標にそって設定した授業科目を履修して、基準となる単位数を修得し、下記の学習成果を有する者に、学士（歯学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

・グローバル世界における経済、社会、生物学的な相互依存関係を理解し、自然ならびに人間社会・文化に対する理解を深める。

・人間の成長、発達、老化および健康に関する基礎科学を理解する。

- 口腔の健康や疾病の基礎をなす口腔生物学を理解する。
- 歯科医療に影響を与える医学，歯学，基礎科学の最新の成果を理解する。
- 口腔疾患の病因と予防・疫学，ならびに病態，診断と治療の原理・原則を理解する。
- 歯科医療の**実践**が基盤としている法医学，倫理的原則を理解する。
- 医療提供体制と医療保険制度を理解する。

(2) 当該分野固有の能力

- 歯科医療において適切な感染予防対策を行う。
- 歯科医療において安全の確保を行う。
- 患者に対して有効な健康教育を行う。
- インフォームドコンセントの原則を遵守し，患者の権利を尊重する。
- 科学的根拠に基づいた歯科医療を**実践**し，その成績を**評価**する。
- 正確な患者の記録を作成し，適切に保管する。

(3) 汎用的能力

- 自ら問題を見つけ，解決策を立案し，問題を解決する。
- 明確かつ批判的に考え，経験や学習の成果を統合して思考を進める。
- 自己を省みて，行動やその結果を客観的に把握する。
- 統計スキルを用いてデータを処理し，数量から意味を見出す。
- 日本語や英語により口頭で，また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。
- 自主学習のためにICTを活用する。
- チームのメンバーと協調して活動するとともに，リーダーシップを発揮する。
- 時間管理と優先順位づけを行い，定められた期限内で活動する。

(4) 態度・姿勢

- 倫理的，道徳的，科学的な意思決定を行い，結果に対して責任を**負**う。
- さまざまな文化や価値を受容し，個性を尊重する。
- 自分の利益のまえに患者ならびに公共の利益を優先する。

口腔生命福祉学科

口腔保健福祉学教育プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

変化の激しい現代社会のなかで，国民の多様な価値観を受け入れ，質の高い保健医療福祉サービスを提供するために，新たな諸課題に関係者と適切に連携しながら問題解決を図っていく能力を備え，口腔保健・歯科医療・福祉を総合的に思考・展開できる能力を有する人材を育成する。

口腔生命福祉学科に修業年限以上在学し，本人材育成目標にそって設定した授業科目を履修して，基準となる単位数を修得し，下記の学習成果を有する者に，学士（口腔保健福祉学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 口腔の構造と機能を理解する。
- 高齢者や障害者の身体的，心理的特徴を理解する。
- 口腔の健康増進とオーラルヘルスケアの重要性を理解する。
- 歯科疾患の診査，処置，予防の原理・原則を理解する。
- 歯科医療の**実践**が基盤としている法医学，倫理的原則を理解する。
- 社会福祉と社会保障の全体像を理解する。
- 児童福祉，高齢者福祉，障害者福祉の理念と意義を理解する。
- 医療提供体制と医療保険制度を理解する。

(2) 当該分野固有の能力

- 歯科医療において適切な感染予防対策を行う。
 - 歯科医療において安全の確保を行う。
 - 個人、集団、社会に対して有効な歯科保健指導を行う。
 - インフォームドコンセントの原則を遵守する。
 - 科学的根拠に基づいた歯科予防処置を実践し、その成績を評価する。
 - 正確な患者・利用者の記録を作成し、適切に保管する。
- 適切な歯科診療補助を行う。
- 社会福祉援助技術にもとづいた適切な活動を行う。

(3) 汎用的能力

- 自ら課題を見つけ、必要な情報を収集、分析、統合し、問題を解決する。
- 適切に自己評価する。
- 統計スキルを用いてデータを処理する。
 - 時間管理と優先順位づけを行い、定められた期限内で活動する。
 - 日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。
 - チームのメンバーと協調し、リーダーシップを発揮する。
 - 必要に応じて専門家の支援やアドバイスを求める。
 - 自主学习のためにICTを活用する。

(4) 態度・姿勢

- 倫理的、道徳的、科学的な意思決定を行い、結果に対して責任を負う。
- さまざまな文化や価値を受容し、個性を尊重する。
- すべての患者・利用者に対して親身に対応し、相手の権利を尊重する。
- 個人情報・医療情報の秘密保持に万全を期す
- 自分の利益のまえに、患者・利用者ならびに公共の利益を優先する。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/dentistry/threepolicies-f/>

（概要）

歯学科

歯学教育プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

歯学教育プログラムは6年制で、おおむね第1学年から第2学年前期、第2学年後期から第3学年、第4学年から第5学年前期、第5学年後期から第6学年と、学習内容から大きく4期に分けられる。授業科目は基本的にすべて必修で、「教養」「語学」「学習法・研究法」「基礎歯学」「臨床歯学」「知識・技能の統合」「医療人」「国際人」の8つの科目群から構成される。なお、学生の興味・関心にあわせ、「学習法・研究法」には教室配属による研究科目が、「国際人」には短期海外派遣科目が選択科目として設定されている。

第1期は「主体的な学習への転換と教養の涵養」を重視する。大学学習法により学習態度の転換を図り、本プログラムを履修していくうえで必須な問題解決能力、論理的思考力、表現力を育成し、パフォーマンス評価により学習成果を評価する。また、一般教育科目を通じて、多様なものの見方にふれさせ、さまざまな文化や価値を受容し、個性を尊重する態度を涵養する。

第2期は「基礎歯学の学習と歯科医師としての自覚」が中心で、基礎歯学の授業科目を講義・実習形式で開講するとともに、患者とのふれあいを通して医療人としての自覚と態度を涵養する。また、講義で得た知識を統合し、問題解決能力を育成するために、講義と並行してPBLを実施し、パフォーマンス評価により学習成果を評価する。

第3期は「臨床歯学の学習と知識・技能の統合」が中心となり、臨床歯学の授業科目を講義・実習形式で開講する。それに並行して、第2期に引き続きPBLを、また新たに統合型模型・シミュレーション実習を実施し、基礎歯学を含め知識と技能を統合させ、より専

門性を高めた形で問題解決能力を育成する。そして、その学習成果をパフォーマンス評価により評価する。

第4期は「歯科医療の実践と自己省察」の期間で、医療系大学間共用試験実施評価機構が行う全国共用試験（CBT・OSCE）での知識・技能・態度の評価を経て、診療参加型臨床実習で患者診療を経験させ、歯科臨床能力を育成する。歯科臨床能力の評価は、継続的にポートフォリオを用いて形式的に行い、臨床実習終了時に患者診療を直接評価するパフォーマンス評価を実施する。

本プログラムでもっとも重視する学習成果である歯科臨床能力とは、歯科医療という文脈における問題解決能力と定義できる。低学年から高学年に向けて、問題解決能力から歯科臨床能力へと専門性・総合性・真正性を高めて育成し、その学習成果をプログラムの教育目標に直結する重要科目で直接評価して卒業生の質を担保する。

口腔生命福祉学科

口腔保健福祉学教育プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

口腔保健福祉学教育プログラムは4年制で、学期を学習の大きな基本単位としてとらえ、それぞれの学期で中心となる学習内容を設定している。それぞれの学期における学習内容は、現代の社会状況を背景として選択され、単純なものから複雑なもの、あるいは口腔から個人、個人をとりまく社会に関するものと配置されている。授業科目は基本的にすべて必修で、「教養」「語学」「学習法・研究法」「口腔保健学」「福祉学」「問題解決」「保健福祉医療人」「統合的学習」「国際人」の9つの科目群から構成される。なお、学生の興味・関心にあわせ、「国際人」には短期海外派遣科目が選択科目として設定されている。

第1学年は「大学学習法と人としての成長」、第2学年前期は「口腔の重要性理解と歯科医療従事者としての自覚」、同後期は「軽度な歯科疾患の診査・処置・予防」、第3学年前期は「進行した歯科疾患の診査・処置・予防ならびに社会福祉と社会保障の理解」、同後期は「高齢者・障害者の理解と対応」、第4学年は「個人および社会の視点からみたオーラルヘルスプロモーションの実践」となっている。

初年次には、大学学習法により学習態度の転換を図り、本プログラムを履修していくうえで必須な問題解決能力、論理的思考力、表現力を育成し、パフォーマンス評価により学習成果を評価する。また、一般教育科目を通じて、多様なものの見方にふれさせ、さまざまな文化や価値を受容し、個性を尊重する態度を涵養する。

第2学年からはPBLを全面的に導入し、統合された知識を習得させるとともに、問題解決能力、対人関係能力を向上させる。また、早期から継続して実際の患者に接する機会を設け、歯科医療従事者としての自覚と態度を涵養する。

第3学年から福祉に関する学習が本格的に開始され、第2学年に引き続きPBLにより、口腔保健学にとどまらず、口腔保健学と福祉学の知識を統合させる。また、歯科医療に関する実習を通して、歯科医療従事者としての基本的な技能を身につけさせる。

第4学年の臨床実習ならびに社会福祉現場実習に臨むにあたり、口腔保健学と福祉学の知識の統合ならびに問題解決能力を評価するために、口腔保健・歯科医療・福祉総合課題によるパフォーマンス評価を実施する。第4学年には、臨床実習ならびに社会福祉現場実習を実施し、ポートフォリオならびにパフォーマンス評価により評価する。また、両実習を通じて自ら見いだした課題に対する研究レポートを作成させ評価する。

本プログラムでもっとも重視する学習成果である口腔保健・歯科医療・福祉を総合的に思考・展開できる能力とは、歯科と福祉それぞれの領域における知識・スキルを有し、それらを統合して「食べる」ことに関する問題を解決に導く力といえる。低学年から高学年に向けて、問題解決能力を専門性・総合性・真正性を高めて育成し、その学習成果をプログラムの教育目標に直結する重要科目で直接評価して卒業生の質を担保する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

・歯学科

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/dentistry/threepolicies-f/>

・口腔生命福祉学科

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/oral/threepolicies-f/>

(概要)

○歯学教育プログラム

(1) 入学者に求める学力

- ・高等学校卒業レベルの幅広い基礎学力
- ・論理的な思考力
- ・自分の考えを適切に他者に伝える表現力
- ・自ら新しい課題に意欲的に取り組もうとする態度
- ・相手の気持ちを親身になって理解しようとする姿勢
- ・歯学・歯科医療ならびに生命科学の研究に対する高い目的意識と学習意欲

(2) 入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

学科における学習に必要な幅広い基礎学力に加え、専門分野に関連する科目に対する学習意欲と適性をもつ人を選抜する。

大学入学共通テストでは、5教科7科目の試験を課し、学科における学習に必要な幅広い基礎学力を評価する。個別学力検査では、数学、理科、外国語および面接を課し、数学、理科、外国語では歯学・歯科医療ならびに生命科学の課題に取り組む上で必要な基礎的な学力を評価し、面接では論理的思考力および表現力、態度・姿勢、学習への意欲を総合的に評価する。

一般選抜(後期日程)

学科における学習に必要な幅広い基礎学力に加え、歯学・歯科医療に対する明確な目的意識および高い適性をもつ人を選抜する。

大学入学共通テストでは、5教科7科目を課し、学科における学習に必要な幅広い基礎学力を評価する。個別学力検査では、面接を課し、論理的思考力および表現力、態度・姿勢、学習への意欲を総合的に評価する。

学校推薦型選抜

学科における学習に必要な幅広い基礎学力に加え、人物・学業ともに優れ、歯学・歯科医療に対し強い関心をもち、目的意識が明確で学習意欲旺盛な人を選抜する。

大学入学共通テストでは、5教科7科目を課し、学科における学習に必要な幅広い基礎学力を評価する。さらに、小論文および面接を課し、論理的思考力および表現力、態度・姿勢、学習への意欲を総合的に評価する。特に、小論文では論理的思考力や表現力を、面接ではそれらに加えて学習の意欲を重視する。

上記以外に帰国子女特別入試、私費外国人留学生特別入試、2年次編入学試験を実施している。

○口腔保健福祉学教育プログラム

(1) 入学者に求める学力

- ・高等学校卒業レベルの幅広い基礎学力
- ・論理的な思考力
- ・自分の考えを適切に他者に伝える表現力
- ・自ら新しい課題に意欲的に取り組もうとする態度
- ・相手の気持ちを親身になって理解しようとする姿勢
- ・口腔の健康増進を基盤とした保健・医療・福祉に対する高い目的意識と学習意欲

(2) 入学者選抜方法

一般選抜(前期日程)

学科における学習に必要な高等学校卒業レベルの基礎学力をもつとともに、専門分野に関連する科目に対する学習意欲と適性をもつ人を選抜する。

大学入学共通テストでは、5教科6もしくは7科目または6教科6もしくは7科目の試験を課し、学科における学習に必要な高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。個別学力検査では、英語および面接を課し、英語では基礎的な学力を評価し、面接では論理的思考力および表現力、態度・姿勢、学習への意欲を総合的に評価する。

学校推薦型選抜

学科における学習に必要な高等学校卒業レベルの基礎学力をもつとともに、人物・学業ともに優れ、口腔保健学および福祉学分野に対し強い関心を持ち、目的意識が明確で学習意欲旺盛な人を選抜する。

大学入学共通テストでは、5教科6もしくは7科目または6教科6もしくは7科目の試験を課し、学科における学習に必要な高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。さらに、小論文および面接を課し、論理的思考力および表現力、態度・姿勢、学習への意欲を総合的に評価する。特に、小論文では論理的思考力や表現力を、面接ではそれらに加えて学習の意欲を重視する。

上記以外に歯科衛生士学校養成所卒業者を対象とした3年次編入学試験を実施している。

学部等名 工学部

教育研究上の目的（公表方法：新潟大学工学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110000527.htm

（概要）

新潟大学工学部規程（抜粋）

（本学部の教育研究の目的）

第2条 本学部は、工学に関する教育研究を通じて基礎的な専門知識と教養を習得させ、自然・社会に対する倫理的な判断能力、基礎理論・技術を理解する能力、課題を発見し解決する能力、コミュニケーション能力をもち、社会に貢献できる有為な人材を育成することを目的とする。

卒業の認定に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/engineering/threepolicies-f/>

（概要）

機械システム工学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

グローバル化と複雑化を増す現代社会を背景に、本プログラムでは、機械工学に関連した幅広い分野の基礎知識の習得、最新のテクノロジーの学習、および人文社会系分野の学習によって、プログラム修了後、高い倫理観、豊かな創造力および柔軟な思考力を持って、社会に貢献し国際的にもグローバルに活躍できる技術者・研究者を育成することを目標とする。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目および124単位以上を修得したもので、下記の能力を有すると認められる者に、学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

●社会・自然に対する教養：様々な文化に触れ、人間と自然環境の相互関係及びこれに及ぼす科学技術の影響を多面的に考察できる

●自然科学の基礎：機械および機械関連技術の基礎となる数学と自然科学を理解し応用できる

(2) 当該分野固有の能力

●機械工学基礎理論：機械および機械関連分野に関する基礎理論と基礎技術を理解し、応用する能力ならびに必要な専門的知識と技術を統合し、説明できる

●製作・実験・設計：機械および機械関連分野に関する実験を計画・遂行し、データを解析、正しく考察し、その結果を報告できる。また、要求に合った機械設計を個人および共同で行うことができる

(3) 汎用的能力

●表現・コミュニケーション：自らの考えを的確に証述、表現、発表し、他者との建設的、効率的な討議を行うコミュニケーションができ、また専門分野における英語による読み書きおよびコミュニケーションができる

●技術者としての倫理：機械関連技術の社会、自然、人類に及ぼす影響、効果およびその責任について、人間として十分に判断できる

(4) 態度・姿勢

●問題の発見と解決策の実行：自ら学習目標を立て、継続的かつ自主的に学習・演習することにより、機械システムに関する実験、実習、研究における問題点を自ら解決し、研究などを創造的に発展させることができる

●チームワーク：実験あるいは要求に合った機械設計を共同で行うことができる

社会基盤工学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本プログラムでは、信濃川大河津分水記念碑に刻まれた「万象二天意ヲ覚ル者八幸ナリ人類ノ為メ 国ノ為メ」を理念として、社会基盤施設の計画・設計・施工・維持管理および都市・地域づくりに必要となる、社会基盤工学に関する知識や技術を修得した上で、土木技術者として自然環境との調和や人類の幸福を追求し実践できる人材を育成することを目標としている。

本プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

人類の幸福と福祉について、固有の文化を尊重しつつ普遍的に考える能力と素養を修得し、持続可能な社会形成に貢献できる社会性と具体的技術を身に付ける。

●自然条件・社会的条件の制約の中で、最良のものを創る重要性を認識する。

●まちづくりの歴史の変遷を理解し、持続可能な都市の設計手法を習得する。

自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識を身に付ける。

●工学技術者にとって共通の素養として求められる自然科学・情報技術の基礎知識を身に付ける。

●自然災害から暮らしを守る土木技術者の役割を理解し、土木技術者として直面する自然現象・災害を分析するための専門的基礎知識・技術を修得する。

国内外の地域における環境や文化の変遷と土木工学の発展との関係性を理解し、建設技術者としての倫理や地域住民に対する責任を自覚し、地域住民との連携を前提として地域の発展を支える能力を身に付ける。

●工学分野、特に建設分野における技術者倫理の重要性を認識する。

●社会資本整備に当たり、地域住民の立場に立つことの重要性を認識する。

●人と社会や環境との関係についての歴史的理解と改善方を習得する。

(2) 当該分野固有の能力

土木工学の主要分野である応用力学，土木材料学，水工学，地盤工学の各分野の基礎知識を修得する。

- 力のつり合い，構造物に作用する力とモーメントを理解する。
- コンクリートの基本的特性を理解し，所要の性能を有するコンクリートの製造方法を習得する。
- 水の物理化学的性質 や水理現象の各種保存則を理解し，流体解析に応用できる。
- 土の性質 を理解し，地盤工学に関する基礎的な理論 を習得する。

土木工学の主要分野の演習や実習を通して，自己学習の習慣ならびに応用力を養い，問題を解決する能力を身に付ける。

- 土木工学の主要分野 における学問的知識を活かして，基本的かつ重要な工学問題が解決できる。また，その達成のために継続的な自己学習に取り組む。
- 測量や製図の基本的な知識を演習や実習を通して習得する。

(3) 汎用的能力

土木工学に関する実験を計画・遂行し，限られた時間内にデータを正しく解析・考察・取りまとめる能力を身に付ける。

- 土木工学の主要分野 における基本的な実験・試験方法を理解する。
- 実験・試験における各種測定技法・技能を身につける。
- 不確実性要素を含む実験データからその傾向を見出し，限られた結果から妥当な結論 を導出できる。

自分の考えを的確に記述・表現・発表し，建設的な討議ができる能力，および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付ける。

- 各種実験，卒業研究等の成果を，レポート，報告書および学術論文に的確に取りまとめることができる。
- 学習成果を整理し，その内容を効果的に説明する技能を修得する。
- 土木工学に関連する基本的な英文表現の技法を習得し，専門分野 における文献の内容を正しく理解できる。

土木工学の専門的な知識および技術ならびに他分野の科学技術を総合し，必要に応じて他者と協働した上で課題を探求し解決する能力，ならびに生涯学習能力を身に付ける。

- 土木工学のみならず自然科学・社会科学の知識を総合し，実務における問題解決の方法論を習得する。
- 土木構造物の基本的な設計計算法を理解し，簡単な土木構造物の設計に応用する。
- 講義や演習・実習を通して習得した専門工学分野 の基礎知識を実務へ応用する。
- 学術的な調査・研究を通して問題発見・解決能力の継続的な向上を図る。

(4) 態度・姿勢

•類 の幸福と福祉について，固有の文化を尊重しつつ普遍的に考える態度・姿勢。 また，持続可能な社会形成に貢献する態度・姿勢。

- 自然科学や情報技術を学び，自然災害を理解する態度・姿勢。
- 人と社会や環境の関係についての歴史的理解と，技術者としての倫理観を持って，地域住民との連携で地域の発展を考える態度・姿勢。
- 土木実務における諸問題の解決の礎となる，土木工学の基礎的な学問的知識・技術を学ぶ態度・姿勢。
- 実験においてさまざまな観点から客観的に解析・考察・取りまとめを行う態度・姿勢。
- 演習や実習を通して自己学習をすすめるとともに，共同作業を遂行する態度・姿勢。
- 自己の考えを的確に記述・発表・表現し，建設的な討議・コミュニケーションを行う態度・姿勢。
- 土木工学の専門知識と他分野 の科学技術を総合して，課題を探求・解決する態度・姿勢。

電子情報通信プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本プログラムでは、電子デバイス、情報通信、電力・エネルギーなど、産業社会における技術基盤を支えるための幅広い基礎的な学問を修め、国際化に対応できる最先端の科学技術開拓を担える高度専門人材を育成する。

所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

（A1）多種多様な文化、経済、政治、人間、および自然などと科学技術の相互関係を理解し、科学技術の位置付け・意義について把握できる

（B1）数学、および自然科学に関する基礎知識を修得し、専門分野においてどのように応用されるかを理解できる

（B2）総合工学技術、コンピュータやプログラミング、情報セキュリティに関する基礎知識を修得し、専門分野においてどのように応用されるかを理解できる

（C1）電磁気学、電気回路などの電子情報通信工学の基礎知識を修得できる

（2）当該分野固有の能力

（A3）現在の社会が電気電子・情報通信技術者に要求する問題点と課題を理解し、それらの解決にあたり実際に経験する問題点と課題について認識できる

（C2）電子情報通信工学の基礎知識がエレクトロニクス、情報通信および電力など専門領域のどのような課題に応用されるかを理解できる

（C3）上記専門領域の基礎技術がどのように組み合わせられて実際の工業製品が作り出されているか、また電気電子・情報通信システムが構築されているかを理解できる

（3）汎用的能力

（D1）自ら実験を計画し遂行し、実験データを正確かつ工学的に解析・考察した上で、結果を分かり易く定められた期日までに的確に報告できる

（D2）要求にあった課題を設定し、専門的知識・技術を駆使して理解、分析、考察した上で、創造を發揮して問題解決へのプロセスを的確に設計できる

（E1）日本語による論理的な記述ができる

（E2）他人の主張を理解することに努め、自分の考えを論理的に説明することや発表することができ、かつ他人と討論ができる

（E3）科学技術関連の英文資料を理解でき、また技術文章の英語表現ができる

（4）態度・姿勢

（A2）技術者として必要とされる倫理観と責任を理解し、科学技術の人類の幸福への貢献について考えることができる

（D3）課題に対して自発的・自主的に学習し、探求心を持ち、継続的に学習できる

（F1）グループでの作業において、自分のなすべき行動を判断し、作業を実行できる

（F2）グループでの作業において、他者の果たすべき役割を理解し、適切な働きかけができる

知能情報システムプログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

高度に知的な最先端の情報システムの原理・仕組み・構築法に通じ、広い教養と深い見識を持ち、その知識と技術を活用することで、地球・人間・社会の中で生じる様々な課題について自ら発見と解決を図り、グローバルに様々な領域で、周囲とのコミュニケーションを図りながら活躍できる人材を育成する。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

- ◆数学、物理学などの自然科学に関する基礎理論 を修得する。
- ◆情報一般の原理を修得する。
- ◆コンピュータで処理される情報の原理を修得する。
- ◆コンピュータのソフトウェアに関する基礎的知識を修得する。
- ◆コンピュータのハードウェアに関する基礎的知識を修得する。
- ◆社会において情報を扱うシステムを構築し活用するための技術を修得する。

（2）当該分野固有の能力

- ◆情報の構造を設計する能力及び計算を設計し表現する能力。
- ◆形式的なモデルのもとで演繹する能力。
- ◆情報を扱う機械を作る能力及び運用する能力。
- ◆巨大なデータを扱う能力。
- ◆システムの体系・構造を理解し表現する能力。
- ◆社会において情報を扱うシステムを作る能力及び運用する能力。
- ◆複雑なシステムの作成を管理する能力。
- ◆社会において情報に関わる問題を発見し解決する能力。
- ◆情報一般の原理を自覚して情報社会に積極的に参画する能力。
- ◆個人および社会に対する情報の意義や危険性を読み解く能力。
- ◆社会においてルールを遵守しつつ情報を利活用する能力。

（3）汎用的能力

- ◆新たな概念や視点を獲得することができる。
- ◆論理的思考により、対象のモデル化、抽象化を行うことができる。
- ◆問題を発見し、解決することができる。また、問題解決のためのシステム思考、批判的思考ができる。
- ◆科学技術分野の論文・マニュアルなどが理解でき、また、正しい技術文書を書くことができる。
- ◆人前で、資料に基づき、発表できる。
- ◆専門分野に関する英語の読み書き及びコミュニケーションができる。
- ◆議論において自分の考えを的確に伝えられると共に、他人の主張を正しく理解できる。また、共同作業を円滑に進めることができる。

（4）態度・姿勢

- ◆技術者としての倫理・責任を自覚し、積極的に社会に関わることができる。
- ◆自主的、継続的に学習や問題解決に取り組むことができる。
- ◆他分野への興味を持ち、多種多様な考え方を結びつけて考えることができる。

化学システム工学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本学の理念「自律と創生」に基づき、地域や世界の着実な発展に貢献することを目的とし、化学と科学技術について高い見識と良識をもって社会や時代の諸問題に的確に対応し、課題解決のために広範に活躍できる人材を育成する。そのため、教育課程の中で以下の能力を養成する。

- ◆課題を発見し、それを解決する能力
- ◆課題解決に必要な知識
- ◆課題に協働的に取り組むためのコミュニケーション能力

これらの共通的な能力とともに、応用化学者・化学工学者としての必要な能力を養成する。
本学に当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

（A）政治経済、環境問題など社会の動きを理解できること、異なる国や地域の特性を理解し適切に行動できること。

（B）化学技術者・研究者として社会に対する役割や責任を理解でき、倫理的に正しい判断ができること。

（C）自然科学、情報技術などに関する知識、ならびに応用化学と化学工学に共通な知識を習得し、それらを用いて課題を解決できること。

（2）当該分野固有の能力

（D-1）応用化学コースでは、分子や集合体組織構造の設計、合成反応系や触媒の設計・開発、およびこれらを支援する化学に関して、与えられた課題を解決するための選択肢を定められた期間内に提示する能力を持つこと。

（D-2）化学工学コースでは、材料開発、化学装置やプロセス、プラントの設計、開発、運転、およびこれらを支援する化学技術に関して、与えられた課題を解決するための選択肢を定められた期間内に提示する能力を持つこと。

（3）汎用的能力

（F）自己の考えを適切に発表する能力、討論を通して合意を形成する能力、国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を持つこと。

（G）複数の問題解決策を合理的に評価できる能力、一つの解決策を実行して問題を解決する能力を持つこと。

（4）態度・姿勢

（E）学習計画の立案、実施、評価を継続して行えること。

材料科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

このプログラムでは、物理学と化学の基礎を身につけ、複雑化した工学及び材料科学の課題から問題点を抽出して解決できる高度専門人材を育成する。

本プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

◆数学（解析学・線形代数）に関する知識を習得し、これを活用することができる。

◆物理学（力学・電磁気学・量子力学・統計力学）に関する知識を習得し、これを活用することができる。

◆化学（無機化学・有機化学・物理化学・分析化学・高分子化学・生物化学）に関する知識を習得し、これを活用することができる。

◆電子工学（半導体・電子回路）および機械工学（材料組織学・材料評価学）に関する知識を習得し、これを活用することができる。

◆基礎知識を活用して自主的、継続的に学ぶことができる。

（2）当該分野固有の能力

◆材料機能を発現させる材料物性に関する学術体系を、原子・分子から理解し予想できる。

◆材料機能を作り込む材料開発に関する学術体系を、原子・分子から理解し予想できる。

- 材料工学に関する専門的学問・技術を身に付け，材料機能を解明できる。
- 材料工学に関する専門的学問・技術を活用し，新たな課題解決に応用できる。
- 専門知識を活用して自主的，継続的に学ぶことができる。

(3) 汎用的能力

- グループでの共同作業を通して，協力して互いに能力を高め合い，要求された課題を達成できる。
- 自らの考えを的確に証述・表現し，他者と建設的に討議できる。
- 専門分野に関する英語の読み書きおよびコミュニケーションができる。

(4) 態度・姿勢

- 様々な文化・学問に触れあうことができる。
- 技術者としての倫理・責任を自覚することができる。
- 科学技術の人間社会や環境に及ぼす影響と効果を多面的に理解・予想できる。

建築学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本プログラムでは，建築設計製図の理論と技術の学習を通じて空間的に課題を解決でき，建築構造や建築環境設備の特性や諸問題を理解でき，自然環境や社会環境と建築の調和を順応的に考えられる人材を育成する。

本プログラムの修業年限以上在学し，所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で，下記の能力を有すると認められる者に学士（工学）の学位を授与する。また，一級建築士試験の受験資格要件を満たすことを目指す。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 建築の規模計画，配置計画，動線計画，寸法計画および設計。
- 建築構造計画，建築構造計算，および建築構造設計。
- 建築環境計画，建築設備計画・設計。
- 建築材料，建築生産計画。
- 都市計画・設計。

(2) 当該分野固有の能力

- 建築が地球環境にどのように影響を与えているかを理解し，これらを解決する能力。
- 建築と持続可能な社会の関連を理解し，これらを可能とする能力。
- 地球全体と地域社会の関係を理解する能力。

(3) 汎用的能力

- 国内のみならず世界の歴史や文化に関する知識。
- 建築分野における技術者倫理の重要性を理解する能力。
- 建築や都市の設計にあたり，地域住民の立場にたつことの重要性を理解する能力。
- 人と社会や環境の関係について歴史的理解と改善方法を理解する能力。

(4) 態度・姿勢

●建築学の主要分野である建築設計・計画，建築構造，建築環境・設備，建築生産，並びに都市・地域計画をはじめとする建築関連分野に関して，設定された自然環境条件，社会的条件を理解し，これらに対応した基礎的知識を習得する。

●地球環境の保全と人間の健康および安全をはかり，持続可能な社会を実現していくことを緊急の課題と認識し，建築を，地域および地球規模の環境との関係においてとらえ，人類の安全と利益，および地球社会と地域社会の持続的発展に貢献できる能力を身に付ける。

- 人間社会全般や地域固有の文化と歴史，公共的福祉への洞察力を高め，その継承と改善の

ために建築技術を適切に用い、かつ建築技術が社会・自然・人類に及ぼす影響・効果を的確に把握し、建築家・技術者としての責任を自覚する能力を身に付ける。

- 建築学の工学的な基礎となる数学，自然科学，情報技術に関する基本的知識を修得する。
- 与えられた建築学に関する課題に対して，調査・実験を企画・実行し，データを解析・解釈し，定められた期間で結果を取りまとめ，報告する能力を身に付ける。

人間支援感性科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

このプログラムでは，ソフトウェア科学を共通の基礎にして，医療，福祉，スポーツ，音楽，美術のいずれかを中心に学習することにより，多様化するソフトウェアニーズに創造的・協働的に対応できる人材を養成する。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し，所定の授業科目及び 124 単位以上を修得した者で，下記の能力を有すると認められる者に，学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

•「教養系科目」では，大学生としての広い知識，見識を身に付け，分野横断的に展開される専門科目の学習の素地を作る と同時に，教養を深め，かつ広領域のバランスの取れた知識を得る。そのため，必修単位が，大学学習法（工学リテラシー入門），英語，初修外国語，健康・スポーツ，情報リテラシー，自然系共通専門基礎，自然科学，人文社会・教育科学において決められている。

•工学の基礎となる数学（確率・統計，フーリエ解析），フィジカルコンピューティング，音楽理論基礎講座，コミュニケーションツールとしての視覚造形，健康スポーツシステム論より選択履修し，専門分野への基礎知識と技能を修得する。

•専門分野 に必要不可欠なソフトウェア科学に関する科目では，**実践 プログラミング** を必修とし，専門科目や研究で活用できる応用力を身につける。

•「人間支援医工学科目」では，支援科学（福祉情報工学，人間工学など），人間医工学（バイオメディカルエンジニアリング，生体計測など）に加え，生体・福祉リテラシー科目（生理学，社会福祉，心理学）を学習し，人間，生体，社会の理解と相互関係を分野横断的に探求する。

•芸術融合科目」では，デザイン基礎，空間造形演習など美術系の科目と，音創造演習，表現素材演習など音楽系の科目，さらに芸術プロジェクト概論，デジタルサイネージなど芸術系科目の学習を通して，芸術表現の知識と技能の修得と工学応用の方法を学ぶ。

•「健康スポーツ科学科目」では，ラケットスポーツ演習，ゴール型スポーツ実習など競技技術に関する科目と，スポーツ バイオメカニクス，スポーツ生理学などの健康スポーツ科学に関する科目を学習し，スポーツを科学的に捉え，人間の健康に貢献する応用技術を修得する。

•技術日本語演習，教養系の語学科目などの履修により，技術者に不可欠な「日本語と英語，初修外国語の理解力」を身につける。

•工学基礎科目および4つのコア科目群の基礎に関する実験・実習を2年1期から3年4期までの各期に開講し，講義内容の理解を深めるとともに，実践的な知識・技能も習得する。

（2）当該分野固有の能力

•ボランティア，インターンシップ，社会生活，ニュースなどを通じて，身近な問題に注意を払い，人間支援感性科学的視点で課題を発見する能力。

•対象となる課題をしっかりと理解した上で，修得した知識を基に，課題解決策を見出し，提示できる能力。

•ソフトウェア科学，情報工学の知識を基礎にして，機器やシステムを設計できる能力，表現力。

•人間支援医工学分野 の多様な社会ニーズに対応できる能力。

芸術融合分野の多様な社会ニーズに対応できる能力。

●健康スポーツ科学分野の多様な社会ニーズに対応できる能力。

●習得したソフトウェア工学，人間医工学，芸術工学，健康スポーツ科学の知識を基に，研究・開発を遂行できる能力。

(3) 汎用的能力

●自分の意見や研究開発成果などを他者に正確に伝えるための日本語・英語，初修外国語による表現能力。

●他者との協議を通じて目標を設定できる能力。

●実験実習および研究において，その目的を理解し遂行する能力，また必要に応じて適切に統計処理を活用できる能力。

●調査結果，研究開発成果などをまとめ，他者に向けて公開できる論理展開能力および発表・討議能力。

●問題発見，課題設定，課題解決などの様々な段階において，対象となる事象を的確に把握し，総合的に評価・判断できる能力。

(4) 態度・姿勢

●技術者として必要とされる倫理観と責任を理解し，社会に対する科学技術の貢献について考えることができる。

●探究心をもって，積極的かつ自主的，継続的に学習や設定課題に取り組むことができる。

●課題発見から問題設定・解決までの様々な場面で，分野の垣根にとらわれることなく分野横断的に協働できる。

●使う人の立場に立って，機器，システムなどを設計・開発することができる。

協創経営プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

科学と技術を中心とする広範な知識を駆使し，グローバルな視点から地域社会や産業の発展に貢献し得るイノベーションリーダーを育成する。

本プログラムの修業年限以上在学し，所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で，下記の能力を有すると認められる者に，学士（工学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

●自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識。

●産業財産権，著作権，種苗法等の知的財産権の概念と法制度に関する基礎知識を有し，それらの産業的活用について理解できる。

●課題解決に必要な，特に工学分野の基礎知識を系統的に理解できる。

●実践科目への主体的参加を通じ，社会における企業等の経済活動の実際を経験的に論理的に理解する。

(2) 当該分野固有の能力

●種々のグループ活動において，異なる背景を持つメンバー間の価値観，利害，意見を調整，集約し，集団として最高のパフォーマンスを発揮することで円滑に目的を達成できる。

●統計，アンケート，インタビューなどによる定量または定性データを用い，社会や市場，環境等を定量的に分析，把握できる。

●社会科学的視座から工学と社会を結び，グローバルな視点を有して地域社会や産業の発展に貢献できる。

(3) 汎用的能力

●グループでの共同作業を通して，協力して互いに能力を高め合い，要求された課題を達成できる。

●自らの考えを的確に証述・表現し、他者と建設的に討議できる。
●工学から経営にわたる領域において、英語を用いて円滑なコミュニケーションができる。
●社会に潜在する課題を探索し、顕在化することで課題の解決に必要な知識、手段とを結びつけ、解決までの道のりを示すことができる。
●課題解決のために求められる専門的学術分野・科目を特定し、自ら学習、習得した成果をもって具体的解決策を提示できる。

(4) 態度・姿勢

●様々な文化や学問に触れ、吸収・融合することで新しい価値を主体的に創造し続けられる。
●グループでの共同作業においてメンバーの意見に傾聴しつつ障害を克服して目標達成を図ると同時に、グループとしての課題解決力向上に常に配慮し続けられる。
●技術者としての倫理・責任を自覚することができる。
●科学技術の人間社会や環境に及ぼす影響と効果を多面的に理解・予想できる。
●直面する課題の解決に必要な学問を、分野に拘わらず自主的かつ継続して学習する姿勢。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/engineering/threepolicies-f/>

（概要）

機械システム工学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

本プログラムは4年制であり、授業科目は、教養科目、専門基礎科目（数学、物理など）、専門応用科目（本分野固有）に大別される。科目は、必修、選択必修、選択に区分される。これらの区分は、教育目標達成に対する寄与度などを考慮して決めている。1年次には工学部工学科力学分野で学び、2年次から本プログラムに配属される。学年進行に伴い、基礎、発展、応用へとカリキュラムが順次展開される構成とする。

1年次のカリキュラムは主に、技術者としての倫理などを含む「社会・自然に対する教養」および「自然科学の基礎」を中心に学ぶ。また本学科の特徴として、一つの専門分野に閉じることなく工学全体を俯瞰させるための基礎教育を工学部共通教育として開設している。さらに、力学分野（本プログラム）への導入科目も開設されている。

2年次のカリキュラムは主に、専門応用科目の中でも「機械工学基礎理論（4力学など）」および体験的な「ものづくり実習」を開設し、本専門分野固有の基礎教育を目指す。実習では、チームワークの能力も涵養する。

3年次カリキュラムでは主に、発展的機械工学の理論と応用科目、および製作・実験・設計に関する科目が開設されている。「製作・実験・設計」科目では、「問題の発見と解決策の実行」およびチームワークを主体とし、能動的学習が要求される。

4年次カリキュラムでは主に、3年次までに修得した知識・能力を総合的に活用して、問題解決能力を高めるために、「卒業研修」と「卒業研究」を行う。卒業研究にあたっては、論文の提出と発表によって教育目標の達成を総合的に評価し、卒業生の質を担保する。

全学年を通して、主に実験・実習科目においては、レポート・プレゼンテーションなどによって「表現・コミュニケーション」能力の涵養を図っている。世界でグローバルに活躍できるエンジニアを育成するため、初年時の英語、初修外国語の他にも、4年次には専門分野に関する英文輪読および技術英会話を開設している。

集大成科目（卒業研修・卒業研究）の評価：卒業研修については、研究室における研究の中間発表などを通じて、研究の背景、目的および結果が社会に及ぼす影響についての理解度、計画能力、創造力、遂行能力、問題発見能力を総合的に評価する。卒業研究に関しては、上記を発展させ、卒業研究発表と卒業論文提出を課し、上記能力に加えて問題解決能力、発展能力、報告能力などをルーブリックなどを用いて評価する。

ディプロマ・ポリシーで設定された到達目標に関連する科目群の評価：設定されたカリキ

キュラムマップとNBASを用いることによって、本プログラムの到達目標が達成されているかを、学年進行に伴って指導し間接評価する。

社会基盤工学プログラム

○カリキュラム編成、および学修内容・方法

本プログラムでは、修業年限以上の学修を通して、別に定める8項目の学習・教育到達目標を卒業時に達成するために、個々の科目の学習・教育到達目標各項目との対応関係を明らかにした上で、以下の方針のもとに各授業科目を開講する。

1年次では、総合工学概論や総合技術科学演習などの工学科共通科目の他に、基礎的な専門科目（材料力学入門・社会基盤工学概論など）や数学・力学・情報処理などの専門基礎科目・教養系科目の他に、語学や人文科学・社会科学等を含む教養系科目を主に学ぶ。

2年次では、開始時に社会基盤工学、機械システム工学のいずれかのプログラムに配属し、専門分野の学修がスタートする。社会基盤工学（土木工学）の主要分野である応用力学、土木材料学、水理学、地盤工学に関する必修科目が開講されており、これらの科目を通して専門分野の基礎知識を修得する。また、社会基盤設計基礎では、計画・設計の簡単な課題に取り組み、社会基盤構造物の計画・設計の要点を理解し、意見の調整・集約、討論、発表・説明等の能力の修得に努める。

3年次では、上述の主要分野に対応した実験科目を通し、それまでに学んだ学問分野をより深く理解すると共に、計測技術を身に付け、得られた結果を分析・考察する能力を養う。また、社会基盤プロジェクト・マネジメントでの学修を通して、建設実務の流れを学び、受講生自らが社会基盤施設の計画や設計、維持などに関するより実践的な課題に取り組み。さらに、夏期休暇期間中にインターンシップが計画されており、学問分野と実務との関連についての理解を深め、より具体的な課題への取り組み方について学ぶ。

4年次では、卒業研修と卒業研究を通して、専門的な問題を理解・整理し、調査や分析、実験などに基づき解決するための能力を身に付ける。また、自分の考えを人に正しく伝え、相手の意見を理解する能力や、プレゼンテーション技術、土木技術者としての倫理観などについても養う。

○学修成果の評価方法

学修成果は、個々の授業科目における成績評価結果を、別に定める達成度評価方法に基づいて量的・質的に総合することで評価する。量的評価では、単位を修得した授業科目の学習時間をもとに学習・教育到達目標の各項目の達成度を評価する。一方、質的评价では、単位修得科目の成績評点をもとに、学習・教育到達目標ごとの評点の重み平均によって評価する。達成度はセメスター（各年度各学期）毎に学生が確認できるようになっている。なお、個々の授業科目における学修成果は、試験、レポート・報告書、製図図面や構造模型、学位論文などの書面提出物、または成果発表会等の口頭発表等を評価の対象として、各科目のシラバスに定める方法に基づき評価する。

さらに、4年次学生全員を対象に、学習・教育到達目標の達成度に関する自己評価アンケートを各年度2月に実施し、学生自身が卒業時に学修成果を確認できるように配慮している。

電子情報通信プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

本プログラムは4年制で、おおむね第1学年、第2学年から第3学年、第4学年と学習内容から大きく3期に分けられる。教養系科目の卒業基準36単位中約7割の25単位、学部専門系科目の卒業基準82単位中約9割の74単位が必修もしくは選択必修である。（A）多面的に物事を捉える能力、技術者としての倫理・責任の自覚力、および電気電子工学と社会との係わりについての理解力（B）数学、自然科学、および情報技術に関する基礎知識と応用力（C）電気電子工学に関する基礎知識と応用力（D）実験の計画的遂行能力、課題の設定・達成能力、および自主的・継続的学習能力（E）日本語による論理的な記述

と発表・討議などの能力、および英語によるコミュニケーション基礎能力（F）グループでの作業における判断力および実行力を養う教育課程を編成する。

第1期1年次には外国語や人文社会・教育科学科目も含む教養系科目を幅広く学ぶ。同時に、学習上のアドバイスが受けられる大学学習法（工学リテラシー入門）を受講する。

第2期2年次から3年次の終了までに、電子情報通信工学習得に必要な専門基礎科目を履修することにより、電子情報通信工学に関連する数学および物理学に関する基礎知識を身につける。続いて、電磁気学、電気回路等の専門応用科目を履修することにより、先端的な内容を含む電子情報通信工学の応用分野を学修する。また、電子情報通信実験および電子情報通信設計製図を履修することにより、未知なる課題に対して、解決のための実験方法の立案、実験の実施、実験結果の解析及び報告書作成が行える能力を身に付ける。他に、施設見学や特別講義、インターンシップなどの選択科目を通してキャリアに対する意識を涵養する。

第3期4年次に、卒業研修及び卒業研究を履修することにより、電子情報通信工学に関する課題を解決できる能力を修得する。

本プログラムの学習成果である基礎学力については主に第1期1学年から第2期3学年の授業における筆記テストおよび課題レポートによって能力を点数化し評価する。国際的に通用する専門的能力と科学技術開拓能力については、第2期3学年のPBL科目「電子情報通信設計製図」における制作物、レポートおよびプレゼンテーション、第3期4学年における「卒業研修」でのレポートと中間発表の点数化により中間評価する。また、第3期4学年の「卒業研究」では未知なる問題への取り組みに関する進捗状況報告、及び成果報告としての卒業論文および卒業発表を点数化し評価する。各科目の学習内容・水準については、国際的な工学教育認証団体であるJABEEによる認証を受ける予定である。

知能情報システムプログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

1年次では、一つの専門分野に閉じることなく工学全体を俯瞰させるための基礎教育を工学部共通教育として実施し、さらに2年次以降に学ぶ専門分野に必要な基礎知識を学修する。そのために、大学学習法（工学リテラシー入門）におけるアクティブラーニングの導入やインターンシップによる社会・企業体験を通じた、主体的に学修する学生への転換教育、総合工学概論や総合技術科学演習による複数分野の基礎知識・基礎技能を獲得させる基礎教育、技術者や研究者の心がまえに関する倫理教育、及び専門分野を学ぶ上での基礎となる数物化系・社会科学系・情報リテラシーに関する分野導入教育を行う。

2年次以降は知能情報システム分野に関連する専門科目を学修する。2年次では、情報処理のための数学、プログラミング、ソフトウェア、ハードウェア、ネットワークなどの基礎を学修する。さらに、3年次では、人工知能、IoT（Internet of Things）、ビックデータ、ロボットなどに関係する専門、ならびに、応用分野を学修する。

また、2年次から4年次まで実験、実習、卒業研究を通して、少人数のゼミや研究室などの小さなコミュニティの一員となり、学習面だけでなく生活面でも指導教員のきめ細かな指導を受けながら、様々な分野において学んだ知識・技術を応用して、問題を発見・整理・分析する能力、コミュニケーション能力や技術者としての倫理観・責任観を培う。さらに国際工学概論や海外研修などによりグローバルなエンジニアリング・デザイン能力を培う。

各学生の学修成果は、半年ごとに各学生が作成するNBASのアセスメントシートによって、プログラムの到達目標および個人の長期目標に対する到達度合いとして学生本人および教員が認識できるようにする。最終的には、工学部規程および同細則に記載されている知能情報プログラムの第4年次進級基準および卒業資格基準に照らし合わせて評価する。

化学システム工学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

本プログラムにおいては、「知」を探究する解析力、「解」を提案する創造力、「夢」を実現する総合力を育成することを目標とし、入学から2年生第1学期までの期間で、社会人

としての一般教養に加えて、工学の共通基盤の修得及び化学システムプログラム共通の化学および化学技術基盤の習得に重点を置いたカリキュラム(KIJ phase1)を編成している。2年生第2学期より応用化学コースと化学コースに分かれて、それぞれ応用化学、化学工学に関する専門的知識の習得ならびに問題解決能力の養成に重点を置いたカリキュラム(KIJ phase 2)を編成している。なお、コースに分かれた後でも学外研修や特別講義などコース共通の行事や科目もあり、学科として統一したカリキュラム体系になっている。応用化学コース、化学工学コースともに本プログラムでは化学技術者・研究者としての共通基盤をまず養成し、その上で、応用化学あるいは化学工学に関する専門的職業人としての能力を養成する。

講義による知識の修得とあわせて、実験・実習科目を組み合わせることで、技能と知識の連携を目指す。また、実験・実習科目の中にはグループ学習を通じて、相互とコミュニケーションをとりつつアクティブラーニングを行っているものを取り入れている。

個々の学生の学修成果は、各学習・教育到達目標に対する達成度表およびルーブリック評価法による評価を行っている。また、卒業生や実務者からなる外部点検委員による点検とアンケート実施により学修内容の妥当性について総合的に評価する。

学習内容・水準については、国際的な工学教育認証団体である JABEE による認証を受けている。

材料科学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

1年次では、外国語や人文社会系科目を含む教養系科目、工学全体を俯瞰するための工学部共通科目、及び化学材料分野別科目を学ぶ。そのために、大学学習法(工学リテラシー入門)におけるアクティブラーニングを通じた、主体的に学修する学生への転換教育、総合工学概論や総合技術科学演習による複数分野の基礎知識・基礎技能を獲得させる基礎教育、技術者や研究者の心がまえに関する倫理教育、及び専門分野を学ぶ上での基礎となる数物化系・社会科学系・情報リテラシーに関する科目を学修する。

1年次後半から2年次に専門基礎科目を履修することにより、材料科学に関連する数学、物理学、化学及び材料学に関する知識と応用力を身につける。

2年次からの物理・電気系及び化学・機械系の専門応用科目を履修することにより、先端的な内容を含む材料科学の応用分野を学修する。

3年次に、材料科学実験 及び 並びに材料科学PBLを履修することにより、未知なる課題に対して、解決のための調査と実験方法の立案、実験の実施、実験結果の解析及び課題解決のための報告書作成ができる能力を身に付ける。

4年次に卒業研修及び卒業研究を履修することにより、材料科学に関する課題を解決できる能力を修得する。さらに国際工学概論や海外研修などを履修することによりグローバルなエンジニアリング・デザイン能力を培う。

各学生の学修成果は、半年ごとに各学生が作成するNBASのアセスメントシートによって、プログラムの到達目標および個人の長期目標に対する到達度合いとして学生本人および教員が認識できるようにする。最終的には、工学部規程および同細則に記載されている材料科学プログラムの第4年次進級基準および卒業資格基準に照らし合わせて評価する。

建築学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法

本プログラムの学習・教育目標を確実に達成するため、低学年においては主に基礎的科目を設定し、学年次の進行と共に専門性の高い科目を多く配置するようにしている。また、2年次に専門科目の基礎を学ぶことから、3年次にはそれらに対応する実験・演習科目を配置し、理解の深化を図っている。各学年の具体的なプログラム内容は以下のとおりである。

・1年次

基礎的な専門科目(建築学概論, 建築図学, 建築材料・構造概論など)や数学・力学・情

報処理などの教養系科目の他に、語学や人文科学・社会科学等を含む教養系科目を主に学ぶ。

•2年次

2年次からは、より専門性の高い科目が設定されている。2年次には、建築学の主要分野である建築設計製図、建築構造解析学、建築材料、建築計画学、建築環境工学、都市計画などに関する科目が開講されており、これらの科目を通して専門分野の基礎知識を修得する。また、建築設計製図では、基本計画と基本設計に関する実習課題に取り組み、建築の計画・設計の進め方と、設計主旨を明確にする方法、および発表・説明等の能力の修得に努める。

•3年次

上述の主要分野に対応した実験・演習科目のほとんどが3年次に開講されている。これらの実験・演習科目を通し、それまでに学んだ学問分野をより深く理解すると共に、実験と計測の技術を身に付け、得られた結果を分析・考察する能力を養う。また、2年次に引き続き、建築設計製図や建築計画演習、都市計画・デザイン演習などの実習科目も開講されており、より具体的な建築や都市に関する設計と計画の手法と知識を実践的に修得する。

•4年次

卒業研究と卒業設計を通して、専門的な問題を理解・整理し、調査や分析、実験などに基づき解決するための能力、建築を総合的にデザインする能力を身に付ける。また、他者の意見を正しく理解した上で、自分の考えを正しく伝えるプレゼンテーション能力を養う。建築的創造は、確固とした倫理観の下でなされる。そのため、技術者倫理について考え、その意義と重要性とを学ぶ。

○学習成果の評価

個々の授業科目の学修成果は、試験、レポート、設計図面、建築模型などを評価対象として各科目のシラバスに定める方法に基づき評価を行う。また、4年次の卒業研究と卒業設計に対しては学位論文、設計図面、建築模型などの提出物、および各発表会における口頭発表などを評価対象としてシラバスに定める方法により評価を行う。

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

1年次では外国語や人文・社会系科目を含む教養系科目を幅広く学ぶ。同時にものづくりに関連するPBL科目である大学学習法（工学リテラシー入門）を受講する。さらに、理系科目の学習に備えて数学・物理の基礎を学び、キャリアデザイン・インターンシップで企業や福祉施設で実務を体験する。専門応用科目の導入科目である人間支援感性科学概論、芸術コミュニケーション概論では、学際領域の重要性と先端科学技術の社会との関わりについて学習する。

2年次以降では、専門基礎科目の履修により、人間支援感性科学に関連する基礎知識を身につける。全員必修のソフトウェア科学共通コア科目群の履修により、ソフトウェアの基礎知識とプログラミング能力を修得する。同時に、3つの専門コア科目群（人間支援医工学コア科目群、健康スポーツ科学コア科目群、芸術系コア科目群）から選択履修することにより、ソフトウェア技術を各分野に活用するための基礎知識および課題発見・問題解決のための応用力を修得する。

3年次以降は、卒業研修・卒業研究の履修により、人間支援感性科学に関する科学的な思考能力および問題解決能力を身につける。

○学修方法

専門分野に偏らず、幅広い知識が身につくようにバランスの良い履修計画を立て、それぞれの科目にまつわる課題を発見、問題を解決するべく取り組む。特に、レポート課題を通じて、基本的な論理的思考力や分析力、発信力を修練し、卒業研修・卒業研究によって工学者、技術者、研究者として必要な知識・技能を学ぶ。

○評価方法

1. GPA を用いた数値的分析（GPA の年次変化や分布から基礎学力，応用専門知識の学修度を評価する）
2. 実験レポートによる評価（課題発見，問題解決能力の習得具合を総合評価する）
3. 卒業研究・論文，作品等による評価（科学的思考力，研究開発力等を総合評価する）

協創経営プログラム

○カリキュラム編成，学修内容・方法と学修成果の評価方法

本プログラムでは，入学から卒業までの系統的な実践型インターンシップ（学外）を中心に据えて履修の流れを設計する。さらに学習効果を確実にするため，具体的には以下の基本構成とする。

- ・1 年次では工学部学生として工学全体を俯瞰し，専門を学ぶことに対する目的意識の確立を行うために，工学部及び分野別導入科目を修得する。
- ・2 年次以降では，産業や社会に潜む多様な問題の発見とその解決を実践型プロジェクト学習を通して可能とするために，各自の問題意識に基づいた選択科目を修得する。
- ・選択科目は特定の工学分野を軸にして他の関連分野を自主的に修得し，加えて経営系の必修基礎科目を修得する。
- ・卒業年次には長期の実践型チームインターンシップを実施し，それまでに各人が履修し培ってきた基礎知識を応用し，同時にチームを統合しながら多用な課題に対する解決策を見出し，チームとしてそれをまとめ上げ，解決に導く能力を修得する。

以上の学修成果は，講義科目にあっては最終試験の成績，授業内ワークシート及び最終レポートによって各科目の目標到達度を評価する。インターンシップを含む双方向型または PBL 型科目では，自主性とリーダーシップを持ってチームとして具体的な課題解決策を立案できたのか，その過程と結果をプレゼンテーション，成果報告書，ならびにインターンシップ受入企業による個別評価に基づいて評価する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/engineering/threepolicies-f/>

（概要）

（1）入学者に求める学力

学力の3要素である「基礎的・基本的な知識・技能」，「思考力・判断力・表現力など」，「主体性・多様性・協働性」の3つを高校までに修得し，さらに入学後にこれらの学力を主体的に伸ばすための能力を持った学生を求めている。具体的には，工学の基礎から先端技術に関する専門知識の習得，及び多様な知識の習得を目指す意欲と行動力を持った人の入学を希望する。そのためには，高校で基本的な知識を身に着けるとともに，思考力・判断力を養い，主体的かつ周囲と協調できる姿勢を身に着けていることが望まれる。

（2）入学者選抜方法

一般選抜（前期日程）では，基礎的な知識の評価を重点的に行い，高等学校卒業レベルの基礎学力を有するとともに，専門分野に関連する科目への高い理解力・応用力を持つ学生を選抜する。大学入学共通テストにおいては，5教科7科目の試験を課し，高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。個別学力検査においては，数学，理科，英語を課し，工学分野を学ぶ上で特に重要な科目への理解力と応用力を評価する。これらと調査書の内容を総合して評価する。

一般選抜（後期日程）では，基礎的な知識及び主体的な学習意欲の評価を重点的に行い，高等学校卒業レベルの基礎学力を有するとともに，勉学意欲と工学分野への高い関心を持つ学生を選抜する。大学入学共通テストにおいては，5教科7科目の試験を課し，高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。個別学力検査においては，面接を行い，主体的に工学分野を学ぶ意欲と能力を評価する。これらと調査書の内容を総合して評価する。

総合型選抜では、大学における勉学に必要な基礎学力、思考力、勉学意欲、明確な志望動機及び高等学校等内外での活動に係る主体性と表現力等を持ち、本プログラムの工学分野に関する基礎から先端技術にわたる専門的知識及び多様な知識の習得を目指す意欲と行動力を持った学生や、社会の諸問題に対して興味・関心を持ち、工学分野の専門的知識を駆使してそれらの問題の解決策を考える意欲と行動力を有する学生を選抜する。出願書類（活動報告書に基づいた自己推薦書）においては、勉学意欲・関心、志望動機、主体性等を評価する。小論文においては、思考力、表現力、工学分野に関する知識等を評価する。面接（自己推薦書の内容に基づいたプレゼンテーション及び口頭試問を含む）においては、思考力、表現力、勉学意欲、志望動機、主体性、大学における勉学に必要な基礎学力を評価する。

学校推薦型選抜 では、高等学校で学んだ専門分野の基礎知識（該当する出願要件で出願する志願者に限る）、大学における勉学に必要な基礎学力、思考力、勉学意欲、明確な志望動機及び主体性を持ち、本プログラムの工学分野への高い関心を有する学生を選抜する。面接（口頭試問を含む）においては、基礎学力、勉学意欲、志望動機及び専門への関心の高さや適正を評価する。出願書類（推薦書、調査書、活動報告書等）においては、学業成績や主体性等を評価する。

学校推薦型選抜 では、大学における勉学に必要な基礎学力、思考力、勉学意欲、明確な志望動機及び主体性を持ち、本プログラムの工学分野への高い関心を有する学生を選抜する。面接においては、勉学意欲、志望動機及び専門への関心の高さや適正を評価する。大学入学共通テストにおいては、3教科3科目の試験を課し、大学における勉学に必要な基礎学力を評価する。出願書類（推薦書、調査書）においては、学業成績や主体性等を評価する。

学部等名 農学部

教育研究上の目的（公表方法：新潟大学農学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110000544.htm

（概要）

新潟大学農学部規程（抜粋）

（本学部の教育研究の目的）

第1条の2 本学部は、生命(いのち)の尊さを基本に、農業及びバイオ・食品関連産業の発展、持続的な食料生産と環境保全を目指し、幅広い基礎学力と応用力を育む教育と研究を行う。それにより、地域や社会が抱える諸問題を多角的視点から総合的に理解し、具体的な解決策を提言できる構想力、リーダーシップと高い倫理観を併せ持ち、我が国のみならず、広く世界で活躍できる人材を育成することを目的とする。

卒業の認定に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/agriculture/threepolicies-f/>

（概要）

応用生命科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

生命現象とその応用に関する高度な専門知識と実験技術を幅広く修得し、人口、食料、環境、エネルギーなどに関わる専門的課題の解決を図っていく能力を備え、化学（医薬品、化粧品、化成品等）・食品・環境・農業・エネルギー等のバイオ関連分野の研究、技術開発、教育等で活躍できる人材を養成する。

本学の当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得したもので、下記の能力を有すると認められる者に、学士（農学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

●社会人として必要な自然科学及び社会科学的な教養と幅広い知識，倫理観を理解できる
●農学分野 に共通する専門基礎知識および応用生命科学分野 に共通する専門基礎知識を理解し，説明できる

(2) 当該分野固有の能力

●微生物・植物・動物の生命現象を分子や細胞レベルで理解し，これらを解明するために必要な，化学的および生物学的実験スキル・分析技術を身につけ，関連する実験・解析を的確に行うことができる
●応用生命科学の基礎知識及び理論，実験技術に基づき応用生命科学分野 の課題を実験科学的に探求し，実験結果をまとめ，考察するとともに，課題を解決することができる

(3) 汎用的能力

●多様な学習を通して他者と豊かに交流ができ，多面的な視点から物事理解を深め，これらについて発表・情報発信・討論することができる
●自然科学や社会科学の基礎理論 を広く学び，科学的な思考法を身につけることで様々な事象を論理的に考えることができる
●ローカルな視点とグローバルな視点を併せ持ち，状況に応じて適切な思考を行い，判断を下すことができる

(4) 態度・姿勢

●常に広い分野 に関心を持ち，新しい知識や技術を積極的に学び続けることができる
●自ら社会における課題を見出し，その解決に向けて意欲を持って取り組むことができる

食品科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本学の理念「自律と創生」に基づき，特に食品の分野における地域や世界の課題に対して的確に対応し課題解決するために，食品関連企業，研究・教育機関，行政のような産官学それぞれの立場において，研究，技術・商品開発，品質管理，教育，食品行政等に携わる広範に活躍できる有能な人材を育成する。

本学に当該プログラムの修業年限以上在学し，所定の授業科目及び 124 単位以上を習得したもので上記の能力を有すると認められるものに学士(農学)の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

●社会人として必要な自然科学及び社会科学的な教養と幅広い知識を身につける。
●新潟やその周辺の地域特異的な諸問題に目を向けるとともに，代表的産業である農業 食料関連産業などについて理解する。
●農学分野 に共通する専門基礎知識を身につける。
●食品科学分野 に共通する専門基礎知識を身につける。

(2) 当該分野固有の能力

●食品の原材料に関する専門知識を発展的課題へ応用できる。
●食品の機能に関する専門知識を発展的課題へ応用できる。
●食品の加工に関する専門知識を発展的課題へ応用できる。
●食品の品質管理・流通に関する専門知識を発展的課題へ応用できる。
●食品科学分野 に関連する専門知識を発展的課題へ応用できる。
●食品科学の基礎知識及び理論，実験技術に基づき食品科学分野 の課題を実験科学的に探求し，実験結果をまとめ，考察できるとともに，問題を解決することができる。

(3) 汎用的能力

- 多様な学習を通して他者と豊かに交流ができ、他者との議論を通して多面的な視点から物事の理解を深めることができる。
- 自然科学や社会科学の基礎理論を広く学び、科学的な思考法を身につけることで様々な事象を論理的に考えることができる。
- 自身の学習成果を他者に分かるように説明でき、的確に質疑応答ができる。
- 種々のライブラリー、データベースから収集した情報や実験・調査で得られたデータを的確に整理・解析し、レポートなどにまとめることができる。
- 語学学習を通じて視野を海外に広げ国際的に活躍できる。

(4) 態度・姿勢

- 常に広い分野に関心を持ち、新しい知識や技術を積極的に学び続ける意欲を持つ。
- 様々な学習の場において自ら課題を見出し、その解決に向けて意欲を持って取り組むことができる。
- 実験、実習、課題学習などにおいて他者と切磋琢磨することにより、社会生活に必要な人間関係、協調性、規則などを大事にできる。

生物資源科学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

本プログラムは、バイオテクノロジーを駆使した動植物による農業生産と持続可能な社会システムについての幅広い技術・知識の修得および問題意識の醸成に加え、生命への尊厳を通して、農業関連の企業、食品・流通等の業界および農業関係の官公庁・団体・試験研究機関で国際的な視野をもって活躍できる高度専門職業人・技術者・研究者等の人材の育成を目指している。最終的には自ら学び、考え、そして自ら行動できる人材を育て、未知の課題に取り組む姿勢を涵養する。

当該プログラムの修業年限以上本学に在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（農学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 農学に関する広い学問領域の一般的基礎知識を修得し、高い倫理をもちバランスある人格形成に寄与できる。
- 農業を基盤とした経済活動の基本的知識を修得し、地球的視点からの農業の発展課題について理解できる。
- 栽培植物のバイオテクノロジーや生育特性及び基本的な栽培管理法を理解し、地域農業の成立条件と関連させて説明することができる。
- 資源動物の生理・形態機能の特徴を理解し、効率的な動物生産と動物管理の仕組みについて説明できる。
- 大学で学ぶにあたって必要な基本的能力を修得できる。

(2) 当該分野固有の能力

- 資源動植物の生産管理から流通・加工・消費に至る一連の過程を総合的に分析することができる。
- 動植物生産、地域、環境に関する課題を国際的視点から把握し、問題解決に向けた能力を身に付けることができる。
- 食料・農業・環境問題への関心を深め、各自の問題意識に沿った情報収集および分析の能力を修得できる。
- 資源植物または資源動物の遺伝、生殖、管理、生理・形態学的特性を理解し体系的に修得した知識から、先端的技術を活用した効率的な農業生産を論じることができる。
- 当該プログラムの必修科目を履修することにより生物資源科学プログラムに共通する科目の理解と実践力を高めた上で、各専門分野固有の能力を深化させることができる。

(3) 汎用的能力

英語を活用して会話や文章で日常的なコミュニケーションを図ることができる。

- 自分の考えを図表などを用いて効果的に示せるとともに、他者と論理的に議論できる。
- 目標の実現や課題解決に向けて、合理的かつ具体的方策を企画立案し遂行することができる。
- 多様な情報源を用いて情報を正確に収集できるとともに、得られた情報を正確に分析することができる。
- 自分の考えを正確かつ論理的に文章で表現できる。
- 体系的に修得した知識を基盤として、多様な事象に対して応用して思考することができる。
- 自分の考えを正確に他者に伝えることができるとともに、他者の考えを受容して、相互の考えを共有することができる。

(4) 態度・姿勢

- 社会に対して関心をもち、新しい知識・技術を身に付ける意欲を持つことができる。
- 他者と協力・議論をし、共通の課題解決に取り組むことができる。
- 課題の解決に向けて、自分自身で解決策を見だし、それを実行することができる。
- 目標の実現や課題の解決に向けた行動を粘り強く継続して行うことができる。
- 動植物の管理や研究室活動を通じて、規則正しい生活習慣を身につけ、社会人としての基礎的な資質を身につけることができる。

流域環境学プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

地域の自然環境と調和した持続的な農林業の発展に貢献することを目的とし、持続的な森林管理と生態系保全、食料生産基盤の整備、情報ネットワークの活用に関する幅広い専門知識を習得し、科学的思考力と技術的応用力を身につけ、関係者と協働できる高い問題解決能力を備えた農学系人材を育成する。本学の当該プログラムの修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得したもので、下記の能力を有すると認められる者に、学士（農学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

(1) 知識・理解

- 自然科学及び社会科学に関する教養と幅広く豊かな基礎知識を身につける
- 流域環境学に関する基礎知識を身につけ、生態系サービスや流域管理など流域が有する公益的機能に関する知識と理解を得る

(2) 当該分野固有の能力

- 水と土の保全・管理や農業施設・機械の設計管理、農業生産物の品質管理、農村計画に関する知識・技術を身につける
- 持続的な森林資源の管理・保全のための地理空間情報や持続的森林管理、生態系管理に関する知識・技術を身につける

(3) 汎用的能力

- 習得した専門知識および周辺領域の知識を土台に、自らの考えを客観的かつ論理的に説明できる

(4) 態度・姿勢

- 社会の一員として他者との協力を通して自律的かつ持続的な問題解決に取り組むことができる
- 流域環境学分野の技術者として、信頼できる倫理観と継続的に学び続けることができる

フィールド科学人材育成プログラム

○人材育成目標（卒業生が身につけるべき資質・能力）

現代社会においては、生態系・環境の保全や極端気象・激甚災害への対策が喫緊の課題となっている。これらの課題の解決には、環境動態学、生態学、災害・防災科学分野における専門的知識、実践的スキル、さらにはそれらを駆使して新しい科学的知見・課題解決策を導ける能力が求められる。本プログラムでは、こうした社会の要請に応えるため、理学と農学分野の融合したフィールド科学分野における創造的な科学的知見・問題解決策を導く能力をもち、フィールド科学系の最先端研究、環境・建設コンサルタント、地理・気象情報サービス、林業、水産業などの多方面において貢献できる理系人材を養成する。

本プログラムに修業年限以上在学し、所定の授業科目及び124単位以上を修得した者で、下記の能力を有すると認められる者に、学士（農学）の学位を授与する。

○プログラムの到達目標（目標としての学修成果）

（1）知識・理解

- ◆幅広く、豊かな教養をもち。
- ◆自然科学の複数分野の基礎を理解する。
- ◆フィールド科学の学修に有用な基盤的内容について理解する。
- ◆フィールド科学分野の基礎的内容について理解でき、説明できる。
- ◆陸上動植物、森林生態系、水圏生態系の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。
- ◆気圏、水圏、地圏の動態や自然現象の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。
- ◆災害現象や防災の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。
- ◆関連分野の基本的な知識を修得し、論理的に思考することができる。
- ◆グローバル世界における経済、社会、文化について理解を深める。

（2）当該分野固有の能力

- ◆基礎的な実習方法を理解し、作業を正確に行える。
- ◆データを解析し、その結果に基づいて科学的な解釈を導ける。
- ◆フィールド科学分野の実習を通して、野外調査に不可欠な危機管理能力を身につける。
- ◆演習・実習科目を通して、現場での解決能力、また、フィールドを対象とした調査・解析・観測を遂行できる実践力を身につける。
- ◆フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導くことができる。
- ◆フィールド科学分野の技術者として、信頼できる倫理観をもち。
- ◆研究テーマの背景や位置付けを理解した上で当該分野の課題を見出すことができる。

（3）汎用的能力

- 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力をもち。
- ◆農学の素養と専門的スキルを基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。
 - ◆課題解決を導く上で専門的知識と専門的スキルを適切かつ正確に活用できる。

（4）態度・姿勢

- 学問分野区分に制約されることなく、広い視野に立って科学的に物事を理解する姿勢を持つ。
- ◆知識を得るだけでなく、実際にさまざまな課題を体験し、理解する姿勢を持つ。
 - ◆グループの課題やゼミ、グループ運営などに取り組む中で、積極性と協調性を持つ。
 - ◆プレゼンテーション能力を身につけ、自分の考えについて他人と議論することができる。
 - ◆主体的かつ根気強く研究活動に取り組むことができる。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/agriculture/threepolicies-f/>

（概要）

応用生命科学プログラム

○カリキュラム編成，学修内容・方法と学修成果の評価方法

微生物，植物，動物に関する科目など教育内容が多岐にわたっているため，一分野に留まらず広い学習を行うことを基本とする。また，研究者及び技術者として必要な各種実験技術を修得させる。本プログラムは4年制で，1年次から2年次1学期，2年次2学期から3年次1学期，3年次2学期から4年次と，学習内容から3期に分けられる。

1年次に大学学習法等により主体的な学習態度を身につけ，また，一般教育科目を通じて自然科学及び社会科学的な教養と幅広い知識，倫理観を，農学部共通基礎科目を通じて農学分野に共通する専門基礎知識を2年次1学期までに身につける。その上で2年次2学期に本プログラムに所属した学生は，3年次1学期にかけて，専門基礎科目の履修により応用生命科学分野における基礎学力を築いたのち，多様な専門科目を履修する。さらに，分析化学実験，微生物学実験，生物化学実験，生物学実験，有機化学実験の基礎実験科目を必修科目として順次履修することにより，社会から期待されるスキルを獲得する。さらに，3年次2学期に研究室へ分属後，応用生命科学実験，応用生命科学演習，科学英語演習，卒業論文などの実験・演習科目を必修科目として順次履修しながら，卒業論文研究を行う。4年次には，卒業論文研究を通じて，応用生命科学分野の課題を実験科学的に探求し，結果の分析・考察を行って課題の解決をはかるとともに，卒業論文を完成させ，得られた成果の発表を行うことで，問題解決能力やコミュニケーション能力等を養う。

○学修成果の評価

専門知識および実験技術の修得については，専門科目（必修科目および選択必修科目）のテストあるいはレポートにより直接評価を行う。また，卒業論文研究については，応用生命科学演習（ゼミナール）を直接評価することに加えて，卒業論文の査読を行い，パフォーマンス評価を実施する。これらの複数項目について評価を行い，卒業生の質を担保する。

食品科学プログラム

○カリキュラム編成，学修内容・方法と学修成果の評価方法

現代の食の課題は，農林畜産物等の生産から機能性，安全性，マーケティングまで多岐に亘っている。このため本プログラムでは，幅広い分野の学習を通じ，研究者及び技術者として必要な高度な専門知識や技術を修得させる4年間の教育課程を編成している。科目群は，「教養教育科目」「農学部共通基礎科目」「専門基礎科目」「専門科目」「就業力育成科目」「グローバル科目」「卒業論文」「教職・基礎科目」から構成される。

1年次～2年次1学期まで学部共通基礎科目，大学学習法，教養教育科目を通じて，基礎学力，転換教育，教養の醸成を行う。2年次1学期終了後にプログラム所属を行い，本プログラムの専門課程の学修に入る。本プログラムに所属した学生は，最初に専門基礎科目を履修し，学年進行に伴って多様な専門科目を履修するカリキュラムになっている。本プログラムでは，特に実社会で役立つ技術の修得を重視しており，分析化学実験（農），微生物学実験，生物化学実験，生物学実験，有機化学実験（農），食コミュニケーション演習，食品科学演習，調理実習，食品科学プログラム実地見学，学科インターンシップ，卒業論文等，基礎から応用まで多くの実験・実習・演習科目を履修することにより，社会から期待されるスキルを獲得する。

学習成果は，取得単位及び卒業論文・卒業論文発表を直接評価することにより総合的な学修状況を把握して卒業資格判定を行うことにより，卒業生の質を担保する。

○カリキュラム編成，学修内容・方法と学修成果の評価方法

本プログラムは4年制であり，人材育成目標とプログラムの到達目標を達成するために，3期に分けて段階的に学修する教育課程を編成している。授業科目は「教養」「語学」「大学

学習法」「農学部共通基礎科目」「専門基礎科目」「専門科目」「就業力育成科目」「グローバル科目」「卒業論文」の9つの科目群から構成される。

1期の1年次と2年次前半においては、まず1年次に学部共通基礎科目、大学学習法、教養教育科目、語学を通じて、基礎学力、転換教育、教養の醸成を行い、続いて2年次の前半では、学部共通基礎科目、教養教育科目を通じて学部に通じた基礎的知識を得るとともに、フィールド科学分野の体験学習を行い、農学部の学生としての基礎的な素養を修得する。2期は、2年次の後半から3年次までが該当するが、まず2年次後半では、専門科目・専門基礎科目により、動植物の生産から流通・消費に至る生物資源科学の専門の基礎的知識と分析能力を高め、加えて基礎実験や演習科目を設定することにより、基本的な専門知識から実践力に高める訓練を行う。そのためには必修科目を設定して、生物資源科学についてバランスのとれた学修を促進する。3年次には、専門科目を中心に植物・動物・経済の各分野の基礎から応用までのより一層の高度展開を図り、実践的な应用能力を養い、なおかつ、講義と実験・演習を効果的に連携させる。

2期においては学生の興味、関心に合わせた研究室配属による専門教育の強化を図る。最後の3期にあたる4年次では大学院教育との連携を意識しながら、4年間の学習の集大成となる卒業論文を必修科目として科す。通じて、専門的な総合的能力を養うとともに、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等を養う。また、1期から3期まで一貫して就業力育成科目とグローバル科目を提供して、それぞれの学年に応じた就業力と国際化対応の実践能力を高める。3年目までのGPAによる評価、卒業研究への取り組みを踏まえつつ、集大成科目である卒業論文とその発表の内容で、専門性や汎用的能力まで含めて総合評価する。

流域環境学プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

流域環境学プログラムは4年制で、第1学年から第2学年前期、第2学年後期から第3学年後期、第4学年と、学習内容から大きく3期に分けられる。授業科目の多くは必修、選択必修で、「教養」「語学」「学習法・研究法」「専門基礎科目」「専門科目」「実験・実習・演習」の科目群から構成される。

1期では農学部基礎科目や主題科目により農学についての知識を修得するとともに、農林業の生産現場における課題を探究する。また、自然科学ならびに社会科学のさまざまな科目を通して幅広い分野の素養を修得する。

2期は本プログラムへの分属後であり、専門基礎科目の履修により流域環境学分野における基礎学力を築いたのち、多様な専門科目を履修する。さらに、測量学実習、育林系演習及び実習、持続可能な森林経営演習、GIS・リモートセンシング演習、水土環境工学実験・演習、生物生産工学実験・演習、エンジニアリング・デザイン演習、科学英語演習などの基礎から応用までの実験・演習科目を順次履修することにより、社会から期待されるスキルを獲得する。

さらに、3期に流域環境学演習、卒業論文の履修を通じて、流域環境学分野の課題を探究し、結果の分析・考察を行って課題の解決をはかるとともに、得られた成果の発表を行うことで、問題解決能力やコミュニケーション能力等を養う。

学修成果の評価方法

専門知識および実験・解析技術の修得については、専門科目（必修科目および選択必修科目）のテストあるいはレポートにより評価する。卒業論文は、主査・副査による査読を行い、直接評価を行う。また、流域環境学演習についても直接評価を行う。これらの複数項目について評価を行い、卒業生の質を担保する。

フィールド科学人材育成プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

フィールド科学人材育成プログラムでは、野外調査や観測の様々な場面で必要とされる科学的知識と技術を併せ持ち、国際的にも通用する即戦的で豊かな課題探究能力と課題解

決能力を備えた理系人材を育成することを教育目標として、農学部・理学部の両学部で開講されるフィールド科学分野の講義・実習を、農学部・理学部の学生がともに履修する教育システムを設定している。本プログラムは4年制で、第1学年から第2学年1学期、第2学年2学期から第3学年、および第4学年と、学習内容から大きく3期に分けられる。本プログラムに所属される学生は、第2学年1学期までは農学部、理学部それぞれの学部における共通科目を履修、第2学年2学期以降は、本プログラムの共通の専門科目を学修、第4学年からは主に卒業論文の研究に取り組む。

第1期は「主体的な学習への転換、及び教養と自然科学全般の基礎知識の修得」を重視する。

・大学学習法により学習態度の転換を図る。

・教養教育科目自然系共通専門基礎科目では、幅広い分野の素養を修得する。

・農学部基礎科目や主題科目では農学についての知識を修得するとともに、農林業の生産現場における課題を探究する。

第2期は、「フィールド科学分野の専門的知識の修得及び専門的技術の養成」を重視する。

・主専攻の必修専門科目では、フィールドワーカーのためのリスクマネジメント実習やフィールド安全論を通して野外調査に必要なリスクマネジメント能力を修得する。

・主専攻の専門基礎科目（野生植物生態学、樹木学、野生動物生態学、流域環境IS、生態学、環境砂防学、地形学、系統分類学、環境分析化学）では、フィールド科学分野の基礎知識を修得する。

・主専攻の専門講義科目（水圏生態学、海洋化学、環境物理学、寒冷地形学、森林環境論、流域環境GIS、雪氷防災学、里地里山再生学など）および専門科目の実習・演習科目（野生動物植物生態学実習、GIS・リモートセンシング演習、防災系演習及び実習、海洋フィールド生物学実習、気象解析実習、地形フィールド実習、災害・復興科学演習及び実習など）では、多様なフィールド調査で必要となる高度な専門知識と技術を修得する。

第3期は、4年次での卒業論文を通して「フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導く能力の育成」を重視する。

なお、本プログラムで重要視する学習目標である「フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導く能力」やそれに関連する諸能力の達成度は、第3期を通して行う卒業研究において、ルーブリックを用いて直接評価を行う。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/agriculture/threepolicies-f/>

（概要）

（1）入学者に求める学力

新潟大学農学部は、生命（いのち）の尊さを基本に、農業およびバイオ・食品関連産業の発展、持続的な食料生産と環境保全を目指し、幅広い基礎学力と応用力を育む教育を行っている。それにより、地域や社会が抱える諸問題を多角的視点から総合的に理解し、具体的な解決策を提言できる構想力、リーダーシップと高い倫理観をあわせ持ち、我が国のみならず、広く世界で活躍できる人材を養成している。

そのため、次のような学力を有した学生を求めている。

- ・高等学校教育課程の基礎学力を十分身に付けている人。
- ・農学の基礎となる理数科目に優れた学力を有する人。
- ・専門分野に強い興味を持ち、主体的に継続して学ぶことのできる人。
- ・専門分野の事象を論理的に思考することができ、他者に説明し共有できる人。

（2）入学者選抜方法

一般選抜（前期及び後期）、学校推薦型選抜、帰国子女特別入試、第3年次編入学試験の入学者選抜方法により選抜する。

・一般選抜前期：大学入学共通テストでは、5教科7科目を課し、専門の基礎知識を修得するのに必要な基礎学力を評価する。個別学力試験では、外国語、理数科目（数学、化学、

生物，物理，地学から2科目)を課し，高度な専門知識と技術を修得するのに必要な応用力を評価する。

・一般選抜後期：大学入学共通テストでは，5教科7科目を課し，専門の基礎知識を修得するのに必要な基礎学力を評価する。さらに，個別学力試験では面接を課し，専門分野を主体的に学ぶ意欲ならびにコミュニケーション能力等を評価する。

・学校推薦型選抜：小論文と面接を課し，論理的な思考能力と表現の能力，専門分野における諸問題に対する理解力，主体的に学ぶ意欲ならびにコミュニケーション能力等を評価する。特に小論文では論理的な思考能力と表現の能力を，面接ではそれらに加えて，主体的に学ぶ意欲ならびにコミュニケーション能力を重視する。さらに出願書類で専門分野の知識と技術を修得するのに必要な学力を評価する。

・帰国子女選抜：小論文を課し，論理的な思考能力と表現の能力，専門分野における諸問題に対する理解力を評価する。口述試験（日本語による）では，専門知識と技術を修得するのに必要な基礎学力と応用力，主体的に学ぶ意欲ならびにコミュニケーション能力等を評価する。

・第3年次編入学試験：

○応用生命科学プログラム：

TOEIC L&R もしくは TOEFL の成績により，国際的なコミュニケーション能力を評価する。口述試験を課し，応用生命科学分野および本分野に関連した社会の諸問題への関心，基礎学力，論理的思考力，コミュニケーション能力を総合的に評価する。特に，応用生命科学分野および本分野に関連した社会の諸問題への関心，化学および生物の基礎的事項を修得しているかを問う。

○生命資源科学プログラム：

TOEIC L&R もしくは TOEFL の成績により，国際的なコミュニケーション能力を評価する。さらに小論文と面接を課し，論理的な思考能力と表現の能力，専門分野における諸問題に対する理解力，主体的に学ぶ意欲等を評価する。

○流域環境学プログラム

TOEIC L&R もしくは TOEFL の成績により，国際的なコミュニケーション能力を評価する。さらに小論文と面接を課し，論理的な思考能力と表現の能力，専門分野における諸問題に対する理解力，主体的に学ぶ意欲等を評価する。

○フィールド科学人材育成プログラム

TOEIC L&R もしくは TOEFL の成績により，国際的なコミュニケーション能力を評価する。さらに小論文と面接を課し，論理的な思考能力と表現の能力，専門分野における諸問題に対する理解力，主体的に学ぶ意欲等を評価する。

学部等名 創生学部

教育研究上の目的（公表方法：新潟大学創生学部規程を新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

https://education.joureikun.jp/niiigata_univ/act/frame/frame110000592.htm

（概要）

新潟大学創生学部規程（抜粋）

（本学部の教育研究の目的）

第2条 本学部は，社会における多様な課題に関する研究を基盤として，論理的思考と科学的根拠に基づいた課題解決能力を身につけ，生涯学び続ける姿勢を持ち，他者と協働して複雑化する社会を生き抜く人材を養成することを目的とする。

卒業の認定に関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niiigata-u.ac.jp/academics/faculty/creation/threepolicies-f/>

(概要)

創生学修プログラム

○人材育成目標(卒業生が身につけるべき資質・能力)

本プログラムでは、多面的で複雑化した社会における課題を抽出し、その解決に必要な知識を獲得でき、分野の異なる他者と協働して、論理的思考と科学的根拠に基づいた課題解決ができる人材の育成を目指している。

すなわち、この課題解決過程により自己の人材価値を生涯にわたって能動的に高めていくことができる人材、「自己創造型学修者」の育成を目標とする。

所定の授業科目を履修し、126 単位以上を修得した者で、人材育成目標に対応して養成する以下の能力を修得した者に、学士(学術)の学位を授与する。

- 課題を発見し、その解決に向けて主体的に学修する態度・姿勢

- 課題解決に必要な分析力 論理的思考力

- 他者と協働できる自己表現力を有し、問題解決をコーディネートする能力

- 専門領域の知識を有するとともに、多面的な視点から複数分野の知識を選択的に統合し、課題解決の場をデザインする能力

○プログラムの到達目標(目標としての学修成果)

本プログラムが設定するディプロマ・ポリシーに対応して、学士課程全体を通じて学生が自ら到達目標を設定し学修を進めることを原則とする。

設定される到達目標は学生によって異なるが、ディプロマ・ポリシーで示す「課題解決力」「協調性(コーディネート能力)」「汎用的能力」「態度・姿勢」は、目標設定における共通的な指針となる。

また、「領域学修科目(区分)」については、それぞれの領域学修科目パッケージを提供する主専攻プログラムが提示する目標を考慮して、選択した専門領域の学修に関する到達目標を設定する。

学生が1年次から到達目標を設定し、学修を進めるが、学修の進展に合わせて、担当教員からの助言のもとで到達目標の内容を改善する。

教育課程の編成及び実施に関する方針(公表方法:新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり))

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/creation/threepolicies-f/>

(概要)

創生学修プログラム

○カリキュラム編成、学修内容・方法と学修成果の評価方法

ディプロマ・ポリシーに示す能力を養成するために、本プログラムでは以下のカリキュラム立案の基本方針とそれに対応する授業科目区分を定めた教育課程を編成している。

- リテラシー(複数の領域の見地から物事を「見る力」異なる環境(状況)に「適応する力」、他者と協働するプロジェクト等を「コーディネートする力」)養成のための汎用的能力・課題解決力を涵養する授業科目を中核に据えている。

そのために、課題把握・分析・実践(統合)のための「リテラシーコア・課題解決実践科目(区分)」を設けている。

- 生涯にわたって学び続けることができる主体性とスキルを涵養するために学修に対する動機を高く維持する授業科目を初年次から配置している。

そのために、学修への動機づけと能動性を高める「導入・転換教育科目(区分)」を設けている。

- 多面的な視点から学問領域の知識を統合する上で、必要となる専門領域の知識・技能を修得するための領域別授業科目を2年次から4年次に配置している。

そのために、専門領域の知識・技能を修得するための「領域学修科目(区分)」を設けている。

- 学生の学士力を総括的に評価し、学修成果の質保証を厳格に行うための授業科目を、4年次に配置している。

そのために、学修成果と学位の質保証のための「学修成果総括科目(区分)」を設けてい

る。
当該区分の授業科目では、学生が NBAS アセスメントシート等をもとに、自らの学修成果を振り返り、確認する。

以上の授業科目（区分）を体系的に配置し、4年間を通じたゼミ・ラボワーク及び「リフレクションデザイン ～ 」を通じて、学生の主体的選択によって学修をデザインできるカリキュラムを編成している。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり））

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/faculty/creation/threepolicies-f/>

（概要）

○創生学修プログラム

（１） 入学者に求める学力

●課題探究・解決に関心を持ち、将来のキャリアを自ら見つけることに熱意のある人

●基礎的な学力のある人

●特定分野にとらわれず幅広い領域に興味関心のある人

●他者とのコミュニケーションを積極的に行い、自己表現できる人

（２） 入学者選抜方法

一般選抜（前期日程）

●大学入学共通テストを課して、知識・技能に関する基礎学力の高さを評価する。

●大学入学共通テストでは、5教科7科目を基本とし、理系型では理科2科目＋地歴公民1科目、文系型では理科1科目＋地歴公民2科目を課す。個別学力検査では、英語を必須科目として課し、国語と数学から1教科を選択科目として課す。

総合型選抜

●大学入学共通テストを課して、知識・技能に関する高等学校卒業レベルの基礎学力を評価する。大学入学共通テストでは、外国語と数Ⅰ・数Aを必須とし、理系科目選択型では数Ⅰ・数B及び理科から2科目、文系科目選択型では国語及び地歴公民から2科目を課す。

●講義に関する課題レポートと面接を課して、課題探究意欲、表現力、コミュニケーション能力を評価する。講義に関する課題レポートでは、思考力・判断力・表現力を評価する。面接では、出願書類に基づき主体性・多様性・協働性を評価する。

教育研究上の基本組織に関すること

公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URL は以下のとおり）

<https://www.niigata-u.ac.jp/academics/>

教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

a. 教員数（本務者）							
学部等の組織の名称	学長・副学長	教授	准教授	講師	助教	助手 その他	計
-	13人	-					13人
人文学部	-	16人	35人	0人	2人	1人	54人
教育学部	-	30人	41人	2人	0人	0人	73人
法学部	-	19人	13人	1人	4人	1人	38人
経済科学部	-	10人	24人	1人	2人	4人	41人
経済学部	-	4人	0人	0人	1人	0人	5人
理学部	-	37人	33人	1人	12人	0人	83人
医学部	-	22人	15人	1人	14人	0人	52人
工学部	-	45人	52人	0人	21人	0人	118人
農学部	-	21人	20人	0人	20人	0人	61人
創生学部	-	11人	7人	0人	2人	0人	20人
大学院	-	81人	89人	18人	145人	54人	387人
附属病院	-	25人	20人	52人	222人	3人	322人
附置研究所	-	13人	22人	1人	21人	17人	74人
その他	-	17人	42人	3人	27人	3人	92人
b. 教員数（兼務者）							
学長・副学長		学長・副学長以外の教員					計
0人		404人					404人
各教員の有する学位及び業績 （教員データベース等）		公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表（URLは以下のとおり） https://www.niigata-u.ac.jp/contribution/researchers/					
c. F D（ファカルティ・ディベロップメント）の状況（任意記載事項）							
経営戦略本部教育戦略統括室（F D・S D部門）が中心となり、全学F Dを改善しつつ、各主専攻プログラム等で実施されているF Dについて、教員の参加状態を可視化し、明示する等の取り組みを行っている。							

入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

a. 入学者の数、収容定員、在学する学生の数等								
学部等名	入学定員 (a)	入学者数 (b)	b/a	収容定員 (c)	在学生数 (d)	d/c	編入学 定員	編入学 者数
人文学部	210人	218人	103.8%	897人	978人	109.0%	6人	3人
教育学部	180人	192人	106.7%	840人	911人	108.5%	0人	0人
法学部	170人	178人	104.7%	720人	794人	110.3%	5人	2人
経済科学部	350人	352人	100.6%	350人	352人	100.6%	0人	0人
経済学部	0人	0人	-%	945人	1,043人	110.4%	15人	9人
理学部	200人	213人	106.5%	820人	906人	110.5%	10人	6人
医学部	282人	282人	100.0%	1,437人	1,466人	102.0%	25人	20人

歯学部	60人	59人	98.3%	352人	349人	99.1%	11人	3人
工学部	530人	543人	102.5%	2,160人	2,337人	108.2%	20人	44人
農学部	175人	179人	102.3%	720人	761人	105.7%	10人	7人
創生学部	65人	67人	103.1%	260人	275人	105.8%	0人	0人
合計	2,222人	2,283人	102.7%	9,501人	10,172人	107.1%	102人	94人
(備考)								

b. 卒業生数、進学者数、就職者数				
学部等名	卒業生数	進学者数	就職者数 (自営業を含む。)	その他
人文学部	248人 (100%)	13人 (5.2%)	219人 (88.3%)	16人 (6.5%)
教育学部	383人 (100%)	33人 (8.6%)	332人 (86.7%)	18人 (4.7%)
法学部	171人 (100%)	8人 (4.7%)	154人 (90.1%)	9人 (5.3%)
経済学部	303人 (100%)	3人 (1.0%)	286人 (94.4%)	14人 (4.6%)
理学部	187人 (100%)	94人 (50.3%)	85人 (45.5%)	8人 (4.3%)
医学部	312人 (100%)	23人 (7.4%)	146人 (46.8%)	143人 (45.8%)
歯学部	66人 (100%)	2人 (3.0%)	21人 (31.8%)	43人 (65.2%)
工学部	526人 (100%)	334人 (63.5%)	177人 (33.7%)	15人 (2.9%)
農学部	171人 (100%)	58人 (33.9%)	112人 (65.5%)	1人 (0.6%)
合計	2,367人 (100%)	568人 (24.0%)	1,532人 (64.7%)	267人 (11.3%)
(主な進学先・就職先)(任意記載事項)新潟大学ホームページにおいて公表(URLは以下のとおり) https://www.career-center.niigata-u.ac.jp/situation2.html				
(備考) 医学部医学科及び歯学部歯学科の「臨床研修医」は、「その他」に計上。				

c. 修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年者数、中途退学者数（任意記載事項）					
学部等名	入学者数	修業年限期間内 卒業者数	留年者数	中途退学者数	その他
人文学部	238人 (100%)	208人 (87.4%)	28人 (11.8%)	1人 (0.4%)	1人 (0.4%)
教育学部	393人 (100%)	361人 (91.9%)	27人 (6.9%)	4人 (1.0%)	1人 (0.3%)
法学部	193人 (100%)	154人 (79.8%)	27人 (14.0%)	11人 (5.7%)	1人 (0.5%)
経済学部	274人 (100%)	238人 (86.9%)	28人 (10.2%)	6人 (2.2%)	2人 (0.7%)
理学部	200人 (100%)	159人 (79.5%)	30人 (15.0%)	10人 (5.0%)	1人 (0.5%)
医学部	123人 (100%)	104人 (84.6%)	18人 (14.6%)	1人 (0.8%)	0人 (%)
医学部 保健学科	163人 (100%)	157人 (96.3%)	3人 (1.8%)	3人 (1.8%)	0人 (%)
歯学部	40人 (100%)	37人 (92.5%)	2人 (5.0%)	1人 (2.5%)	0人 (%)
歯学部 口腔生命福祉 学科	20人 (100%)	20人 (100%)	0人 (%)	0人 (%)	0人 (%)
工学部	507人 (100%)	443人 (87.4%)	47人 (9.3%)	16人 (3.2%)	1人 (0.2%)
農学部	168人 (100%)	158人 (94.0%)	8人 (4.8%)	2人 (1.2%)	0人 (%)
合計	2,319人 (100%)	2,039人 (87.9%)	218人 (9.4%)	55人 (2.4%)	7人 (0.3%)
(備考)					

授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

(概要)

シラバスについては、「シラバス作成に関するガイドライン」を策定している。シラバスに記載する各項目については、毎年、ガイドラインを見直し、改善案は、全学委員会等で審議を行い、承認されたガイドラインに基づき、シラバスを作成している。

学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

(概要)

ディプロマ・ポリシーで定めた人材育成目標に対しての学修成果を図りつつ、各教育課程における卒業要件単位を修得した学生に対し、各学部の教授会において、学位授与の要件を満たしているかについて判定を行っている。

学部名	学科名	卒業に必要な 単位数	GPA制度の採用 (任意記載事項)	履修単位の登録上限 (任意記載事項)
人文学部	人文学科	124単位	有	22単位
教育学部	学校教員養成課程	124単位	無	単位

法学部	法学科	124 単位	有	22 単位
経済学部	経済学科	124 単位	有	22 単位
	経営学科	124 単位	有	22 単位
経済科学部	総合経済学科	124 単位	有	24 単位
理学部	理学科	124 単位	有	28 単位
医学部	医学科	229.5 単位	無	単位
	保健学科	124 単位	無	単位
歯学部	歯学科	191 単位	無	単位
	口腔生命福祉学科	145 単位	無	単位
工学部	工学科	124 単位	有	28 単位
農学部	農学科	124 単位	有	24 単位
創生学部	創生学修課程	126 単位	有	24 単位
G P A の活用状況（任意記載事項）		公表方法：		
学生の学修状況に係る参考情報 （任意記載事項）		公表方法：		

校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

公表方法：

新潟大学ホームページにおいて公表しているもの（URL は以下のとおり）

<https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/compliance/education/>

新潟大学ホームページ及び印刷物として公表しているもの

- ・新潟大学概要 2019（URL は以下のとおり）

<https://www.niigata-u.ac.jp/university/pr/publications/data-book/>

- ・大学案内 2021（URL は以下のとおり）

<https://www.niigata-u.ac.jp/university/pr/publications/guide/>

授業料、入学金その他の大学等が徴収する費用に関すること

学部名	学科名	授業料 (年間)	入学金	その他	備考(任意記載事項)
人文学部	人文学科	535,800円	282,000円	0円	
教育学部	学校教員 養成課程	535,800円	282,000円	0円	
法学部	法学科	535,800円	282,000円	0円	
経済 科学部	総合 経済学科	535,800円	282,000円	0円	
理学部	理学科	535,800円	282,000円	0円	
医学部	医学科	535,800円	282,000円	0円	
	保健学科	535,800円	282,000円	0円	
歯学部	歯学科	535,800円	282,000円	0円	
	口腔生命 福祉学科	535,800円	282,000円	0円	
工学部	工学科	535,800円	282,000円	0円	
農学部	農学科	535,800円	282,000円	0円	
創生学部	創生学修 課程	535,800円	282,000円	0円	

大学等が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

<p>a. 学生の修学に係る支援に関する取組</p> <p>(概要)</p> <p>高等教育の修学支援新制度 令和2年度から開始となった高等教育の修学支援新制度により、学力基準、家計基準等の一定の要件に該当する者に対して、日本学生支援機構による給付奨学金の支給と授業料等減免を併せて行っている。</p> <p>奨学金 日本学生支援機構や民間の育英奨学事業団体等によるもののほか、新潟大学独自のものとして、主に以下の支援を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輝け未来!新潟大学入学応援奨学金(予約型奨学金) ・学業成績優秀者奨学金 ・修学応援特別奨学金 ・修学支援貸与金 <p>授業料免除等 学力基準、家計基準等の一定の要件に該当する者に対して、入学料及び授業料の免除等を行っている。</p> <p>上記の詳細については、以下のURLのとおり。 https://www.niigata-u.ac.jp/campus/economic/</p>
<p>b. 進路選択に係る支援に関する取組</p> <p>(概要)</p> <p>○ キャリアコンサルタント等による個別相談・面接指導・履歴書添削</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象：全学年 ・実施期間：通年 ・進路の個別相談、面接指導(練習)、履歴書(エントリーシートを含む)の添削等の実施。

- 全学就職総合ガイダンス
 - ・対象：学部3年生，大学院1年生
 - ・開催時期：9月下旬
 - ・就職活動を行うに当たっての心構えやスケジュール等について説明
- 業界研究セミナー
 - ・対象：全学年（主に学部3年生，大学院1年生）
 - ・開催時期：10月～11月
 - ・就職活動開始前に様々な仕事の魅力や業務内容等に関する情報提供を行い，職業選びの視点を広げ，仕事理解に繋げるためのセミナー。各業界を代表する企業様の協力のもと実施。
- 企業等合同・個別説明会
 - ・対象：学部3年生，大学院1年生
 - ・開催時期：3月
 - ・企業等約400機関（個別は，約110機関）を集め，学生動員は延べ1万人を超える学内で開催する最も大きな就活イベント。

c. 学生の心身の健康等に係る支援に関する取組

（概要）

学生の心身の健康等に係る支援については，保健管理センターにおいて，健康診断の実施，その事後措置としての保健指導，身体的及び精神的な健康相談等を行っているほか，学生支援相談ルーム，特別修学サポートルーム，学生なんでも相談窓口，各学部等に配置された相談員がそれぞれ連携を図りつつ，学生の心身の健康等に関する相談に対応している。

教育研究活動等の状況についての情報の公表の方法

公表方法：新潟大学ホームページにおいて公表

・教育関連情報に係る公表方針（URLは以下のとおり）

<https://www.niigata-u.ac.jp/university/about/compliance/education/>

・研究者総覧（URLは以下のとおり）

<https://www.niigata-u.ac.jp/contribution/researchers/>

備考 この用紙の大きさは，日本産業規格A4とする。